

「パリの住人の日記」校注（3）

堀越孝一

「パリの住人の日記」から1429年（新暦）の記事を校訂し、日本語に訳し、注釈する。ヴァチカン図書館所蔵「スウェーデン女王蔵書1923番写本」のfol.113v.からfol.122r.にかかる。

『人文』1,2の掲載分に続けて、1413年以降の記事を、時間を追って読んでいくつもりだったが、昨年から今年にかけて、大学を退職することに伴う用事に追われて、書き下ろしの原稿は整わなかった。そこで机中の原稿の埃を払って、手を入れ、投稿することにした。在職中、西洋史特講「中世の秋の時代史」や、並行して進めていた「ヴィヨン遺言詩注釈」の仕事に使いながら、折を見ては少しずつまとめて、発表の機会を窺っていた論攷である。

1429年の記事に限定したのは、ひとつにはジャン・ダール（ジャンヌ・ダルク）が登場して、権兵衛が「噂のむすめ」に食いついて喉を鳴らしている。その気配がなんともおもしろく、これはぜひともみなさんにご紹介したいと思ったからである。

項分けの累積番号は、今回はテュテイの項番号を借りることにした。1413年以降、通しで番号は打ちかねるからである。いずれ、1413年から1428年までの分の原稿をまとめ次第、記事の累積番号は整理したいと考えている。

(494)

このころ、セルヴェーズのカトリエームは6千6百フランにもなった。ブドウ酒のそれはその3分の1にもおよばず、それというのもくだんの年、新酒の出来はまことにその量少なく、腰の弱いもので、これはもう斟酌しようもないほどで、なにしろまあましなもので、いや大方は、ブドウ酒といわんか、これはブドウ汁だったのだ。だからブドウ酒はとても高くなり、デパンスのよりはいくらか腰のあるののカク樽に4リーヴルペリジの値を付ける始末。4フランより安めなのは手に入らなかったのだ。

[注釈]

「カトリエーム」

テュテイはこの語の初出の(302)の脚注に *quatrième (denier)* と *denier* の語を補って、

なにか「四つ目のドゥネ」と、小売価格の4ドゥネごとに1ドゥネ、だから「四が一」の課税と理解しているような口吻を洩らしているが、これは憶測に過ぎない。25パーセントの消費税なんておそろしい。最近の、とはいっても1983年の出版だが、ランカスター家のノルマンディー支配を多角的に考察するG.T. オールマンの本がある。その第6章が経済政策を論じているが、「フランスとイングランドの王家」とノルマンディーの「等族会議」との折衝についての記述に *quatrième* なる語はまったく登場しない。*dixième* は出る。「十分の一税」ですな。これは、まあ、消費税としては妥当(?) といってよい。「四が一」を匂わせるような記述も見られない。

パリの話ではないか。ノルマンディーではないという感想をお持ちかもしれないが、この時期、「フランスとイングランドの王家」の支配は「ノルマンディーとパリ」であって、なにもそれぞれに分けて政策を適用していたわけではない。

この語の初出の記事は新暦1421年初頭のものだが、それを見ると、権兵衛は *impositions quatriesme et males toutes* とまとめて書いていて、*males toutes* は *maltote* と書かれ、さかのぼって14世紀初頭、カペー家のフランス王フィリップ4世の時代の「悪税」をいう。*impositions* も「課税」であって、特定の税を指す言葉ではない。*quatriesme* はそれらとならぶ「税金」をいう言葉だった。

テュテイの脚注に「税金はカルチエごとに請け負わされた。リアル、ラ・シテ、ラ・グレーヴ、ウートゥル・プチ・ポンがそれぞれに別個の地区を作った」と読める。テュテイはアルシーヴの史料を見て内容を要約しているのだが、テュテイ自身は気づいていないようだが、これは示唆的だ。「カトリエーム」は、なんらかの特別税徴収の単位となる「税区」を本来意味した。パリの街区「カルチエ」、あるいはカルチエをいくつづつかまとめて、パリを「四区」にわけた、そのひとつづつの「四分の一」、「ルカール」から、「カトリエーム」の呼び名が出たのだろう。

権兵衛(日記の筆者)の所属する「税区」が請け負ったセルヴェーズ(ビール)の消費税額が、なんと6,600フラン(リーヴル)にのぼったといいたがっている。

「デパンスの」

「デパンス」*despence* (*despense*) は、このケースは *Speisekammer* 「食糧の貯蔵室」の意味か。トブラー—ロンマッテ御両所は、*vin de despense* を一例だけあげ、*der geringe Wein* 「料理用の安酒」の解を与えている。

「カク樽に4リーヴルペリジの値」

カクはオランダ語のカーケンで、もともとニシン樽。ほぼ60リットルの容量。カク樽が4リーヴルペリジだって? 80スーペリジ。トゥルネに直して100スー。1リットルが3分の5スー。これは高いなんてものではない。「4フラン」はトゥルネでそのまま80スー。安くても3分の4スーだというのだから、たしかなのだろう。ちなみにテュテイは「4リーヴ

ルペリジ」を、なにを思ったか「4 トウルネペリジ」と読んでいる。ポーンは、これは全編通じてそうなのだが、ペリジ (パリジス) と「トウルネ」の両替比を逆にして解説してみせている。なお『日記のなかのパリ』『むかつく麦酒は新酒のぶどう酒』をごらんください。

(495)

このころ、パリの町人は、オルレアン包囲の軍勢にとどける小麦粉を調達しなければならなかった。3百台もの荷馬車に積みこむほどの量で、その荷馬車とか馬とか、そのほか輸送に必要な物品全部がパリ周辺の土地の住人の負担となったのだ。金が出せなければ、パリにやってきて、その分、9日分まで働くのだったが、それ以上はいなくてもよかった。それがかれらは、9日を過ぎても、さらに9日、費用自分持ちで働かされて、馬も (とられて)、これはなんとも重い負担だった。2月12日、大兵団が出発し、エタンプまではなにごともなく着いた。それがそこからほんの少し先に進み、ボースのカンヴィルとトゥームレ・サンドウニと呼ばれる村のあいだにさしかかったとき、8千のアルミノー勢がやってきて、とんと大勢のこどもたちがダンスをして見せているふうで、こっちへこいといわんばかりだった。わが方の軍勢はこれを見て、なんとか陣地を作って、そのまま動かないでいた。わが方は、片方を鋭くとがらせ、片方に鉄輪をはめた太い杭をたくさん用意していた。かれらはそれを敵方に向けて傾けて地面に植え込んだ。片側にパリの弓兵と大弓兵が配置された。これがわが方の陣形の一翼を作る。もう片方はイギリス人の弓兵のだ。こうして中央にグロス・バテーエを迎え入れられるかたちにした。なにしろ7千に対して千5百もいなかったのだ。アルミノー13に対してわが方2だ。レザルミノーは遠くわが方のまわりをまわっているふうだったが、やがて近づいてきて、わが方がしたようなしかたで陣形をとった。そこでわが方の (伝令使を派遣して) かれらに対し要請したことに、もしもわが手のものを捕らえたれば、そのものしかるべく処置されんことを、すなわち身代金がかげられるべきである、と。これに対してかれらの応えていうには、なかんずくブルボン殿のいうには、かりに一兵の逃亡することあり、全員剣に倒されることなかりせば、神の助けわれになしと知る。伝令使たちのふたたびもどりくることあれば、死を覚悟せよ、と。伝令使からこの言を伝え聞いたわが方の兵士たちは、荷馬車の後方に逆茂木を植え込んで防備をかため、われらが主の加護を求め、よいはたらきができますようにと、それぞれ、神に祈った。次いで、目前に迫った大危険をかわずべく、荷馬車引きともども、全員荷馬車を守れと命令が出された。案の定、かなりの数のレザルミノーが、わが方の荷馬車を奪おうと、背後からせまったのだ。かれらがやってくるのを見て、逃げだそうとした馬車引きたちがいた。それがレザルミノーがかれらの前方に立ちふさがり、身体に損傷をくわえたのだ。なかには死んだものもいた。レザルミノーは次いで掠奪にかかったが、抵抗がはげしく、逃げ出すことができたのは大喜びだった。荷馬車引きたちがこうして掠奪を防いでいる間に、レザルミノーがわが軍に接近した。ガス

コン勢がいた。全員馬に乗っていて、その主力はパリの軍勢、大弓隊と弓隊に向けて配されていた。スコットランド勢がイギリス勢に対して配され、グロッセ・バテーエに対してはグロッセ・バテーエが配された。パリの軍勢は、騎馬の兵たちが自分たちの方へ向かってくるのを見て、さかんに弓を引き、大弓を発射しはじめた。ガスコン勢はこれを見るや、面頬を下げ、飛びくる矢から馬を守ろうと、槍をまっすぐ前に構えて、拍車を力一杯蹴った。あたかも弓勢を皆殺しにしてくれようと思論んでいるものようだったが、いかんせん、離れすぎていた。かれら不運者、悪人輩、呪われた者どもは、眼前に禍の種がありながら、それが目に入らなかつた。なにしろ拍車を入れて近づくと、馬は打ち込まれた杭の立ち並ぶただ中に突入する羽目になり、杭は馬の胸に、腹に、脚に突き刺さる。もはや前に進めず、馬は倒れて死ぬ。主人の乗り手も後を追う。地面に落ちたものは、なかまに向かってヴィラ、ヴィラと叫ぶ。もどれ、もどれの意味だ。そこでかれらは逃げようと思ったのだが、馬はくだんの杭で傷つき倒れて、足下に死んでいる。馬は2頭また3頭と倒れて横たわり、後に続いた馬と人をもんどり打たせたのだ。スコットランド勢ほか、(レザルミノー)は、この光景に接するや、怖じ気づき、逃げ足になった。狼に追い散らされる動物の群れさながらで、それをわが方の兵がピツタリ追尾し、追いつくや、殺したのだ。戦場に死者4百余名が残された。捕虜になったもの多数。悪人どもはオルレアンに逃げ込んで命助かろうと考えたのだが、それがセジュ(町攻めの包囲陣)の兵に見つかった。かれら(イギリス勢)は(敗残のレザルミノー)を正面から迎え撃って、大勢殺した。くだんの戦闘の死者の数とどちらが多いかというほどに殺したのだ。敵を皆殺しにしてやろうと考えたペシェ(罪科)のむくい、こういうことになったのだ。敵の剣に倒されることなく、身を守ることができていたなら、どんなにかよかったことだろう。わが方の軍勢は、町攻めのオスト(軍隊)に食糧を運び込んだのち、1428年2月19日、パリに帰り着いた。パリの兵士は、戦闘で4人しか死んでいなかった。ほかに逃げ出そうとした荷馬車引きが数名。負傷したものは大勢いた。双方にとって、これは傷ましい出来事だった。キリスト教徒が、このように、理由も分からず、おたがい殺し合う。おたがい、百リユーも離れているというのに、わずかな金儲けをしようと出かけてきて、たがいに殺し合う。それが身体を絞首台に吊すことになる。あわれ魂を地獄に突き落とす羽目になる。

[注釈]

「輸送に必要な物品」

前項に「カク樽」の話題を出したのはひっかけか？ なんと、まあ、マニエリスト！ と勘ぐりたくなるところで、というのはベドフォード侯がこのとき送り出した輜重隊の荷馬車には「ニシン」がたくさん積み込まれていた。「ニシン」ねえ。「アラン・ソレ」と「アラン・カケ」はちがうのだよ。前者は燻製。後者は「カク詰め」、つまり塩にして樽に詰めた

しろもの。ちなみに『形見分けの歌』7節の注釈をごらんください。いいえ、わたしがいうのは燻製のだか、塩ニシンだか、なにしろ戦場にニシンが散乱して、世人は「ジュルネー・デ・アラン」（ニシンの合戦）のことを噂したということです。それが日記の筆者は、ここではニシンに関心を払っていない。ということはそれほどニシンの噂はパリに立たなかったということか？

「ボースのカンヴィル」

テュテイがなにかムキになって、ローマ写本は Canville と書いている。信じられない。パリ写本の Iainville をとるべきだと主張している。前年、1428年8月の記事に、テュテイ編集で486項の記事だが、canville はすでに名指されている。

「428年8月のころ、サルスブリ伯が軍勢を率いてノジャン・ル・ルエの町をとり、ボースの inville をとり、ロシュフォールをとり、そこからシャトーダンとオルレアンへ、町の前面で飲みに行った」

おもしろい記事ですね。「町の前面で飲みに行った」は直訳です。

ノルマンディーのランカスター家がオルレアン包囲戦をはじめたことを伝える記事である。それには、ごらんのとおり、inville と書いてある。ただ、i の字が c にも見える。そういうあいまいな書き方をされていて、そこで、この記事では、しっかり canville と書いている。

前出の1428年の記事の方には、余白にクロード・フォーシェの書き込みが見られ、janville と見える。その通り、じつはいまでも Janville と綴る、これはボース平野の町のひとつである。だから canville は誤記だと指摘するのはよい。ただ、あまりにはっきりと canville と見え、前出の記事の方も inville ではなく cnville と読んで読めなくはない。canville を省略してこう書いていると読んで読めなくはない。

権兵衛は、あるいはヴァチカン写本の筆生マシオは、「ジャンヴィル」ないし「ヤンヴィル」を「カンヴィル」あるいは「サンヴィル」と覚えてしまっていたのか？「ジャンヴィル」と「サンヴィル」は通じます。テュテイのことあげする「パリ写本」は校合の相手方として信用ができない。

「トゥームレ・サンドウニ」

パリ写本も「トンミレ」とかなんとか書いているが、ここは日記の筆者の耳の問題か。「ルーヴレ・サンドウニ」rouvray st denis と触れ屋はちゃんといったのです。

「大勢のこどもがダンスをして見せているふうで」

なんとねえ、苦しまぎれの訳です。テュテイは une dance を un danel と校訂した。パリ写本のをとったというのだが、「ダネ」だか「ダノ」だか、なんの意味だか、コメントしているわけではない。わたしははじめ une dune と読んだが、「砂丘」ですねえ、景色としてはよいけれど、字のカタチとしてよくない。やはり「ダンス」でしょう。

「グロッセ・バテーエ」 grosse bataille

なんか『遺言の歌』の「グロス・マルゴ」を連想する。いいえ、なんの関係もないわけで、「バテーエ」がグロである。「バテーエ」は「コール・ダルメ」の意味でよく使われた。なんのことはない、「本隊」です。左右に翼軍を配し、中央に騎馬武者を中核とする本隊を置く。グロだから「大本隊」か。

「アルミノー13に対してわが方2」

この計算はどういう計算か。まちがっているのいないのはどうでもよい。日記の筆者の脳に走った数列を知りたい。

「(伝令使を派遣して)」

こう、カッコ書きしないと、コンテキストがつかまめない。なお、以下、伝令使をたがいに走らせて合戦の打ち合わせをするくだりの文章は、脱落が多く、まとまりがない。テュテイの校訂はかなりムリがある。

「ブルボンの殿」

クレルモン伯シャルル・ド・ブルボン。父親のブルボン侯ジャンは捕虜としてロンドン塔に滞在中で、オーヴェルン山中に所領を集積中だったブルボン家を束ねていたのはこの若者だった。やはりオーヴェルン山中の豪族で、ドーファン・ドーヴェルン領を領する一族の頭、ドーファン・ドーヴェルン、クレルモン伯ペロー3世と組んで、ベリーに政権を構えた「王太子シャルル」を支えた。『遺言の歌』注釈「16 どこだ、コント・ドーファン・ドーヴェルン」をごらんください。

「ガスコン勢」

ピレネー北麓のガスコーン（近代の発音でガスコーニュ）にはアルマナック家ほか有力領主が展開していた。北のグワイエン（古名アキテーンのなまり）にランカスター家の領土が存在している関係上、このあたりの政治情勢はつねに流動的である。「王太子シャルル」はこの地域への対策も怠っていない。

「飛び来る矢から馬を守ろうと、槍をまっすぐ前に構えて」

景色は想像できますか。矢の飛んでくる方向に向けて馬を立てる。横向きにたたずんだら、宙空から降ってきた矢が胴体にブスブス突き刺さってしまいます。

「ヴィラ、ヴィラと叫ぶ。もどれ、もどれの意味だ。」 *viras*

「ガスコン勢」が叫ぶというのだから、オック語ということか。トルバドゥールの言語で、それがトブラー-ロンマッチを見ても、なんの変哲もない、*virer* は北フランスのトルヴェールの物語詩にふつうに出る。とりたててオック語の指摘もない。ロマンス語のごく初期のころから「転回する」の意味でふつうに使われたコトバだ。

「それがセジュの兵に見つかった」

「セジュ」は近代語の発音で「シエージュ」、包囲陣のことである。前年1428年11月以降、イギリス軍はオルレアン周囲にいくつかの砦を構築して包囲戦の構えをとった。冬は戦争の

季節ではない。北に向かうパリ－オルレアン街道の根方には「パリス砦」と「ルーアン砦」、シャトル方面に向かう道の起点には「ロンドン砦」といったぐあいだ。日記の筆者のいつている「セジュの兵」というのは、たとえば「パリス砦」の兵員が考えられるが、ただパリ－オルレアン街道の起点の門「ベルネー門」と「パリジス門」は、前年の12月までに、イギリス軍によって封鎖されていた。あいていたのは東の門「ブルグーン（ブルゴーニュ）門」だけだった。「オルレアンに逃げ込んだ」軍勢は、この門を入ったのだ。

「敵を皆殺しにしてやろうと考えたペシェのむくいで」

「ペシェ」pecheはキリスト教の玄義では「原罪」だが、日記の筆者は「罪科」というほどのやわらかい意味でこれを使うことがある。ここもその例で、なお「アネス・ソレル」をめぐるこの語の使いようなど、どうぞ索引をご利用になって、調べていただきたい。いずれ、この校注の仕事の完成後、「索引」を用意する所存です。なお、「ヴィヨン遺言詩注釈総索引」にあたって、「サンブネの司祭」のコトバ配りにについてもお調べねがいたい。

「おたがい、百リユーも離れているというのに」

「リユー」はほぼ「里」にあたるから、「4百キロ」ということになる。どこからどこまでを考えているのか？

「それが身体を絞首台に吊すことになる。あわれ魂を地獄に突き落とす羽目になる」

このあたり、「サンブネの司祭」のスュスタシオン（教唆）にのせられたか。いいえ、道学者なんだと思うわけでした、それがこの結文の文字配りは、なにかよくわからない。そのまま訳せば「少しばかりのカネを稼ごうと、あるいは身体に絞首台を。あるいはあわれな魂に地獄を」？ 絞首台や地獄を稼ごうというのか？

(496)

このころ、サンジャック・ド・ラ・ブーシェリー教会で、ノートルダムにならって定時課があげられることになった。1429年1月16日日曜日（がその最初の日だった）

[注釈]

「サンジャック・ド・ラ・ブーシェリー教会」

シャトレ前広場に存在した教会堂。近辺に食肉業者の組合本部と店屋が集中していて、この教会の最大手の檀家だった。現在、その跡地と目されるところが小公園のしつらえになっていて、「サンジャックの塔」と呼ばれる構築物が立っている。

「定時課」heures canoniaux

定時の聖務日課。真夜中すぎの朝課と讃課、午前6時ごろの一時課にはじまる日中の日課、三時課、六時課、そうして九時課。夜に入って晩課、終課の八定時課をいう。

「(がその最初の日だった)」

なにしろヴァチカン写本の筆生は日付を投げ出すように書いているだけで、書き出しの「このころ」 en ce temps と照応しないことはなほだしい。おまけに、じつは文末に qui estoit par v と書いている。テュテイは知らんぶりだし、ボーンは「エパクトの数字だ」と知ったかぶりをしてみせているだけで、ちゃんと理解したのかどうか。太陰暦と太陽暦の暦の日数のズレに係する係数値だつて？ なにしろ分からない。

(497)

4月4日、サンタンブレーズの日、ブルグーン侯が騎士と従騎士のなんとも見場のよい一隊を引き連れてパリに帰ってきた。その後8日ほどたって、フレール・リシャルという名のコルドウレ僧がやってきた。なにしろ頭のいい僧で、説教に長け、教訓を垂れて、隣人を教化する。その働きたるや大変なもので、この目で見なかったならば、どうしてどうしてなかなか信じがたいものがあった。なにしろパリに滞在中、説教をしなかった日は一日たりともなかったのだ。4月16日土曜日にサントジュヌヴィエーヴで行ったのを皮切りに、続く日曜日、また続く1週間、すなわち月曜日、火曜日、水曜日、木曜日、金曜日、土曜日、そうして日曜日とレジノッサンで。朝の5時ごろから説教をはじめ、10時から11時のあいだまで続ける。説教にはいつも5千から6千人が集まった。ラ・シャロンヌリーに面する納骨堂に背を向けて、ダンス・マカーブルのかたえに、1と半テーズの高さの壇にのつて、僧は説教した。

[注釈]

「サンタンブレーズの日」

近代のカトリック教会の聖者祝日暦では、4世紀の大学者、ミラノ司教アンブロシウスの祝日は12月7日である。中世の秋のフランス教会が4月4日を祝日にとっていたそのイキサツは不明だが、アンブロシウスは397年4月4日に死去したという伝えがある。これからかもしれない。ちなみにいまのフランス教会の聖者祝日暦は4月4日を「サンティジドール」にあてている。7世紀のスペインはセビーリャの司教イシドルスの祝日です。なんとねえ、イシドルスは「偽イシドルス文書」で世を騒がせた。なんかおもしろい。

「ブルグーン侯がパリに帰ってきた」

ブルグーン侯おひとよしのフィリップは1428年5月22日にパリに「やってきた」vint、6月2日「立ち去った」sen alla、そういう経過で「帰ってきた」revint。もつと以前をいえば、1424年11月、パリを「立ち去った」sen allaのが、3年半ぶりに「やってきて」、すぐ「立ち去って」、そうしていま「帰ってきた。」おもしろいですねえ。そうして、次項の書き出しにお目をおやりください、おひとよしは、「アンヴァンション・サンドウニ」の日、4月22日、自分の領国のフランドルへ「帰っていった」sen retouna

「フレール・リシャールという名のコルドウレ僧」

コルドウレ（近代の発音でコルドリエ）はフランチェスコ修道会の修道士の通り名。「コルド」、綱を帯替わりに使ったことからだという。パリのコルドウレはセーヌ左岸の西の門、サンジェルマン門のかたえに長々と壁を立てていた。『形見分けの歌』12節と32節の注釈をごらんください。それが「フレール」はコルドウレ同士が使う尊敬語。かなあ。学校の先生とか政治家の先生みたいなものだ。原義は「兄弟」で、コルドウレは開基のフランチェスコ上人の志を継いで、自分たちのことを「フレール・ムヌ」、ちっぽけな兄弟たちと称していた。

閑話休題。「兄弟リシャール」は、前年、1428年の「待降節」にトゥレ（近代の発音でトロワ）で説教師として評判をとった。「待降節」はラテン語で「アドウェントゥス」、フランス語で「アヴァン」で、クリスマス前の4週間の祭期をいう。11月30日のサンタンドレの祝日に一番近い主日（日曜日）から数えて主日を四回重ねて12月24日にいたる。「去年の師走に」といったところでしょうか。その翌年の1429年の4月にパリに説教にやってきた。7月にはトゥレにもどっていた。そこに、11日、ジャン・ダールを引き連れた王太子の軍勢がやってきた。市政府に要請されて、コルドウレ僧はジャンに接近する。

このあたり、フレール・リシャールとジャン・ダールの接触について、19世紀のキシュラにはじまって、なにか熱に浮かされたような発言が目立つ。フレール・リシャールと「ジャンヌ・ダルク」の親密な仲を噂する。それが翌々年3月のルーアンの宗教裁判法廷で、ジャン・ダールはトゥレでのコルドウレ僧との出会いについてあいまいな発言をくりかえす。だいいち、トゥレには泊まったわけではない。コルドウレ僧が説教を行ったかどうか、わたしは知らない。ランスの教会堂で王太子が王塗油の秘蹟を受けたとき、フレール・リシャールはそばにいたと思うが、よく覚えていない。

カモフラージュですよ。発言に注意していたのだとあくまでいいはる手合いが後を絶たないが、わたしのいうのはこの件はまだ実証されていない。発言には注意すべきである。「ルーアンの裁判記録」の1431年3月3日土曜日第6回法廷の記録をごらんください。

「隣人を教化する」ediff son pisme

ediffはediffierの略した書き方。pismeも略していて、proismeだが、これまたラテン語からかなり略されたカタチでフランス語になっていて、proximumです。親族あるいは隣人をいう。ここのところのコンテクストから、このコトバづかいはおもしろい。なにしろフレール・リシャールはトゥレからやってきたのですよ。パリの住人を「プレスム」だと思っていると日記の筆者は思っている。

「サントジュヌヴィエーヴ」

セーヌ左岸、パリの南の門サンジャック門のかたえの由緒ある修道院。5世紀のパリのキリスト教徒の女性メンター、ゲノウェファを開基とする修道院。19世紀にパンテオンに飲

み込まれた。サンブネ教会が近代ソルボンヌに食べられてしまったように。

「また続く1週間、すなわち月曜日、火曜日、水曜日、木曜日、金曜日、土曜日、そうして日曜日」

ノエル・カワードの戯曲『スティル・ライフ』にこういうくだりがある。

(ローラ) なんて愚なんでしょう、あたしたち、どうしようもない愚か者……

(アレック) 金曜日、土曜日、日曜日、月曜日、火曜日、水曜日……

(ローラ) 木曜日……

いえ、なに、「逢い引き」の日取りの打ち合わせです。映画にもなりました。アレック・ギネスのアレックとシリア・ジョンソンのローラのコンビはなんともいえず大人の感覚でした。閑話休題。曜日を列挙するメンタリティーについて、どうぞ『中世の精神』「中世ナチュラルリズムの問題」をごらんください。

「ラ・シャロンヌリーに面する納骨堂に背を向けて、ダンス・マカーブルのかたえに」

なんだ、これは？ レジノッサン墓地の「ダンス・マカーブル」のことは1425年の、テュティ編集で422項の記事の注釈でご案内したが（この校注の仕事は、間をとぼしていますので、ご案内しきれませんが）、レジノッサン墓地の南側の道ラ・フェロンヌリー横町には高さ3メートルからの壁が立っていて、その内側にアーチ27間分という長大な回廊が設けられていた。その回廊の東より10間分の壁に「ダンス・マカーブル」の壁絵が見られたということで、仕上がったのは1425年の四旬節というのだから、それから5年しかたっていない。おそらく色が入っていただろうから、極彩色の、なんとも、わたしのいいたいのは教唆的な (suscitativ とかなんとか、コトバがあってもいいと思うのだが) 画面だったろう。

その「かたえに」とは、だからまことにけっこうな光景なのだが、「ラ・シャロンヌリーに面する納骨堂に背を向けて」というのはなんだ？ 「ラ・シャロンヌリー」は13世紀まで「ラ・フェロンヌリー」がそう呼ばれていたらしい。「シャロン」、車大工横町というわけ。それが例によって「サンルイ王のみぎり」（なんでもかんでも「聖王ルイ」のせいにするのが、昔も今も、フランス人は好きなのです）に、「フェロン」、金物商人の横町になったわけ。

横町、横町といっているのは、この道、2百メートルと、やたら長いけれど、幅は4メートル足らずです。ジャック・イレーレによれば、17世紀、ルイ14世の時代までついにそのままだったそうで、16世紀初頭にブルボン家初代アンリ4世が暗殺されたのがこの道だったというくらい（？）有名な道にしてはなんとも情けないことだった。おまけにルイ11世が、ということは日記の時代の直後ですよ、この通りのレジノッサンの壁沿いに小屋掛けして店を出してもよいと「通達」を出したものだから、小屋掛けして店をださなくてはいけないのだと思いこんだ手合いが現れて……

閑話休題。わたしがいうのは「ラ・シャロンヌリー」は「ラ・フェロンヌリー」の古名である。それが中世の秋に「ラ・フェロンヌリー」を「ラ・シャロンヌリー」と古名で呼んで

いる例をわたしは他に知らない。日記の筆者はなんでまた、古名で呼んだのか？ それに「に面する」もおかしい。encont だが、これは rencontre の略した書きようで、「対面する」の意味です。「納骨堂」といつているのは「回廊」のことだから、それが「ラ・フェロンヌリー」に「対面している」というのはどうなのか？ もしや「ラ・シャロンヌリー」は「ラ・フェロンヌリー」ではないのではないかと？ もしや「シャルネ」、納骨堂に対面して「ラ・シャロンヌリー」、車大工屋が店を拡げていたのではないかと？ なんともよく分からない。『遺言の歌』下巻の160節以下の注釈をごらんください。

(498)

アンヴェンシオン・サンドウニの祝日、ブルグーン侯はその領国のフランドルへ帰っていた。オルレアンのパリ包囲陣はいぜんそのまま、そのせいでパリでは食べ物がたいそう高くなった。なにしろ小麦粉をはじめ食糧、包囲戦に必要な物資を大量に送るよう強制されたのだ。みんなもって行ってしまっ、だからパリで小麦が値上がりし、なんととんでもない、土曜日から次の土曜日までに、20 スーペリジが40 スーペリジになったのだ。暮らしに必要なものぜんぶがそうだったのだ。そういうことで、くりかえしになるが、ブルグーン侯は、平和と庶民の暮らしにいいことはなにもしないで、出立したのだ。人の話では、なんでもレジュの人たちと戦争をしにいったとか。

[注釈]

「インヴェンシオン・サンドウニの祝日」

3世紀なかごろガリアを布教してまわり、パリで、ローマ人役人の手に掛かって殉教したディオニシウスの遺骸の「インヴェンシオン」、発見は4月22日と伝承されている。これはしかし地方レベルでの聖者崇拝儀礼にかかわる事柄で、フランス教会の祝日暦では、4月22日は、2世紀と3世紀のローマ司教で、ともに殉教したソーテルとカイウスの共通祝日となっている。

「レジュの人たちと戦争をしにいった」

1429年に入って、それまで冷却していたレジュ(近代語の発音で「リエージュ」、現地の呼称は「ライク」と)との関係がいささか熱くなってきた。レジュ領に入るディナンと、ナムー(近代語のナムュール)伯領のブービーンというふたつの町が、マーズ(フランス語でムーズ)川をはさんでいがみあっていた。これが導火線になった。2月初頭、ブルグーン侯おひとよしのフィリップは、レジュ司教領の領主であるレジュ司教とナムー伯をブルッセルに招いて宴を張っていた。そこにブービーン連中がディナンを襲撃するという事件が起きた。あきらかに狙っての行動だった。火がついた。おまけに3月に入っすぐ、ナムー伯が死去し、以前からの契約で、おひとよしがナムー伯に就任した。ますます抜き差しならない状況

に追い込まれたおひとよは、3月13日には、ナムーに関係者を招いて会議を催し、收拾をはかっている。4月4日にパリに「帰ってくる」まで、なにしろおひとよはエノーやレジュ方面で大忙しだったのである。パリの住人にブルグーン侯の動静がなんとなく伝わっていた事情は、織田信長の動静が京都の町衆のあいだになんとなく知れていたのと同断である。

(499)

続くサンマルクの祝日、くだんのコルドウレ僧がプールン・ラ・プティットで説教した。このときもまた、大勢の人が集まった。そうしてこれぞ実正、その日、説教を聞いて帰るや、パリの人たちは、なにしろ信心に熱く燃えたものだから、3時間、せいぜい4時間しないうちに、百箇所もに焚き火が焚かれて、卓子、チェス卓子、ダイス、カルタ、ビアール球戯の球とスティック、ヌレリとか、そんな遊び道具が投げ込まれて燃やされたのだ。みんな怒り狂って、このカネの亡者の遊び道具めと盛大に悪口をいいながら放り込んでいた。

[注釈]

「サンマルクの祝日」

福音史家マルコの祝日。4月25日。

「プールン・ラ・プティット」

いまはプーローニュ・ピランクルのノートルダム・ド・プーローニュ教会になっている。パリの西の郊外のルーヴレ森が開発されていく過程で、プーローニュ・シュール・メールのノートルダム教会の姉妹教会が建てられた。姉教会の方がラ・グランドで、妹教会の方がラ・プティットというわけ。プールンこと、近代の発音でプーローニュの地名がこれに由来した。

「卓子、チェス卓子、ダイス、カルタ、ビアール球戯の球とスティック、ヌレリとか、そんな遊び道具」

原語をカタカナ表記すれば「ターブル、タブレ、デ、クアルト、ビル、ビアール」で、「ターブル」と「タブレ」は、中世の発音では「タール」「タレ」。「ヌレリ」はそのまま、正直わからない。まあ、『形見分けの歌』と『遺言の歌』の注釈に書いておきましたので、「総索引」をご利用いただいて、お調べください。「ビル、ビアール」はとりわけおもしろく、『形見分けの歌』29節の注釈に書きました。

「みんな怒り狂って」

以下の文章は自信がない。もしかしたら原文そのものが整っていないのだ。テュテイ氏は知らん顔。

(500)

かみさんたちも、この日とその翌日、ブローとかトルフォーとか、帽子をしっかりと固めて前に折り返しをつけるための革の切れ端とか鯨の髭とか、なにしろそういった髪飾り物をみんな持ち寄って火のなかくべた。御婦人連も角とか尻尾とか、そういった虚飾の品々を捨てた。じっさいこのコルドゥレ僧は、パリで10回、ブルーンで1回、説教を行ったのだが、かれの説教は、ここ百年の間にパリで説教を行った説教僧のだれにも負けないほど多くの人々を信心に目覚めさせたのだ。

[注釈]

「かみさんたち」「御婦人連」

この訳語にこだわるつもりはない。前者 *les femmes* は「女たち」とやわらかく訳したほうがいいのかもしい。それが数行あとに *les damoiselles* とくる。対比している気配で、そうなると前者は亭主持ちの町のおかみさんたち、後者は身分のある女性というふうにとったらどうだろう。

「ブローとかトルフォーとか」

以下の文節については、『遺言の歌』上巻「8 人のよはひは草のごとく」に述べた。39節の注釈である。

「ふさふさと毛皮の襟の奥様連も、あれこれいわず、どんな身分の女たちも、高々と髪を盛り上げ飾り立てた女たちも、死は区別せず、どんどんつかまえる。」

そうサンブネの司祭は歌っていて、「ダーム・ザ・ルブラッセ・クレー・ド・ケルク・コンディシオン・ポルタン・サトゥー・セ・ブルレ・モール・セジ・サン・セクセプシオン」

「ルブラッセ」は「折り返し」と訳語をつけた「ルブラ」の動詞のかたちで、「アトゥー」は、サンブネの司祭の歌の方では「アトゥール」と書いたが、「アトゥーレ」まわりをとりまくの意の動詞の名詞のかたちだ。「髪飾り物」と訳した。サンブネの司祭の方の「ブルレ」は、日記の方の「ブロー」のちがうつづり。「ブルレ」、すなわち動物の毛で作った冠、あるいは「蘭草」や鯨の髭で作った骨組みをいう。「トルフォー」は、これはおそらく「トルフ（トリュフ）」松露と関係がある。トリュフのかたちの髪飾り。分かりやすいですねえ。「角」と「尻尾」は、それぞれ原語は「レ・クールン」「ルー・クー」だが、ともに当時流行していた「エナン」円錐状の帽子のヴァリエーションだ。

(501)

これは本当のことだとかれがいうには、かれは最近シリアからきた。イエルサレムのことだが、そこでたくさんユダヤ人の群れに出会った。かれらを尋問したところ、かれらがこ

これは本当のことだというには、救世主が生まれた。救世主はかれらに相続を約束されたはずである。すなわち約束の土地だ。だから群れを作ってバビロンに向かったのだ。聖書によれば、この救世主は反キリストである。反キリストはバビロン市に生まれた。バビロン市はとくにペルシア人の王国の首都になっている。反キリストはベトウセダの町で育てられ、若年時にクルネムの町で改宗した。このふたつの町のことをわれらが主はこのようにいつている、ヴェ、ヴェ、ベトサイダ、ヴェ、ヴェ、コロナイム

[注釈]

「シリアからきた。イエルサレムのことだが」

ボーン女史はこのいいまわしに神経質に注記して、なんという不正確な認識！ と（！と書いている）なじっているが、当時の人たちが、シリアとかパレスチナとか、そのあたりの地理をどう見ていたか。まじめに問題にしたいのなら、まじめに議論すればよい。いまの常識から見て、なんという不正確さとなじってみたところでしかたない。

「聖書によれば」

以下の文節は、それ以前のがコルドウレ僧からの聞き書きで、以下は日記の筆者の感想と読めばよい。「反キリストはバビロン市に生まれた」の原文には doit と当為の助動詞が入っている。「生まれたはずだ。聖書にはそう書いてある」という思い入れだろう。そのバビロンはとくにペルシア帝国の町になってしまっていると、歴史的省察を加えている。

「反キリストはベトウセダの町で育てられ」

以下の文節は、「マタイによる福音書」11章と「ルカによる福音書」10章に書いてあることの写しだと、テュテイは注記し、そのうちのほんの数語だというのに、ごていねいにもそれを含むラテン語文を長々と引用している。イエスが洗礼者ヨハネの仕事を称える文章で、ヨハネはたくさんの町々で福音を宣伝した。それに応えなかった町々のなかで「コラジン」と「ベツサイダ」が一番ひどい。「ツロ」や「シドン」の方がまだましだ。「ソドム」の町はいまはないが、もし残っていたとして、くらべれば、「ソドム」の方がしっかりしているだろうと、なんと悪名高い「ソドム」にも劣る。「反キリスト」を生み、育てたのはそんな町々だったといたいのだ。ちなみに文語訳聖書はこう訳している。両方とも同じふうになっている。「禍害（わざわい）なる哉（かな）、コラジンよ、禍害なる哉、ベツサイダよ」

(502)

くだんのフレール・リシャールは、パリでの最後の説教をサンマルクの翌日、火曜日、429年4月26日に行った。そうして出発にあたっていうには、続く年、すなわち30年、かつて見られなかったほどに驚くべき事件がおこるのであろう。かれの師であるフレール・ヴィンサンが黙示録とモンセヌー・サンポールの書き物からそのことを証明している。フレール

ル・ベルナルもそのことを証明している。この僧もまた当代すぐれた説教師の一人だ。フレール・リシャルの高い評判はまたかれのものでもあるのだ。(フレール・リシャルがパリにいたころ) このフレール・ベルナルはアルプスの向こう側のイタリアで説教を行っていた。なにしろかの地でかれ以前2百年間に活動したどんな説教師にもまけないほどに大勢の人たちを信心に目覚めさせたのだ。さて、その火曜日、10回目ということで、なにしろそれ以上パリで説教する許可はとってなかったもので、最後の説教を終えるにあたって、フレール・リシャルが自身の魂の救いを神に乞い、パリの人々を神にとりなそう、かれのために祈ってくれ、パリの人たちのために神に祈ろうと語ると、会衆は、年寄りも若いのも、心痛に耐えかねて、さめざめと泣き、その風情、なにか最愛の友を葬ったかのような感じ、かれも同様だった。そうして、同日だかその翌日、この御仁は(パリを) 離れようと考えて、ブルグーン地方へ向かった。ところがかれの同行の執拗な願いに負けて、かれははじめてばかりの善導の成果をさらに固めようと、なおパリにとどまったのだ。大勢の愚かな人たちが隠し持っていたたくさんのマダゲールが焼き捨てられたのもこのころのことで、なにしろかれらはこのおぞまして代物をたいそう信奉していて、これをきれいな絹か亜麻の布に包んで大事に持っていさえすれば、生涯通じて貧乏になることはないとかたく信じていたのだ。それがこれをよろこんで捨てようという手合いがあらわれたのだ。これを信奉している人々をかの御仁が呪ったということを伝え聞いたからで、かれらが誓つていうには、かれらがもっているなにか価値あるもの以上のものを、いつも持つことになるだろうと自分から望んだことなど一日たりともないと。それがかれらは、くだんの代物がかれらを将来たいへん金持ちにするだろうとたいへん期待していたのであって、これはその筋の老女たちのよこしまな勧めによるので、かの女らはまさしくこれぞ妖術、異端の所業にほからならないこの手の悪行に手を染めていたのだ。

〔注釈〕

「出発にあたっていうには」

日記の記事には地の文に人から聞いた話とか人の話そのものが織り込まれている。その読み分けをきちんとしないと読みまちがいをしてしまうことがある。ここでは「フレール・ベルナルもそのことを証明している」までが、さしあたりフレール・リシャルの発言の写しだろう。「この僧もまた」以下「信心に目覚めさせたのだ」までは筆者のコメントである。こういう注というか解説文が随所に入ってくるのもまた日記の文章上の特徴です。

「フレール・ヴィンサン」「フレール・ベルナル」

前者のフォノグラフィーは近代のものは「ヴァンサン」、フルネームは「ヴィンサン・フェレ」、近代のグラフィーで「ヴァンサン・フェリエ」。もっともスペインのバレンシアの人だからスペイン語読みで「ピセンテ・フェレ」が正解かもしれない。しかしアヴィノンの法

王庁に就職した教会人で、教会分裂の解決に尽力した神学者だからというので、フランス人扱いされている。著述や説教集もよくフランス語で紹介されている。1455年に聖者に列せられた。

後者はこちらはイタリアのシエナを根拠地に活動したフランチェスコ会修道士で、ベルナルディーノ・ダ・シエナ。1415年のコンスタンツ公会議を機に結成された、英語でいえば「オブザーヴァンツ」、日本語では「フランチェスコ会原始会則派」のリーダーのひとりで、1417年ごろから説教活動を開始した。のちにローマに活動拠点を移すが、その礼拝堂はのちにイグナティウス・ロヨラの活動拠点となった。1439年のフィレンツェ公会議でギリシア正教との合同を策して活動するが、これはもうこの項目の注釈に必要な情報ではなかろう。ついでにいえば、1450年に聖者に列せられた。

「さて、その火曜日」

以下の文章は、またフレール・リシャールの話題にもどすよという含みでそう訳したのだが、原文は「エ・プー・ヴレ・ル・マルディ」とあっさりしたものである。唐突にコメントを入れ、唐突にもとの話題にもどす。これが日記の筆者の得意な話法である。

「この御仁は」

「ル・ブルドンム」、正直な人、まっとうな人と書いている。なんかこれまた唐突なエノンセで、「御仁」と逃げた。

「大勢の愚かな人々が隠し持っていたマダゲール」

ここもまた唐突に話題を変えて、「エ・アン・ス・タン・フィ・アルドウル」「また、このころ、焼き捨てた」と、文章をはじめている。「マダケール」は近代語では「マンドラゴラ」、地中海沿岸地域に自生するナス科の薬草で、シシリー島とイタリア半島南部のカラブリアにとくに多い。太い根が二股に分かれているところが人体を連想させ、そのあたりからか、妖術がらみの生薬として古代から伝承されている。惚れ薬のイマジナリーがなかでも強く、これまた後代の話になるが、16世紀のマキアヴェリの書いた戯曲に、これをそのままタイトルにとった作品がある。生薬の名前として、日本ではそのまま「マンドラゴラ根」と呼ばれる。主成分はアルカロイド。催眠、鎮痛、鎮咳薬としての薬効がある。ヨーロッパでは古く外科手術時の麻酔薬として使われていたが、現在ではほとんど使われていないと、参照した小学館の「日本大百科全書」の項目「生薬」に読める。

(503)

このころ、人がいうには、レール川縁にひとりのプセルがいた。予言者を自称してこれこれのことが真実となるであろうなどといっているという。フランス摂政とそれに味方するものたちに敵対していた。噂では、オルレアン前面に陣を構えるものどもをものともせず、大勢のアルミノー勢とともに、また大量の食糧を運んで市中に入った。陣のものたちはまった

く身動きできず、アルミノ一勢がかれらのすぐ近く、矢のとどくあたり、せいぜいその倍ほどのところを通り過ぎるのをただ見ているだけだったとか。なにしろ食糧がたいそう不足していて、じつに3ブランもするパンを食べていたとのことで、そのほか、そのプセルについていろいろと、ブルグノン勢やフランス摂政に対してよりもレ・ザルミノーに対してより好意をもつ人たちは語っていた。かれらは、かの女はまだほんの幼かったころ、子羊の群れの番をしていた、また、森や野原の鳥は、かの女が呼ぶとやってきて、飼い慣らされたもののごとく、かの女の膝の上でパンを食べたと断言した。イン・ウェリターテ・アポクリシウム・エスト

〔注釈〕

「レール川縁にひとりのプセルがいた」

「レール」は近代のフォノグラフィーで「ロワール」、「プセル」は、これはなんとも訳語が思いつかない。「むすめ」と以前から訳すことにしているのだが、もともと「プセル」はこのケースではとりわけ歴史用語なのでして、「人がいうには」ベリーのブルージュに王太子の旗を立てていた（そうして本人のつもりではフランス王の旗印を立てていた）シャルル・ド・ヴァレ（近代のグラフィーで「ヴァロワ」）、ヴァレ家の家督相続者と自称していたこの若者（1403年の生まれだから、まだ若者といってよいでしょう）が、この「ひとりのプセル」にはじめて会ったときに「プセル」と呼びかけた。それで「プセル」と呼ばれるようになったといい、このころフランドルのブルッヘ（フランス名で「ブルージュ」、近代のグラフィーで「ブリュージュ」）に住んでいたヴェネツィアのイタリア人パンクラチオ・ジュスティニアニーニというのがヴェネツィアの父親あてに手紙を書いた。『アントニオ・モロシーニの年代記』と呼ばれる編纂物に転写されて残っているが、それに「ポンツェラ」出現の噂が書かれている。フランス語の「プセル」をイタリア語で「ポンツェラ」といったらしく、これはだからかなり当時ひろまったこの「ひとりのプセル」の呼び名だったのでしょう。ラテン語の「プエル」、幼いという形容詞からの派生語であることはまちがいないが、どう派生が転回したかはよくわからないと、リトレも書いています。

「大勢のアルミノ一勢」「アルミノ一勢」「レ・ザルミノー」

前二者は「グラン・フェゾン・ダルミノー」とそれを受けた「レ」をこう訳し、後者は「レ・ザルミ（ノー）」と書いているのをそのままもってきた。「アルマナック派の軍勢」という意味です。ここではくだんの王太子シャルル・ド・ヴァレにお味方する領主たちの手勢の集合をいう。じっさいにはもう「アルマナック派」という党派的集団ではなくなっている。そのあたりの事情については、さしあたり『ジャンヌ・ダルク』を参照してください。

「また大量の食糧を運んで」

まじめなフランス人歴史家は、このあたりの情報に接して悲憤慷慨する。なんだと、かの

ジャンヌ・ダルクが食糧輸送隊と一緒にオルレアンに入城したというのか！というのです。いいえ、一々例はあげませんが、まあ、だいたいそんな反応です。まあ、ですからさしあたり『ジャンヌ・ダルク』あたりをごらんになってください。シャルル・ド・ヴァレの姑にあたる前のアンジュ侯妃、「レーン・ド・シシル」、シチリア王妃ヨランド・ダラゴンの肝煎りで用意された食糧輸送隊につけて、ヨランドの婿は「ひとりのプセル」をオルレアンに送り込んだのです。

食糧輸送隊がどんなにか待ち望まれていたか、日記の記事はあますところなく、いきいきと書いているのではないか。オルレアンの住人は「じつに3ブランもするパン」を食べざるをえない羽目になっていたのです。「ブラン」は公定の価格では10ドニエの銀貨だが、流通価値はその時々でちがう。また「プティ・ブラン」、これは表示価格が5ドニエの銀貨だが、これを「ブラン」と呼ぶこともある。そちらの方にしても、なんと15ドニエのパンですよ！ じっさい、エクスクラメーションマークはこちらの方につけていただきたいわけで、どうぞ『日記のなかのパリ』の「だいたい一個2ドニエもしないパンなんて」の章をごらんください。

「そのプセルについて」

ついにバラしてしまったわけで、ここで「プセル」と呼ばれている女性は「ジャン・ダール」のことで。いいえ、わたしは例の「アントニオ・モロシーニの年代記」のフランス語対訳本に注をつけた19世紀のフランス人のお方のように、なんと「ジャンヌ・ダルク」の出現を報じる最初の記事だというのに、「ジャンヌ」はその名前できえも呼ばれていないと悲憤慷慨する気分にはなれませんし、こういう書き方を見ると日記の筆者はブルゴーニュ派だったことがわかります。わざと書かなかったのですと、慙懃さに隠してなんと大胆なご見解をご披露される渡辺一夫先生に賛成する気にはなれません。わたしはただ日記の筆者がそう書いているとご案内するだけで、そうしたいのならそうしたらどうですかと渡辺先生がおっしゃった、そのおすすめにしただけです。

「イン・ウェリターテ・アポクリシウム・エスト」

ラテン語としては「ウェリタス」のうちに「アポクリシウス」なるものがあると読めば一番素直である。それが「アポクリシウス」という形容詞はない。ニールマイヤーの「中世ラテン語辞典」やブレーズの、こちらは教会関係の著述者たちのテキストからと断っている「羅仏辞典」に探すと、「アポクリシアリウス」apocrisariusというのがあり、これの省略形と読めないことはないが、肝心のその語は、これはきわめて特殊な名詞で、もともとビザンティン帝国に派遣されたローマ法王の代理、転じてカロリング朝の宮廷首席司祭とか、カペー家のシャンスレ（文書局長官あるいは尚璽）とか、さらには修道院の宝物係とかに与えられる名誉称号である。テュテイは知らん顔だし、ボーン女史は、いったいどこからその理解を引き出したのか、apocrisiumと活字は組みながら、En verite, ceci est faux「実際には、この

ことはウソである」と翻訳してみせてくださる。なにがなんでも「ジャンヌ・ダルク」をもちあげたいという気持ちがソクソクと伝わる注記だが、それはムシするとして、じつはボーン女史が apocrisium と活字を組みながらと断ったことがここでおいに問題になる。

だいたい、女史はそう活字を組みながらというへんないかたをしているわけは、女史は写本から起こしているわけではない。女史の出版した日記は、テュテイの校訂した日記本文の、女史の理解しうるかぎりて語句を近代の綴りに直した代物で、とうてい「校訂した」とか「写本のテキストをそう読みながら」とはいえないのです。じっさい、テュテイがそう読んでいる。わたしもそう読む。それが女史はそれを「ウソの」とか「いつわりの」とかの意味で読めると主張していることになる。それはそうは読めないのです。読めるとすれば、「アポクリシウム」の「シ」を「フィ」と読む。いいえ、ですから、apocrisium を apocrifium と読むことになる。日記のヴァチカン写本の筆生が f をまちがって s と書いたと考えれば、女史の読みが成り立たないことはない。

じっさい、「ヴィヨン遺言詩注釈」の仕事でもやたらとはいわないまでも、ときおり出くわしたこれは問題でして、というのは中世の秋の書体で、s は f の横棒を省いた字形でも書いたのです。かりにここは横棒の問題なのだ考えるとすれば、日記の筆生は apocrifium と書いた。それを筆生がまちがって apocrisium と書いたということのなる。さて、apocrifium とはなにか。またニールマイヤーやブレーズを見れば、apocryphus という語がある。「アポクリフス」、聖書についていって、「著者の分からない」という意味です。だから正典に数えられず、「外典」として片づけられた。もちろん、「著者がわかって」いても、「外典」に入れちまえということになってそういう扱いを受けることになった「外典」もあります。だから「外典」が「偽書」と同義ということになって、「アポクリフス」という形容詞そのものが「偽の」とか「ウソの」とかの意味を帯びるようになった。やれやれ、そういう次第でして、コレット・ボーン女史の思考の経路をたどるのはつかれます。

ところが、なんのことはない、この思考の行路は、じつのところ二十年前のわたし自身のものだった。なぞりかえしたというだけのことで、『ジャンヌ・ダルク』の序章にこの一文を紹介した。そこにわたしは「真実のうちには偽りのものもある」と、問題の文節を訳している。いまのわたしが20年前のわたしをからかって、どうすれば、おまえさんはそう読めたんだい。コレット・ボーン女史批判はわたし自身に還る。「トブラー—ロンマッテ御両所」の辞典に apocrife という形容詞が載っていて、dient que tout sunt apocrife という文例や、une histoire apocrife という文節がテキストから引かれている。この語形を見ると、なにかラテン語の apocriphus と世俗フランス語の apocrifite とが、日記の筆者だか、ヴァチカン写本の筆生だかの頭のなかでゴツチャになっている光景が思い浮かぶ。いいですねえ、日記の筆者も写本の筆生も、人文主義者ではなかったのですよ。正しいフランス語は正しいラテン語からと叱咤激励する人文主義の時代はまだ到来していない。いいえ、だから人文主義者だったら、

「アポクリフス」は「筆者未詳の」が原義だ。「偽の」とか「ウソの」などと、波止場人足の読みは控えなさいなどおかたいことはないません。また、いえません。コレット・ボーン女史のように、「これは偽の情報だ」と決めつけることもないでしょう。「本当のことだということのうちには、なにか疑わしいものもある」という程度に、ここはやわらかくとおきましよう。

(504)

このころ、レ・ザルミノーは力づくでオルレアン前面のイギリス勢の陣を解かせて出立せしめた。かれらはヴァンドームにおもむき、そこを取ったということだ。くだんのプセルは武装して、どこにでもレ・ザルミノーと一緒にいったが、旗を持っていて、その旗にはただアッサリ、ジェジュと書いてあった。噂ではかの女がさるイギリス人隊長に向かっていうには、かれは隊をひきいて、すぐに陣を引き払うべきである。そうしないと、不運と恥辱にお見舞いされることになろう、と。すると、その隊長は、かの女を口汚く罵って、リボード、プタンとまで呼ばわった。そこでかの女がいったことには、本意ではなからうが、イギリス勢は全員、すぐにも引き揚げることになるだろう。だが、かれはそれを（かれらが引き揚げるさまを）見ることはないだろう。かれの手の者はその大半が殺されればよいのだ。その通りになった。なにしろ殺戮が行われたその前の日に、かれは溺れ死にしてしまったのだ。かれは（水に沈んでいたのを）釣り上げられ、四肢を切断され、煮られてから臭い止めをされて、そうしてサンメリに運ばれた。教会堂の倉庫の前の礼拝堂に8日から10日のあいだ安置され、遺体の前では夜昼通して4本のロウソクだか松明だかが焚かれ、その後埋葬のために国元へ運ばれた。

[注釈]

「どこにでも」

原語は *p / tout*。このあたり、フランス語が中世語から近世語へ移っていく様子を考えさせて、なかなかおもしろい。ゴドフロワはあっさり *partout* というひとつになった語が中世語にあったかのように書いているが、トブラー-ロンマッチ御両所は、項目 *par tot* を立てて、ゴドフロワにはこれも出ているが（じっさい *partout* のカタチで出ている）、*par* を見よと送っていて、*par* を見ると、*par tot*, *tot par tot* の熟したいいまわしをあげていて、たくさん文例もあげていて、それが *tot* のヴァリエーションに *tut*, *tout* がある。*tout* については、すでに13世紀のルトブフ、アドゥネ・ル・ルエ、14世紀なかばのジル・リ・ムージなどに出ていると案内があり、そうかとアドゥネ・ル・ルエの『ベルタ・グラン・ペ（大足のベルト）』の指定された詩行を探すと、だいいち、指定の行数がちがう。1572ではなくて1573です。それはいい。それがこれの校訂者のアルベール・アンリは *partout* と校訂している。な

んだ、これは？

じつのところ、この日記の原文校訂でも、やっかいなのがふたつの語がいったいつながっているのか、いないのか。筆生はどう書いたのか。引き合いに出すのがちょうどいいケースが訳文一行目の「カズくで」で、これは原文は、なんと *parforce* と書いている。これはさすがに近代語でも *par force* です。ヴァチカン写本の筆生は、このつなげでも、また省略でも、かなり奔放な振る舞いを見せてくれて、おもしろいのだが、さてさて、わたしがいうのは、*par force* は近代語でも *par force* だが、*par tot* は *partout* です。アルベール・アンリ氏は近代主義者かな。まあ、わたしはアドゥネの写本テキストを見ていないので、きめつけるのはよしますが、テュテイとポーン女史は、こちらはアッサリと近代主義です。堂々と、*partout* と活字を組んで、怯えている気配はない。それがヴァチカン写本の筆生は、行末に *p* と *par* を省略して書いて、次行の頭に *tout* と書いている。*parforce* と書いているかれがですよ。パリのペーエヌの写本、これはもう何度もご紹介しているように、17世紀のコピーです。その写本の筆生さえも *par tout* と分かち書きしている。なんとも批評の限りにあらず。

「その旗にはただアッサリ、ジェジュと書いてあった」

これもおもしろい。ポーン女史は「より正確にはジェジュ・マリア」と注記している。「正確に」とはどういう意味か。ほかの史料に基づいて、後代の歴史学が問題のジャンヌ・ダルクの旗にはそう図柄が入っていたらと推理している。それが「正確に」ということで、日記の筆者のエクリは「不正確だ」と非難していることになる。アノタシオン（注記）というのはそういうことなのだろうか。むしろおもしろいのは、ヴァチカン写本の筆生は *ihus* と書いている。17世紀のコピーもそのまま写している。*ihesus* をそう略記する作法を、わたしは知らない。略記が自由奔放だとわたしが批評したのはそういうことがあるからです。それとも、ほんとうにそういう伝聞だったのか。「ジャンヌ・ダルクの旗」にはそういう図柄が入っていたのか。そういうふう疑問をもつというふうであってほしい。

「噂ではかの女がさるイギリス人隊長に向かっていうには」

ポーン女史をからかった直後になんだが、以下の記事は「不正確」である。どこか情報の混線があったらしい。『ジャンヌ・ダルク』をごらんいただきたいのだが、この隊長ウィリアム・グラスデールは、5月7日の朝、レー川左岸にかかる橋の、左岸のたもとの砦「レ・トゥーレル」に追い込まれたイギリス勢に対して、ジャンヌを含む王太子勢が攻撃をかけた。その「レ・トゥーレルの戦い」のさいに、手勢もろとも川にはまって溺れ死んでいる。「その前の日に」といっているのは、どうだろうか。ジャンヌ・ダルクの予言の力を誇大にいうための作り話だろうか。

おもしろいのは日記の筆者の言葉づかいで、「かれは（水に沈んでいたのを）釣り上げられ」と訳したのは *fut pesche* で、*pescher* は「釣りをする」が原義です。仏和辞典を見れば、水中の死体を引き揚げるなどと訳語がついているが、そういうのはこういうテキストに基づ

いて、意味の拡張を思案した後代の理解です。もうひとつおもしろいのは、「かれの手の者はその大半が殺されればよいのだ」で、ここに *soient* という、これは *être*、つまりフランス語の「ビー動詞」の変化形で、接続法現在です。*seient* のかたちがふつうで、*soient* は近代のカタチだと島岡茂氏の『古フランス語文法』は注意しているが、クレダの『クレストマティエー』の「語彙集」には両方の語形を併記している。トブラー-ロンマッチの用例集もクレダの理解を追認している。べつに問題はない。

問題なのは、原文注にも指摘したように、テュテイは、だからもちろんボン女史は、これを *seroient* と書いている。はなはだやっかいなことで恐縮だが、*seroient* は直説法未来形か条件法現在形と読める。前者の「正統の」カタチは *ierent* だが、これは「正統の」とことわったように、ラテン語の *ero* からで、それが古くからもうひとつ、*estre*, *ester* からの変化形も *être* の変化形に混じるようになった。だいたい、*être* の直説法現在形一人称が、なんでまた *sui* (近代語で *suis*) なのか、まあ、思案してみてください。直説法未来形にも、だから、*ier*, *iers*, *iert*, *iermes*, *iertes*, *ierent* の変化形とはちがう、一人称を *serai*, *estrai*, *esterei* と書く系列の変化形が見られたのです。

テュテイは *soient* を *seroient* の略した書き方だと思ったということか。それが略して書くときは、略して書いたよとかならず印をつけている。略した部分の上に線を引くやりかたがふつうで、それも 14 世紀中にしだいに山形に丸みを帯びてくる。わたしが見ているのは 1365 年の日付のシャルル 5 世の令状で、これはまだほぼ直線上だが、1387 年の日付の王妃イザボー・ド・バヴィエールの衣服地の支払勘定の書写では丸みを帯びている。わたしがいうのは、問題の *soient* の上辺にはなにも書かれていない。筆生は、ここは省略して書いたよと印をつけていないということです。それは *ser-* の *-er-* を略して書くのはほとんどくせになっていて、だから省略記号をつけなかったのだといわれても困る。ほかのところでは、そんなルーティーンなケースでも、律義に印を付けている筆生が、なんでこのところだけ印を付けなかったのか。

soient のケースは、手近なところ、(512) にも見える。終わりに近く、「そこで、全員に、摂政とブルグーン侯に対してボンでレオーであることを、民衆の前で宣誓させた。」*tous soient bon et loyaux* と書いていて、ここでもまたテュテイは *seroient* と活字を拾わせている。ここにも省略記号はついていない。*estre* の接続法現在と読んで、むしろ当然のところ、故丸山圭三郎も邦訳者に名を連ねているラルースの『言語学用語辞典』の「接続法」を見れば、「間接文・従位文の中で、保証されていない文の法を（保証された文の法である直説法との対立から）表わす」と簡潔に述べられている。宣誓の中身は「保証された文の法」ですか？ 中世語でもこのあたりの事情はかわらない。独立文では「願望・祈願を表わす」と、これは島岡茂氏の解説です。

いいえ、長々と恐縮でした。わたしのいうのは、テュテイはここを直説法未来形の

seroient と読んだらしいということです。それがヴァチカン写本の筆生はそうは書いていない。わたしはヴァチカン写本のマイクロフィルムを取り寄せて、富士フィルム会社に依頼してファクシミリを作ってもらったのを見ているのだが、天眼鏡片手に、その紙片を縦にしたり横にしたり、逆さまに見たり、寝っころがってみたり、いろいろしたのだが、どう見ても soient としか読めない。これは接続法現在形です。接続法は、独立節で使われるばあい、願望や祈願をあらわす。だからこのあたりのコンテキストは、「そこでかの女がいったことには、グラスデール隊長はその前日に死んでいる。その手の者は、その大半が「殺されればよいのだ」ということで、なんとも好戦的なジャンヌ・ダルクですな。そういうふうには日記の筆者は、パリで噂に聞いたということで、ジャンヌがじっさいそういったとか、いかなかったとか、それを問題にしているのではないですよ。どうぞ『ジャンヌ・ダルク』をごらんください。「ジャンヌは、グラスデールをはじめ戦いに死んだものたちの魂を想って泣いたと、復権訴訟である証人は証言している」とわたしは書いています。わたしのいうのは、なんでまた、テュテイはこここのところをわざと誤読したか。やはり、ジャンヌの予言の力を強調したかったということなのか。

いいえ、日記のこの記事が、ジャンヌの予言力をことあげしている。だから、ここはそう読まなければいけないのだとお考えになったのでしょうかねえ。いいえ、「かれの手の者はその大半が殺されることになるだろう」と、未来形で書けば、未来を予言するということで、コンテキストが合うということでしょう。じつのところ、わたしも以前訳したときには、そう訳している。いいわけになりますが、そのときはテュテイの校訂におとなしく従っていたのですよ。恥じ入ります。余所者として傍を通り過ぎた一日が、年を経たある日に開かれて、わたしたちに贈られる（ライナー・マリア・リルケ）

「かれは（水に沈んでいたのを）釣り上げられて」

以下ですが、「釣り上げる」といういいまわしのおもしろみについてはもう書きました。じつはそれに続く「四肢を切断され」というのも、また、おもしろい。fut despece par quartiers と書いているのですが、どうぞつづけて読んでください。fut pesche et fut despece 「フ・ペシェ・エ・フ・デペセ。」なにか似た音の連音を楽しんでいるようではないですか。続けて「エ・ブール・エ・アンブーム」ですよ。「釣り上げられて、さばかれて、煮られて、ショウガをたっぶりつけあわせてねえ」とかなんとか訳したくなるではないですか。

だいたいジャンヌの話題が隊長グラスデールの話になって、その遺体の処理の話で落とすという、この文章道はどうでしょう。話の本筋はこれで、こちらは脇筋の話だという、これはわたしたちの文章作りのまず基本だと思うのだが、日記の筆者の想念は、なにかのきっかけで「次の」話題に移ってしまう。どうもそういうところがあるようだ、若年時に書いた論文「中世ナチュラリズムの問題」に書いた覚えがあります。『中世の精神』という論文集に入れてあります。

「そうしてサンメリにはこぼれた」

「アンブーメ・エ・タポルタ・サンメリ」、「臭い止めをされて、サンメリに運ばれた」と続けて書いている。あまりになんだから、「そうして」と一呼吸置かせましたが、なにしろ「サンメリ」は、これはたぶんパリのサンメリ教会です。シャトレ広場にスクワール・ド・サンジャックと呼ばれる、「サンジャック辻公園」という意味ですが、植え込みがある。その脇を抜けてサンマルタン通りを北に下っていくと、まもなく右側にサンメリ教会があります。そのすぐ先がポンピドー文化センターの魁偉な建物です。16世紀に建て替えられた教会堂で、それが中世の秋のゴシック調の建物だから、なんだ、隊長グラスデールの遺体が運び込まれた当時のままではないかと誤解される恐れがある。もっとも、この話は、1427年の例の「雨のサンマルタン門外」の記事の注釈で、もう書きました。恐れ入ります。

さてさて、ですから、サンメリに「倉庫の前の礼拝堂」なんてものがあつたのかどうか。「倉庫」は cellier だが、これに対応するラテン語は cellarium で、ニールマイヤーはふつうにこれは物資収納部屋と理解していいとしている。ブレーズは、宝物部屋をそう呼ぶ例もあつたことを指摘している。それがトブラー-ロンマッチ御両所は、だんこ、古フランス語の celier 「スレ」は、Keller ないし unterirdischer Gang だとする。前者は地下貯蔵庫であり、とりわけワイン貯蔵室であり、後者は地下道、もしか墓地の意味もあつたかと付記している。なんですかねえ、フランス語に写された「ケラリウム」は地下に沈むらしい。いいえ、ですからわからない。サンメリ教会堂のプランが分かると分かるのだが、それが devant le cellier ですからねえ。地下道の線は消える。

それはもちろん、わたしの知っているかぎり、ヘント（ガン）のシントバーフ聖堂がまだ洗礼者ヨハネの名をいただいていたころ、町の有力者ヨドクス・フェイトが絵師フーベルト・ファン・アイクに注文して祭壇画を描かせた。いうところの「ガンの祭壇画」、弟のヤンが完成させた「子羊の祈りの祭壇画」である。いいえ、わたしがいうのは、この祭壇画が置かれた「ヨドクス・フェイトの礼拝堂」は、教会堂後陣の南側に位置していて、はじめ「なかば地下に埋もれていた。」それが1世紀後、「地上階に建て直された。」そういう経緯がある。「ガンの祭壇画」を鑑賞するときには、そのことを念頭に置いていた方がよいだらうと、わたしは『画家たちの祝祭』に書いた。いま、その文章を思い起こしている。わたしがいうのは、「ガンの祭壇画」は1432年の年次を銘文に刻んでいる。問題の日記の記事が書かれた、たった4年後です。いいえ、ですからわたしがいうのはある教会堂のなかの礼拝堂が「なかば地下に埋もれていた」といっても大しておどろくことはない。またまた、ワインをはじめとする物資の貯蔵部屋が半地下の造りであることは当を得たことなのだ。だから問題の文節を「地下倉庫の前の礼拝堂」と、ニールマイヤーやブレーズを尻目に、トブラー-ロンマッチ御両所にすり寄って訳してやってもいいかなと思うのです。

「4本のロウソクというか松明」 *iiij cierges ou torches*

なんですか、この「ウ」ou は。日記の筆者はサンメリにかなり近いところに住んでいた形跡がある。1年前の記事では、土砂降りの雨のなか、サンメリの玄関のあたりをウロウロしていました自供している。だから、サンメリの「倉庫の前の礼拝堂」などと、見てきたようなウソをいいの反対の、ウソだと思うなら見てこいといわんばかりの強気の発言をしているのだ。それが、そこに安置されたグラスデール隊長の棺に供えられたのが、4本はたしかだが、ロウソクだったかトーチだったか覚えていないというのです。見なかったな。オリンピックの聖火リレーのトーチではなかったようで、それはたしかなことです。

(505)

このころ、フレール・リシャルが出ていった。立ち去ると決めたその前の日曜日、栄光の殉教者、モンセヌー・サンドウニとほか大勢の殉教者が首斬られたその場所だかそのあたりで、かれが説教するらしいとパリ中に噂が流れた。そこでパリの人たち、じつに6千人もが出かけて行って、大半は土曜日の夜に群れをなして出かけて行って、なにしろ日曜日の朝にいい席をとろうということで、野原の古ぼけた小屋とか、なんとか場所を探して寝たのだ。ところがかれの行為は阻止された。どうしてか、いまはいわない。とにかくかれは説教を行わなかった。これには善男善女、おおいに当惑した。かれはこの季節、パリではもはや説教しなかった。出立しなければならなかった。

[注釈]

「栄光の殉教者、モンセヌー・サンドウニ」

なぜだか、テュティは、だからもちろんボーン女史は、「栄光の殉教者」leglorieux martyr の3語を落としているのだ。このばあいは「落とす」といういいかたが適切で、なにしろヴァチカン写本にはしっかり書いてある。そのコピーの17世紀の写本も落としていない。テュティはなぜ落としたか。これは永遠のナゾである。

「モンセヌー・サンドウニとほか大勢の殉教者が首斬られたその場所だかそのあたり」

その場所については『遺言の歌』下巻「58ひとつ、モンメルトゥルって山のモンに」をごらんいただきたい。ここではガイドブックふうにいきましょう。モンマルトルのピガール広場の東よりを北にリュ・デ・マルティール（殉教者通り）に入ってください。2本目に交叉する通りイヴォンヌ・ル・タック通りを右に曲がる。そのまま行くと、モンマルトルの例の階段テラスの下に出ます。通りの9番地の建物が「ラ・シャペル・デ・ゾーキシリアトリス・デュ・ピュルガトワール」、なんでしょうねえ、直訳すれば「煉獄の助っ人女たちの礼拝堂」ですか。イエズス会の霊場のひとつで、じつにイエズス会の開基イグナティウス・デ・ロヨラとその7人のなかまが霊的結束を誓い合ったその場所です。

1534年のことですが、そのころはそこに小さな霊廟があった。ラテン語で「サンクトウ

ム・マルティリウム」と呼ばれていて、「マルティリウム」は、ブレーズあたりを見ると、「殉教者の墓、あるいは殉教者に献堂され、その遺物を保存する霊廟」をいう。それから350年、19世紀の末に、「煉獄の助っ人女たちの礼拝堂」にかわった。そこが「その場所」です。「トゥルシェとオヨーの絵図」の左下隅をごらん下さい。モンマルトルが描かれています。ふもとの道の四つ辻に「カルヴェール十字架」のキリストの御像が立っていて、そこを左手に行く道は登りにかかる。その道がいまの「リュ・デ・マルティール」の見当でしょう。登りはじめてすぐの鞍部に小さな建物が描かれていて「ラ・シャペル・デ・マルティ」とネーミングが入っている。「殉教者の礼拝堂」という意味です。なにしろそんな見当でして、メッスの人グイベールのパリ見聞記には「モンマルトル門を出て半リュエほどいくと山がある」とモンマルトルを紹介している。半リュエって、2キロですよ。前夜から押し掛けるのはいいけれど、「野原の古ぼけた小屋とか、なんとか場所」を探して寝るような話だったのかなあ。「古ぼけた小屋」とムリムリ訳したのは「ヴィエーエ・マズール」vieilles mesures。「マズール」はラテン語の「マンスーラ」から来ているから、まあ、「住処」の意味ですけどね。現代日本の「マンション」とも、いざさか意味合いをともにします。

「どうしてか、いまはいわない」 atant men tais

直訳すれば「さしあたりはわたしは黙る。」 なにか思わせぶりたつぷりですねえ。正直、わけが分からなかったという気持ちの反映かな。

(506)

このころ、レ・ザルミノーは野に跳梁して破壊のかぎりをつくした。そこでイギリス勢8千ほどが投入されたのだが、それがいざイギリス勢がレ・ザルミノーにあいまみえようという日になってみると、6千にも足りなかった。対してレ・ザルミノー、1万。レ・ザルミノーはたいそうはげしくイギリス勢におそいかかり、イギリス勢は抗しきれなかった。あちら側でもこちら側でもたいへんな負け戦で、ついにイギリス勢は支えきれなくなった。なにしろレ・ザルミノーは半分ほどもイギリス勢より多勢で、イギリス勢をいたるところでブロックしたのだ。イギリス勢は敗北し、イギリス勢は4千の死者を出したという。片方の数はパリでは知ってるものはいなかった。

[注釈]

「なにしろ、レ・ザルミノーは半分ほどもイギリス勢より多勢で」

このいまわしはなんともおもしろい。「カー・レ・ザルミノー・プル・ゼテ・ドウラムエティ・ク・ネテ・レ・ザングレ。」直訳すれば「なにしろ、レ・ザルミノーは半分多かった、レ・ザングレよりも。」日記の筆者は計算している。あつてるかどうかはじつはどうでもいい。計算しているということ自体、おもしろいのだ。なお、ヴァチカン写本の筆生は、

文節中、「ドウ・トゥートウ・パール」と書いて、一本線で消し、後の方であらためて書いている。そのあたり、筆写の様子がうかがえて、これもおもしろい。テュテイはこのあたりのおもしろみを注記していない。そのことも、また、おもしろい。

「片方の数はパリでは知ってるものはいなかった」

直訳すれば「ほかのものについて、人はその数を知らない、パリでは。」おもしろいのはボーン女史の注記で、敵方の死者の数をいつている。それがレ・ザルミノー、「フランス方」の数字はいつていない。関心がなかったのか。いや、むしろレ・ザングレ、「イギリス方」が戦場をコントロールして、死体を收容してしまったからだったろう。かぞえられなかったのだ。いずれにしても大した数ではなかったろうと推理している。まあ、「デ・ゾートウル」が「イギリス勢の死者」を受けて「レ・ザルミノーの死者」をいつていると読むのは妥当なところだろう。ただ、その数はわからないといつているのを、そこまで理屈で解釈するのはどうか。このあたりの文章の調子はドクサ、風聞のエクりに遊ぶ日記の筆者らしいもので、ボーン女史の推理したような内容の話がパリにとどいていたならば、まずまちがいなくかれはそう書いたろう。関心がなかったということではない。書いていないということは、噂がながれていなかったということで、そのことこそがおもしろい。「パターの合戦」である。『ジャンヌ・ダルク』をごらんください。数字はわたしも書いていない。どうも記録が残らなかったようなのだ。王太子勢は、このあと「北征」に出る。後の方の記事と注釈をごらんください。

(507)

1429年6月19日日曜日、サンローラン・ドウオー・パリ教会が尊師パリ司教ほか上級僧侶の主宰で聖人に献堂された。

[注釈]

「サンローラン・ドウオー・パリ」

パリのガール・ド・レスト、東駅の前の見当で、ブルヴァール・ド・マジェンタという大通りとブルヴァール・ド・ストラスブルという大通りが斜めに交叉する。そこに西正面玄関を開いているのがいまのサンローラン教会である。こんな大通りは、ふたつとも、19世紀のオスマンプロジェクトの産物で、中世の秋のサンローラン教会とは関係がない。中世の秋のサンローランは東側の後陣をフォーブル・サンマルタン通りに突き出していて、この通りはいまもその名でいまのサンローランの後陣をなでて、さらにはるかかなた、北北東の方へと伸びている。パリ10区をほぼ東西に両分する通りです。南の起点はブルヴァール・サンマルタン。いいえ、ですから、いまのこの大通りは、中世の秋、パリの城壁だった。サンマルタン門があって、その門までの町中の道がサンマルタン。門を出て郊外の道が

フォーブール・サンマルタンというわけで、いまの大都会パリに中世の秋の道筋がそのまま残っている。どうぞ、ほかの記事の注釈をいろいろとご参照ください。

サンマルタン通りにサンメリ教会が西正面玄関を開き、サンマルタン修道院が長々と塀を立て、サンマルタン門をくぐって、フォーブール・サンマルタン、郊外のサンマルタン通りをいけば、「サンローラン・ドゥオー・パリ」、パリの外のサンローラン教会が広大な境内を囲っている。「サンクトゥス・ラウレンティウス」、フランス語で「サンローラン」の名を冠したサンクチュエリーがパリの北の郊外にあることは、フランク王国がはじまったころから知られていて、なにしろ「フランク人のイストリア」を書いたトゥールのグレゴリウスが、その名のモナステリウム、修道院のことを書いている。ずっとあとになって、12世紀の末に、ひとつの教区をかかえる司祭教会になった。たぶん12世紀に建設されたのだろう教会堂が、14世紀から15世紀にかけて建て直されて、1429年6月の、これは日記の筆者にいわせれば19日の日曜日に、あらためて聖人に献堂された。

「サンクトゥス・ラウレンティウス」は3世紀のローマ教会の助祭長だった教会人で、ヤコブス・デ・ウォラギネの『黄金伝説』に長文の伝記がある。皇帝、といっても当時は正帝がふたり、副帝がふたりという4人体制だったが、そのひとりだったデキウスがローマ教会の助祭長を拷問死させた。なにしろひどい拷問だったということで、ヤコブスは「サンクトゥス・ラウレンティウス」の上に「マルティルス」と、わざわざつけくわえて、111人目の「聖者伝」のタイトルにしているのです。いいえ、わたしがいうのは、聖人はほとんどが殉教者なのだから、なにも助祭長だけをことさらにそう飾り立てなくてもよかつたろうに。

「マルティルス・サンクトゥス・ラウレンティウス」を祭る聖堂は、ローマの7つの巡礼教会のひとつで、中世にはローマの城壁の外にあり、「郊外の聖ラウレンティウス聖堂」と呼ばれていた。「サンローラン・ドゥオー・パリ」、パリの外のサンローラン、あるいは「サンローラン・オー・レ・ムー」、城壁の外のサンローランの呼び名は、それはたしかに13世紀のフィリップ・オーグストの城壁についてはもちろん、それからさらに郊外にふくらんだ、14世紀のシャルル5世の城壁の外でもあった。17世紀のリシュリュー枢機卿の「宅地造成」が城壁をブルヴァール、大通りに変え、城壁の外、フォーブールを都市パリに取り込んだ。だからはじめてサンローランが「パリの内のサンローラン」になった、「城壁の内のサンローラン」になったとはしゃいでいいものか。このイマジナリーはローマの「サンロレンツォ・フォーリ・レ・ムーラ」、城壁の外のサンロレンツォの写しだった。

「尊師パリ司教ほか上級僧侶」

「レヴェラン・ペー・ラン・ディュー」を「尊師」とアッサリ訳した。教会用語としてはいろいろ問題がある。ラテン語で「レウエレンス」は、これはいまでもそうだが、司祭の敬称で、「尊ばれるべき」というほどの意味だが、司教については「レウエレンティッシムス」と最上級のカタチをとる。プレーズを見ても、「レウエレンティッシムス・エписコプス」

であって、「レウエレンス・エписコプス」とはいわない。いいえ、わたしがいうのは、「レヴェラン・ペー・ラン・ディュー」が「レヴェック・ドゥ・パリ」を指していることと読んでのことで、「レヴェック」、司教に「レヴェラン」の尊称はおかしいのではないか。小林珍雄氏も現代の用語で司教の尊称は「レウエレンディッシームス・パテル」だと教えてくれる。「パテル」はフランス語で「ペー(ル)」で、だから「レヴェラン・ペー(ル)」の呼びかけはおかしいわけだ。

それがトブラー-ロンマツチ御両所は、reverentの項で、reverendのヴァリエントをあげた上で、いくつかの用例を拾ってくれていて、そのひとつに『アングルール領主のイェルサレムへの旅』という、これは1878年にオーギュスト・ロンニョンとF.ボナルドという方(こちらは存じ上げないので)が校訂したテキストからのがある。それがこれだけのごていねいに「1379年の史料から」と但し書きがついている。これはなんだろう。この刊本にそういうまとめで史料集が添えてあって、そこからということなのだろうか。それともテキストそのものから拾ったのだが、特に年代を示したということなのだろうか。こういうことがあるから、やはりパリに住まなければダメかな。

閑話休題。で、どういふのかというと「アントウル・レヴェラン・ペー・ラン・ディュー・モン・セヌー・レヴェック・ドゥ・テルーアン(ヌ)・ドゥヌ・パー(ル)・エ・ノーブ・ロンム・メッシー・ルージェ・ドートウル・パー(ル)。「レヴェラン・ペー・ラン・ディュー」と、日記の方のとまったく同じです。分かち書きすれば「レヴェラン・ペール・アン・ディュー」、尊ぶべき神父。これが「レヴェック・ドゥ・テルーアン(ヌ)」と等置されている。これを一方として、他方になにやら「ノーブ・ロンム・メッシー・ルージェ」、これは分かち書きすれば「ノーブル・オンム・メッシール・ウージェ」、貴人ウージェ殿。わたしがいうのは、テルーアン司教がレヴェラン・ペールとあっさり呼ばれている。日記と呼吸があっているのです。

「上級僧侶」

そう訳した当人がまいている。「プレラ」だが、どこかにも書いたように、日記の筆者がどういう人物かによって、日本語に移す言葉づかいがちがってくる。ちがってきていいと思うのだが、このケースは、だから、もしも町のふつうの住人だったら、「偉いお坊さま方」でもいいわけで、なにしろ「プレラ」は「プラエーフェロー」されたもの、前に出されたものという意味なのですから。教会の司祭、修道院の院長といったグループです。

(508)

この年1429年6月6日、ここに書き添えたかたちそのままの赤ん坊ふたりがウーバルヴィレで生まれた。なにしろわたしはこの目で見たし、この腕に抱いたのだ。ごらんのように頭がふたつ、腕が4本、ふたつ首、脚も足も4本、それでいて腹はひとつ、臍もひとつ、

頭はふたつ、背中もふたつ。洗礼を授かって、3日間生きていて、パリの人たちはこの不思議をじっくりと見た。なにしろ老若男女、1万ものパリの人たちがこれを見ようと集まったのだ。われらが主の恩寵めでたく、母親は無事にこの子たちを産み落としたそうさ。朝の7時ごろに生まれて、サンクリストウッフル（教区）で洗礼を受け、ジャン・ディスクレが（代）父で、ジレットが（代）母で、右側のがアネス、左側のはジャンという名をもらい、受洗のあと、1時間生きていた。

[注釈]

写本は、このくんだり、フォリオ41葉表の16行目から21行分（フォリオ41葉裏に2行、はみ出している）を、各行3分の2ほど左に寄せて書いていて、だから3分の1行分ほどが余白になっている。日記の原稿には、そこにこの「シャム双生児」の絵がスケッチされていたということで、残念ながらヴァチカン写本の筆生はそれをコピーしていない。原稿から直接筆写したと考えればの話で、そもそも筆生が目線の先に置いていた「原本」が、すでに日記の原稿の写稿であった可能性があり、それにすでに絵が入っていなかった可能性があるのだから、ヴァチカン写本の筆生の怠慢を責めるべきいわれはないわけだ。失われたスケッチのために瞑目！

パルルマンの録事クレマン・ド・フォーカンベルグもまたこのニュースを録している。「月曜日、今月6日、オーバルヴィレ・レス・サンドウニに住む農民の妻が双子の女兒を産んだ。双子といわんかひとつの腹につながっているふたりの女兒で、ふたりともまったく女の身体、頭から足までふたつづつに作られていて、つまり、頭ふたつ、肩に腕は4本、脚が4本、手が4本、足も4本、クム・ポステリオリブス・エト・アンテリオリブス・メンブリス・ウリナリブス（前も後ろも尿の出口も）。ふたりのうちひとりはいくだんのオーベルヴィレの教会の洗礼盤の上で洗礼を受けた直後に死去した。もうひとり、いくらか大きかった方は、カールドウーの半分ぐらい（15分の半分）は生きていた。ふたりとも、2日間は、そのまま葬られずに置かれていたが、それというのはパリや周辺の町村の人たちが大勢、見物に出かけて、お供物をそなえ、くだんの教会に寄進し、子を産んだ母親に施物をあてたりしたからである。」（第2巻310～11ページ）

「ウーバルヴィレ」hobarvilliers（パルルマンの録事の方は「オーバルヴィレ」ないし「オーベルヴィレ」）

現在のパリの北の郊外「オーベルヴィリエ」、サンマルタン運河とつながるサンドニ運河の東側の町です。メトロ7号線はポルト・ド・ラ・ヴィレットを出ると次がオーベルヴィリエ・パンタン・クアートル・シュマンという、たぶん一番長い名前の駅で、次がフォーール・トールヴィリエ（オーベルヴィリエ砦）、そうして終点のラ・クールヌーヴ・8・メ・1945である（あの、これ全部でひとつの駅名です。読み上げると、こちらの方が長いかな）。

わたしがいうのはポルト・ド・ラ・ヴィレットから終点まで、メトロはオーベルヴィリエの町中を通る。

閑話休題。そのメトロの、さきほどたぶん一番長い駅名だろうと批評したオーベルヴィリエ・パンタン・クアートル・シュマンから北西にアヴニュ・ドゥ・ラ・レピュブリック、共和国大通りが通る。どうぞその大通りをたどっていただきたいわけで、やがてプラス・デュ・8・メ・1945、ですから「1945年5月8日広場」に入る。その広場を通り抜けて、さらに大通りをいくと、視界にオーベルヴィリエのメトロチャーチであるノートルダム・デ・ヴェルテュ、美德の聖母教会が入ってくる。わたしがいうのは、この教会堂こそが、往時「サンクリストウッフル教会」なのでした。その名は、ノートルダムの前広場の一隅に「パ・サンクリストフ」、クリストフ上人の小路というのがある。そこにわずかに残っている。

「サンクリストフ」ではないか、「サンクリストウッフル」ではないとご疑念をお持ちか。どうぞ『遺言の歌』のユイタン138節の注釈をごらんください。近代のフランス人は、「クリストウッフル」と「クリストフ」とはちがうのだといくらいつても、いうことをきかない。いっしょくたにしてしまうのです。前者は「クリストポロス」、幼児のキリストを背負って川を渡した渡し守の聖人です。芥川龍之介の『きりしとほろ上人伝』に美しく書かれている。

閑話休題。パルルマンの録事が「オーバルヴィレの教会」といっているのがそこです。「オーバルヴィレ・レス・サンドウニ」、つまりサンドニの近くのオーバルヴィレといっているのは、なにしろこのすぐ北がサンドニです。このあたり、サンドニ運河が通っているように、往時水路が四通していたところだった。おそらくオーバルヴィレの町で「きりしとほろ上人」信心が盛んだったというのは、そのことと関係がありますよ。

パルルマンの録事がラテン語で書いているところは、まあ、そんな意味なのだろうと判読したということで、「メンブルム・ウリナリス」といういいまわしは古典ラテン語にはないし、ブレーズやニールマイヤーを一生懸命さがしてもみつきりません。「尿にかかわる体の部分」ということで、「メンブルム・ポステリオール」「メンブルム・アンテリオール」だって、前者はともかく、後者はふつうの字引には出てこない。まあ、前者からのもじりだろうと思うが。

日記の方に話をもどすが、「ジャン・ディスクレ」と「ジレット」というのが「ペール」と「メール」だと書いているが、洗礼の話のところでしょう。コンテクストからすると名付け親かもしれない。そこで「(代)父」「(代)母」というような訳し方をしたしだいです。

(509)

同じその週、日曜日に、サンジャンの後ろのラ・シャンヴァリーで、ふたつ頭の子牛が生まれた。脚は8本、尻尾は2本。そうして続く週には、サントウスタースのあたりで、ふた

つ頭の子豚が生まれた。それが脚は4本だけだった。

[注釈]

「サンジャンの後ろのラ・シャンヴァリー」

lachauarie の cha の a の上に省略記号が載っている。chanvarie と校訂した。トブラーローンマッチ御両所は chanverie で項を立てていて、Hanfmarkt「麻市場」と解き、つけくわえて Gasse in Paris「パリの小路」と教示してくれる。それが「ラ・シャンヴァリー通り」は「サンジャンの後ろ」ではない。「サンジャン」はオテル・ド・ヴィル市役所のすぐ裏手の教会で、オテル・ド・ヴィルの広場はグレーヴ広場と呼ばれたから、サンジャン・アン・グレーヴと呼ばれる。そこにはなかった。サンドニ大通りをセーヌ河岸の方からぶらぶら北に向かって歩いていくと、左側にイノッサン教会とその墓地が見えてくる。そこを通り過ぎると、今度は右側にサンマグレール教会の境内に入る入り口が見える。そのちょうど真向かいに口をあけているのが「ラ・シャンヴァルリー」lachanvarerie 通りで、この綴りは「トゥルシェとオヨーの絵図」に書き込んである通りの名前です。入り込んで歩いていくと、「ル・ドゥ・モー・ドゥ・トゥール」r de mav de tovr 通りに出る。この綴りも絵図のもので、サンドニ大通りと平行する道で、この道は現代のパリにも「リュ・ド・モンドトゥール」rue de Mondetour という名前で、ちゃんと残っています。

このあたりに「麻市場」があったのかなあ。ともかく「サンジャンの後ろの」というのはウソだということになる。テュテイは、だからもちろんボン女史は、そうにきまっている。日記の筆写がまちがえたのだとアッサリしたものだが、どうもわたしは御両所のように能天気にはなれない。だいいち、御両所は、だからその通りは、「正しくは」サンテュスタシュのそばだと言い張っているが、いったい御両所は「トゥルシェとオヨーの絵図」はごらんにならなかったのだろうか。いいえ、そんなごらんにならなくても、モンドトゥール通りとの位置関係は、「ルコントのプラン・ド・パリ」、いいえ、つまり現在のパリの市街地図をごらんになればおわかりのはず。いいえ、御両所はパリにお住まいだったのでしょ。歩いてみればよかつたじゃあ、ありませんか。サンテュスタシュこと、中世の秋のフォノグラフィーでサントウスターズ教会は、むかしもいまも同じ場所にあります。いいえ、わたしがいうのは、もしや「サンジャンの後ろに」「ラ・シャンヴァリー」があったのではないか。「麻屋」が店を張っていたということはないのか。そのへんのところを調べてから、ものをおいになるといい。

「サントウスターズのあたりで」

ラ・シャンヴァリー通りを抜けるとモードウトゥール通りにでる。それを今度はセーヌ河岸方向に、つまり南にすこし行くと、「ル・オペッシュュール」、プレッシュュール通りに出る。説教者たちの通りということですねえ。フレール・リシャールもここに立ったのかな。この

道を右手に折れると、もう「サントウスターズ」の後陣が見えます。サントウスターズ教会まで、歩いて7、8分というところかな。いいえ、ですからラ・シャンヴァリー通りが「サントウスターズのあたりで」なのです。どうもテュテイさんたちは、このあたりのコンテキストに幻惑されていたのではないか。「サントウスターズ」については、それにもっとふさわしい記事のところでお話ししましょう。

(510)

サンジャンの前の火曜日、レ・ザルミノーが今夜パリに押し入るにちがいないと町中が動揺した。だがそういうことはなかった。

(511)

それ以来、夜昼なく、パリ方は見張りをきびしくさせ、城壁を保塁と化さしめ、大砲をはじめ、たくさんの火器を備えさせた。また、商人頭と助役たちの首をすげ替え、グイオーム・サングアンなるものを商人頭にした。助役にはインバール・デシャン、これは小間物と絨毯の商い、クーラン・ド・ヌフヴィル、鮮魚商、ジャン・ド・ダンピエー、小間物商、ルムン・マール、毛織物商い、かれらは7月の最初の週にそれぞれ任命された。

[注釈]

「それ以来、夜昼なく」

原文はItemからはじまっているものだから、テュテイは前項とわけて、新たに項を立てたが、文章の中身を見ると、ここはつながっている。「サンジャンの前の火曜日」は、(507)に「6月19日日曜日」と読めるから、この年は6月21日ということになる。

「パリ方」

いいえ、原文は「スー・ド・パリ」、パリの人たちとアッサリしたものだが、そのくせ文のコンテキストは、これがただの人たちではないことを示唆している。見張りを「アンフォルセ」強化する、城壁を「フェール・フォルティフェ」保塁と化さしめるのはだれかということで、だから「保塁と化さしめる」なんてかたいいいまわしも使ってみたのです。フランスとイングランドの王政府の役人たちとパリの守備隊長とその配下、つまりはその時点でパリを支配した連中ということでしょう。

「商人頭と助役たちの首をすげ替え」

商人頭は「プレヴォ・デ・マルシャン・ド・パリ」prevost des marchans de parisのわたしの訳語です。助役は、こちらはみなさんがそう訳しているものだから。筆頭の助役が商人頭です。だから町長とか市長にあたる。1382年まで、パリは自治の町だった。大商人仲間うちの頭が町の行政も把握していた。「プレヴォ・デ・マルシャン」は商人たちの代表の意味

です。そこにヴァレ家のフランス王政府が「プレヴォ・ドゥ・ルエ」、王のプレヴォ、王の代理人ですねえ、これを置いた。役所がシャトレです。こうしてパリはふたつ頭の町になった。しかも、大事な点がもうひとつある。1382年の政変で、パリは町の自治の権限を大幅に制限された。「鎖」の件で、いままでにもいろいろとご案内してきたところです。ここで大事なのは、商人たちの頭の職それ自体が、王からの「預かり」になったということです。だから、商人頭は正式には「ル・ガルド・デ・プレヴォーテ・デ・マルシャン・ド・パリ」、パリ商人頭職の預かりと呼ぶ。わたしがいうのは、だから「パリ方」が商人頭と助役たちの人事を左右することができた。いいえ、パリの住人の目からみて、そこにはなんの問題もないということだった。

またもや、長々と恐縮でしたが、わたしがおもしろく思っているのは、テュテイさんはなにしろ官職とか制度とかに熱心で、ここでもギオーム・サングアンをはじめ、あげられている人名について、アルシーヴ・ナショナル（国立文書館）にもぐりこんで調べ上げ、克明な注記を施している。なにしろ刊本の239ページは下半分を注記に使い、240ページにいたっては、本文はわずか6行というていたらくで、テュテイの校訂本は、ときとして『アントニオ・モロシーニの年代記』を校訂し、注記したレオン・ドレの態度を思わせる。兩人ともエコール・デ・シャルト（文書学校）の卒業生、「アルシヴィスト-パレオグラフ」である。公共図書館では「ビブリオテケール」（図書係）の、文書館では「アルシヴィスト」（古文書係）の職につく。テュテイは1842年に生まれ、1918年に死去している。レオン・ドレはテュテイより22歳若かったが、前後して1922年に死去している。どうぞわたしの論文「記録と現実」（『中世の精神』に収録）をごらんください。レオン・ドレの校訂と注釈の態度についてご紹介しています。テュテイとドレは第三共和制下のフランスの知識人のチャンピオンです。国家と制度にあるべき秩序を見ようという、もうこれはどしがたいまでにかたくなな精神をわけもっている。身分秩序も、とつけくわえようか。家系、官職、法制度がかれらの関心事で、なにしろ調べてわかったことをぜんぶ書く。どうしても脚注のスペースがひろがります。

わたしがいうのは、テュテイさんは、だからそのコピーのなんとかさんも、「パリの衆（パリ方）」が何者かは注記しない。「商人頭」を、なんでまた「パリの衆」が勝手に首切れるのか、任命できるのか、なんの疑問も感じていないようだ。かれらにとって当然のことで、なんの疑問も頭に浮かばないのでしょう。「パリの衆」は、つまりは「当局」なのだから。「小間物と絨毯の商い」、これはなんだ？とも思わないらしい。

「小間物と絨毯の商い」 mercier et tapissier

テュテイは「アンベール・デシャン」（ymbertを第三共和制下のフランス人はこう発音したと思うので）の注記に、これは高名なタオル商人だったと、アルシーヴの文書 KK 33, fol. 3を証拠にあげる。「タオル」は touailles と史料から引いていて、これは近代語にもそのま

ま残っていて、ただ中世では *toaille* がスタンダードなかたちだとトブラー-ロンマッチ御両所は注意する。近代語では「環状タオル」、エンドレスになっていて、まあ、古いホテルのトイレなどに、いまでも、ときたま見掛けますね。

閑話休題。ヴァリエントはいろいろあって、おもしろいのが『ばら物語』からひとつ拾っている。フェリックス・ルコワの刊本で 9267 行、*et une toeile de chanvre* で、いいえ、綴りは「トゥエル」というフォノグラフィーに忠実で、それはよいのだが、このくだり、どうも「タオル」の出てくるいわれはない。「コット」だの「スルコ」だのと並べて話題に供されていて、だからこれはむしろ「フーラール」なんだと、『ばら物語』にはアンドレ・ランリの現代語訳と称するものがある。その、該当個所の後注を見ると、そう主張している。頭っからふんわりかぶる切れだと。

foulard は、これはおもしろい。さすがのリトレもこれの語源は分からないと匙を投げているのだが、なんのことはない、トブラー-ロンマッチ御両所は、*foillard* で項をいったん立てておいて、*foillart* を見なさいと、アッサリしたものだ。*foillard* は、もうこれは見るまでもなく、*fueil* (*feuille*) の派生語で、「枝の茂み」です。その項目を見てみたら、緑のそれで顔面をおおうという話の用例文が出ていました。ただ、女性が頭からかぶるスカーフ（仏和辞典などを見ると、そういう理解で、「フーラード」などと、カタカナ書きも添えてある。これは洋裁用語ですか？）という用例は引かれていない。御両所の辞典は、だいたい 14 世紀のなかごろまでの用例文を拾っているので、中世の秋に *foillard* がスカーフの意味で使われるようになったかもしれない事情については、知らん顔をなさっている。そういうことかも知れない。

ただ、なんのことはない、御両所の辞典の *toaille* の項は、なんと *Turban* の解もあげていて、さらに *ein Stoff für Frauen, auch zur Umhüllung des Kopfes* 「女性の使う布地、頭を包む用途にも」と、なんとねえ、懇切丁寧なことではないですか。*foulard* で顔面をおおってみせたりなんぞしなくたって、「トゥエル」という語自体、「麻地のスカーフ」という意味をもっていたのです。いいえ、「麻地の」というのは、これは『ばら物語』から借りたのだが、ただ、なんともこれまたおもしろい、すぐ前の記事に「サンジャンの後ろのラ・シャンヴァリー」の話が出ていたばかりではないですか。いいえ、あらぬ妄想ですけど、インベ・デシャン氏はラ・シャンヴァリー横町に小間物屋の店を出していたか？

さてさて、わたしがいうのは、だからなおのこと、いいえ、ですから洗面タオルなんかよりもなおのこと、「トゥエル」が「メルシェ」、小間物屋の扱う商品だったというのはうなずける。江戸時代の小間物屋ではないが、中世のパリのメルシェは、じっさい多種多様な商品を商っていて、その様子は、13 世紀の王の代官エティエン・ブエロー（近代のグラフィーではボワロー）が商工業者に登録せしめた、その台帳、略称『リール・デ・メテ・デティエン・ブエロー』（エティエン・ブエローの職業の書）の 75 項「デ・メルシェ」とか、校訂者

G.P.デッピング氏の懇切な「解説」をごらんになるとよい。

麻のスカーフなんてお手の物で、それはだからよいのだが、「絨毯」、これはどうだろうか。「絨毯」tapizはさすがに小間物屋の扱い商品ではなかったようで、「エティエン・ブエローの職業の書」にも、絨毯屋は絨毯屋で、「タピッセ・ドゥ・タピ・サラジヌエ」と「タピッセ・ドゥ・タピ・ノトゥレ」のふたつの組合を作っている。前者は「サラセン絨毯」で、後者の「ノトゥレ」nostrezは、やはりこれはラテン語の noster かららしく、トブラーロンマツチ御両所は、nostre で項を立てて、のっけにこの文節を引いて、「タピ・サラジヌエに対するに einheimische (その土地の)」だと解説しているが、どうもいささか眉唾物である。「サラセン絨毯」は、むしろ「サラセン風の絨毯」ということで、なにも輸入品ではなかったのではないかと、デッピング氏もコメントしている。

いいえ、ですからわたしがいうのは、助役のインベー・デシャンは「麻のスカーフ」なんかの小間物を扱う大店の主人だったが、最近、シャトレに出かけて、「サラセン好みの絨毯」や「タピ・ファブリック・クアン・フランス」(フランス産の絨毯)の製造販売の許可もとってきた。(あの、このばあい「フランス」というのは「フランス」のことではないですよ。いいえ、パリ周辺のセーヌ中流盆地をそう呼んでいた。後の方で「フランスのワイン」なんていいまわしも出てきます。)

(512)

そうしてその月の10日、日曜日だったが、夕飯後の6時ごろ、ブルグーン侯がパリにやってきた。5日間しか滞在せず、この5日間に大会議が開かれた。また、行列が催された。ノートルダム・ド・パリで、とてもすばらしい説教が行われた。そうしてパレから令状だか書状だかが発行された。(それには)レ・ザルミノーは法王特使の手で、往時、和平を取り結んだことがあり、一方の側、また他方に対して赦しが与えられたことがあった。双方、すなわち王太子とブルグーン侯は大いなる誓約を取り交わし、両者連れ立って、それぞれの側の名のある騎士多数ともども、われらが主の御聖体を拝受しことがあったことが書かれていた。その書状だか令状だかには、両者それぞれが署名し、印章が捺された。その後、王国の平和を希求し、自分が交わした約束を実行することをのぞんだブルグーン侯は、王太子とその顧問官たちが指定するどんな場所にでもよろこんでおもむくであろうとへりくだった態度を示した。そこで、くだんの王太子あるいは王太子に荷担するものたちによって(会見の)場所が指定された。その場所にブルグーン侯は、かれの側近の騎士9名を引き連れてあらわれた。ところが、王太子の前にひざまづいたブルグーン侯は、裏切りによって殺されてしまったのであって、これは周知のことなのだ。(以上のことが書かれていた。) この書状が閉じられたあと、不平不満の声がわきおこった。レ・ザルミノーと深くつながっていたあるものは、これらをたいへん憎んだ。フランス摂政にしてベッドフォール侯は、この不平不満の声

を沈黙させた。ブルグーン侯は、平和がみだされたことに苦情をならした。また、父親の死についても（けしからんことだったといった。）そこで、全員に、摂政とブルグーン侯に対してボンでレオーであることを、民衆の前で宣誓させた。領主たちは名誉にかけてボーン・ヴィル・ドゥ・パリを守ることを、兩人に対して約束した。

[注釈]

「そうしてパレから令状だか書状だかが公表された」 et fut publiee lachartre ou lets

lets は lettre の省略形だが、最後の文字の s はいらない。そこで線で消してある。そういうところに、筆写の様子がうかがわれて、おもしろい。lettre は「手紙」で、royale 「レアル」、王のとつけば「王状」と訳す方が多い。ここはあっさり「レットル」だから、「書状」と訳した。

だから、それはそれでよいのだが、la chartre とはなにか。数行あとに、こんどは順番を逆に ladicte let ou chartre と書いていて、やはりしつかり chartre 「シャルトル」です。テュテイはそのまま校訂し、あとは知らん顔だが、おもしろいのはテュテイをコピーしたコレット・ボーン女史で、女史は charte 「シャルト」と「正しく」直している。注はついていない。日記の筆生が「まちがった」という判定で、なんと続けて「まちがえている」のだから、筆生は「シャルト」を知らなかったとボーン女史は判定を下していることになる。「シャルト」、ラテン語で「カルタ」 charta, carta は、中世では「書き物」の意味で使われ、「サクレ・カルテ」といえば「聖書」です。また、公的な記録文書をいい、「カルタールム・コレクティオ」といえば「記録文書集」です。また、フランス語で「アクト」「ティトゥル」「ディプローム」などと言い換えられる意味合い、だから「証書」とか「令状」とかの訳語がなじむ用例もさかんに出て、ここがそのひとつのケースでしょう。

chartre は charte のひとつのオルトグラフ（綴り）です。それどころか、トブラー—ロンマツチ御両所は chartre で項を立てている。こちらの方が標準のオルトグラフだった。chaarte の指小辞 chartula かららしい。cahatre のオルトグラフもある。なんとボーン女史、大当たりです。いいえ、悪いけれど、ほかのところの振舞いを見ていて、ここだけ、ちゃんとこのことを知っていたなんて思えない。

さてさて、「シャルトル」は「シャルト」と読むとして、問題のこの「シャルトだかレットウルだか」が「公表された」というのはなににごとか。しかも「パレから」ということで、「パレ」は、シテ島の下流側の一郭、いまも「サントシャペル」や「コンシエルジュリー」など、遺構のいくつかを残している「パレ・レアル」王宮です。それが日記の時代には、王家はここには住んでいなかった。王家と王政府の役所に使われていて、ここで「シャルト」が「公表された」ということになると、それは「パルルマン」、王家裁判所の仕事です。

シャルル6世の時代に入って、「パルルマン」が王の署名入りの「シャルト」や「レット

ウル」を「登録する」慣行がしだいに成った。というのはきれいごとのいいまわしで、この件についても、ようやく最近、R.G. ファミリエッツィなどによって、実証的な研究がはじまったばかりです。ありようは、党派対立の渦中であって、王家役人はけっこう王家の立場を立てようとがんばっていたのであって、王の名において発行された文書は、「パルルマン」が「ラティフェ」し、「レジストウレ」しなければダメなんだと、しつこく主張し続けていた。前者は、まあ、「批准」、後者は「登録」でしょう。ありようは、「パルルマン」の会議にかけられたのを、「録事」が帳面に書き写すということで、「録事」は「グルッフエ」といって、これは「鉄筆」からきています。「鉄筆をにぎる役人」ということで、そこで問題のこの時期に「グルッフエ」だったクレマン・ド・フォーカンベルグというのが「執務日誌」を残している。これも録事の仕事です。

『クレマン・ド・フォーカンベルグの日記』と呼ばれているそのテキストの、このあたりの日付のところを見てみると、それがどうもアイマイである。7月19日付けの記事がおもしろい。この前のは18日付けのがあるが、これは中身からみてあたらす、その前のは6日付けである。「この日、パリで、シャルル・ドゥ・ヴァレ殿に関するニュースがおおやけにされた。そのニュースというのは、すぐる日曜日、この月の17日、かれは、それ以前、かれの父、その他フランスの王たちが戴冠したのと同じやり方で、ランスの教会堂で戴冠したというものである。」

記事はまだつづくが、中身から見ではぶいてよい。「ニュースがおおやけにされた」の「ニュース」は nouvelles の戯訳だが、「おおやけにされた」は fut dit publiquement です。「おおやけにいわれた」だが、なんとねえ、日記の筆者の方は、fut publice lachartre ou lets と書いている。publice (publier) は、トブラー—ロンマッチ御両所は veröffentlichen と解いていて、「公にする、公表する」です。同じいいまわしなのですよ。たぶん、これです。「シャルル・ドゥ・ヴァレ殿」に関する情報が、「シャルトだかレットウルだか」のスタイルで「パルルマン」から「公表された」と日記の筆者は理解した。そういうことでしょうか。じっさいにどういうスタイルで公表されたか。これはかなり頭の痛い問題です。シャルル6世の時代の「パルルマン」は、王の「シャルト」ではあっても、「ラティフェ」し、「レジストウレ」したくないばあいは、それを「プルミエ・ウッセ」、守衛長に「窓際で」読み上げさせ、録事はそれを帳面に書き写さないですますということもやったという。この「シャルトルだか書状だか」も、そういう目にあったか。なにしろ時の「パルルマン」の役人たちには「レ・ザルミノーと深くつながっていた」ものも、たしかにいたのです。いいえ、わたしがいうのは、日記の筆者はそれを聞いたかな。

「(以上のことが書かれていた)」

それが日記の筆者は全部を立ち聞きしたわけではなさそうなのだ。「レ・ザルミノーは法王特使の手で」にはじまり、「これは周知のことなのだ」で一区切りつけるこの文章は、

1419年におきたブルグーン侯おそれしらずのジャンがアルマナック党派（レ・ザルミノー）のはかりごとにあつて殺された「モンローの謀殺」事件のことを述べているだけで、そのあとの情勢の推移についてはなにも触れていない。そのときレ・ザルミノーに担がれた15歳の少年シャルル・ド・ヴァレが、10年後のいま、ランスで戴冠式をあげた。そのあたりの現代史について、なにも触れていない。いいえ、パルルマンの録事がいつていることからおせば触れていただろうと思うからで、いいえ、むしろ現下の情勢の、これは報告だつたろうと思うからで、そのあたり、日記の筆者の御時世の推移を見る目つきがなんともおもしろい。

「レ・ザルミノーと深くつながっていたあるものは、これらをたいへん憎んだ」 et tel avoit grant aliance aux arminaux quilz les prind en tsgnt haine

わたしの訳文がおかしいのではなくて、原文の文章がおかしいのです。おもしろいのはテュテイは、だからもちろんオートマチックにボーン女史は、この一文を勝手に読み替えてしまっている。どうぞ校訂本文に添えた「テュテイの校訂文」をお目通しねがいたいのだが、なにしろ単数形の主語や動詞を複数形に読もうという勢いで、それが、そう読み替えてみたところで意味はとれない。御両人の頭のなかでは、すーつと通っているのだろうか。

「摂政とブルグーン侯に対してボンでレオーであることを」「名誉にかけてボーン・ヴィル・ドゥ・パリを守ることを」

「レオー」loyaux は、トブラー-ロンマツチ御両所は leal で項を立てていて、leial, loial, leel のヴァリエントを示し、用例中、loiaus のカタチをいくつか拾っている。ラテン語の legalis の変化で、legalis は lex 「法」からで、だから意味は「忠実な」といったところかな。「法に則った」がもともとの意味です。

「ボン」？ さて、どう意味をとりますか。「モー」ではないということ、「悪心はもっていない」ということでしょうか。「ボーン・ヴィル」？ さてさて、「ボン」とか「ボーン・ヴィル」とかについては、どうぞ「ヴィヨン遺言詩注釈」を、「総索引」を使って、探索してください。なんと、まあ、変幻自在な景色がそこに見えることか。

(513)

続く土曜日、ブルグーン侯がパリを立ち去った。摂政の妻であるかれの妹を連れていて、摂政は摂政で、別の方、ポンテーズの方へ、軍勢を率いて出かけた。リラダンの領主がパリの隊長に任じられた。レ・ザルミノーは、この週、オーセール市に入った。続いてトゥレにいたり、抵抗を受けることなく、市中に入った。パリ周辺の村々の住人は、レ・ザルミノーがこのように征服してまわっているのを知って、家を捨て、財産を味方の町々に移し、まだ実が熟してもいない麦を刈り、ボーン・ヴィルに運び込んだ。すぐ続いて、レ・ザルミノーはコンピーンに入って、その周辺の城塞をいくつか、なんの抵抗も受けることなく、手中に

した。パリの近くではルザルシュとダンマーティンその他たくさんの城町をとった。パリの人たちはおそれおののいた。なにしろ領主がだれもいなかったのだ。それがサンジャックの日、7月の、みんな、いくらか安心した。ヴィセートウル枢機卿が、フランス摂政ともども、パリにきたからだ。騎士の一隊と弓兵大勢、じつに4千を率いてきた。リラダンの領主の配下のピカール勢は7百、他にパリの民兵。

〔注釈〕

「摂政は摂政で、別の方、ポンテーズの方へ、軍勢を率いて出かけた。リラダンの領主がパリの隊長に任じられた」

いいえ、これはもちろん偶然でしょう。そんな、日記の筆者が仕掛けたなんてことはない。それはそうでしょう。そうでしょう。だけど、なんかおかしいなあ。「ポンテーズ」、近代のフォノグラフィーで「ポントワーズ」から、10キロほどエーズ（オワーズ）川を上流の方へ、車で行くなら国道322号線を行くと「リラダン」ですよ。「ポンテーズ」で「リラダンの領主」とわたした。そんな遊んでいるんだなんて。とうてい信じられない。

「レ・ザルミノーは、この週、オーセール市に入った。続いてトゥレにいたり、……すぐ続いて、レ・ザルミノーはコンピーンに入って、……パリの近くではルザルシュとダンマルティンその他たくさんの城町をとった。」

6月29日にレール河畔のジアンをたつた王太子勢は、オーセール、トゥレ（トロワ）、シャロン・スル・マルン（シャロン・スュール・マルヌ）を経て、7月16日にランスに入った。「続く土曜日」がその日です。だから「この週」は「続く土曜日」までの週、7月11日からの週である。なあんて、しかめつらつして計算してみたところで、なんかたよりない。いいえ、日記の筆者の証言が、で、まあ、そのあたりの詮索はここではやめます。いいえ、ですから問題は、日記の筆者はランスを抜かしている。一貫していますねえ、前項でもランスは書いていない。パルマンの録事はその情報は公表されたと証言している。それが日記の筆者はなにも書いていない。

書いていないのはわざと書かなかつたのだと、むかし渡辺一夫先生は、日記を解説してお書きになった。どうぞわたしの論文「中世ナチュラリズムの問題」をお目通しください。コレット・ボーン女史も、プロフェッサー・ワタナベに調子を合わせて、「アン・シランス・セレクトイフ」だと日記の筆者を非難している。「選択的沈黙」ですか、いいえ、なにもボーン女史をからかうつもりはないのですが、ボーン女史はカーン大学の歴史学教授ならしく、主著は『ネッサンス・ド・ラ・ナシオン・フランス』というのだそうです。「フランス国家の誕生」ねえ、タイトルがこのお方の歴史学がどういうのか、教えてください。

閑話休題。『ジャンヌ・ダルク』の清水書院版で157ページ、朝日文庫版で173ページをごらん下さい。「北征の行程」とネーミングをつけて、王太子一行の行程を図に書いておき

ました。トゥレからコンピーン（コンピエーニュ）まで、なんとまあたくさんの「城町」を渡り歩いたことか。ランスを発ったのは7月20日、コンピーンに入ったのが8月18日。シャンパーンとフランスのあいだ、セーンとエーズ、マルンのほとりの道行である。だれとだれの道行か、だって？ 王を称するシャルル・ド・ヴァレと、神のプセル、ジャン・ダール（ジャンヌ・ダルク）のですよ。8月21日、ブルグーン家の使節団がコンピーンに到着した。ヴァレ家とブルグーン家の交渉は、いよいよ大詰めだ。28日、作成された協定文におたがい署名した。これが6年後、1435年の9月、アルテ（アルトワ）のアラスで両家のあいだにむすばれた「アラスの和約」の原本です。

「パリの近くではルザルシュとダンマーティンその他たくさんの城町をとった」

いいえ、「城町」というのは autres fortes villes の戯訳です。「防備をほどこした町々」という意味ですが。「ルザルシュ」はシャンティイの南10キロ。パリからサンドニを経て真北に、国道16号線でまっすぐです。「ダンマーティン」は、まあ、近代フランス語ではダンマルタンと発音しますが、さて、どうぞ案内しますか、パリの東北、30キロほどでしょうか、地理学の方でいう「フランス平野」plaine de France と「ヴァロワ高原」plateau du Valois をわける地方「ゴエル」（いやあ、もうちっぽけな土地ですと、そんな感じでルネ・オワゾンの『フランスの地理辞典』も紹介している）の中心の町です。ただし、ミシュランのギド・ルージュにも載っていない。ルザルシュもだが、そんな、いまは小さな町です。

「それがサンジャックの日、7月の」

7月25日。使徒ヤコブの祝日だが、サンクリストウッフルの祝日にもなっていた。フランスのカトリック教会の「日用ミサ書」のその日のところをみると、スペインに宣教したと伝えのある大ヤコブの話につけくわえて、なんと唐突に「サンクリストフ」の話がはじまる。「サンクリストフ」ではないよ、「サンクリストウッフル」だってば！『遺言の歌』ユイッタ ン138節の注釈をごらんください。

「ヴィセートウル枢機卿が、フランス摂政ともども、パリにきたからだ」

「ヴィセートウル」は「ウィンチェスター」のフランス語読み。かなりなまっている。ここに名指されたのはヘンリー・ボーフォート。これはランカスター侯ジョン・オブ・ゴントと、その3人目の妻カスリーン・スウィンフォードとのあいだに生まれた2番目の男の子で、母親がちがう、こちらは最初の妻ブレンチ・オブ・ランカスターの長子がヘンリーで、これがランカスター王家初代である。手短かにいえば、ランカスター家2代目のヘンリー5世の叔父にあたる。ヘンリー5世の幼い息子が、現在、ランカスター家3代目ということになっていて、ヘンリー5世の弟のベドフォード侯ジョンがフランス摂政、その下の弟のグロスター侯ハンフリーがイングランド摂政ということになっている。

ヘンリー・ボーフォートは現在ウィンチェスター司教であり、1426年以降、「サンエウゼビオ枢機卿」の位格と法王特使の資格を獲得していた。これはおかしい、自国の司教位と外

国の枢機卿の資格をあわせもつなると、甥のイングランド摂政グロスター侯ハンフリーが政争をしかけていて、この争いは翌年までつづく。そういう状況で、「ウィンチェスター司教」は、「枢機卿」の資格において、当時法王庁がボヘミアのフス派異端に対して十字軍を仕掛けていた。その十字軍におくりこむ軍勢を率いて、フランスに渡ったのである。「騎士の一隊と弓兵大勢、じつに4千」の中身はそういうふうであって、けっきょくヘンリー・ボーフォートは、兵力を甥のベドフォード侯にあずけたかたちで、8月の初旬、ルーアンに引き揚げてしまった。

「リラダンの領主の配下のピカール勢」

リラダンの領主ジャン・ド・ヴィレは、ブルグーン侯おひとよしのフィリップの信頼あつく、おひとよしの「ネーデルラント戦争」を戦った武将である。これにパリの守備隊の指揮をまかせたことは、おひとよしと、おひとよしの愛する妹、アン・ド・ブルグーンの夫であるベドフォード侯ジョンとの同盟関係の証だった。「ピカール勢」は「ピカルディー」で徴募された軍勢であり、「ピカルディー」の中心の土地である「ソンム川流域の町々とその施政地域」は、ブルグーン家がフランス王家から「預かった」土地だった。「ピカール勢」はブルグーン家が提供した兵力だったのである。

(514)

なんと、レジノッサンで説教して大勢の人を集めた例のコルドウレ僧が連中と一緒に馬に乗って歩いているそう。パリの人たちは、なにしろやつはそうやって歩きまわって、それまではフランス摂政とそのお味方に誓言を立てていた町々を離反させたのだといまさらながら思い当たって、神と諸聖人にかけて呪い、それだけでは気がすまなかったか、ターブルとかデとかブルとか、つまりはやつが禁じた遊びという遊びを、またぞろ、やつへの面当てにはじめたのだ。くわえて、やつが（みんなの首に）かけさせたイエスの名を打ち出した錫の円金を捨ててしまって、いっせいにサンタンドゥリ十字架をかけた。

[注釈]

「イエスの名を打ち出した錫の円金」

「円金」の原語は「メロー」、トブラー-ロンマツチ御両所は *merel* で項を立てている。拾われた用例文中、*meraus*, *meriaus* のヴァリエーションがしきりに出る。どちらにしてもフォノグラフィは「メロー」です。御両所はコインのかわりに使われた金属片というイメージを第一義にあげる。リトレも *mereau* の項を立てて、*la monnaie de convention* と定義する。「モネーとみなされたもの」でしょうか。どうもこういった解釈は、通貨流通の状況が近代とはちがう中世にはなじまない。中世のコインは、いつてみればみんな「モネーとみなされたもの」です。「メロー」は数取り遊戯のコマで、それは約束の上でコインのかわりに使わ

れたこともあったとぐらいに理解しておいたほうがいい。

「サンタンドリ十字架」

「サンタンドリ十字架」の徽章については、1411年、17項の記事の注釈に述べた。『人文』1の194ページ以下を参照されたい。なお、テュテイの項分けも、ここでは同じ数字である。

じっさいのところ、ブルグーン家と「サンタンドウル十字」との関係は、それほどはっきりはわかっていない。なにせよ、その関係を指摘する情報が乏しいのだ。紋章をはじめ、旗指物、甲冑や陣羽織の装飾画にはどこにも出ない。ただ、「金羊毛騎士団」の創立に際して、フィリップ・ル・ポンは「戦いの雄叫び」を、それまでの「モンジュエ・オ・ノール・ドゥック」から「モンジュエ・サンタンドウル」へ変えたという話がつたわっていて、この「サンタンドウル」が（権兵衛は「サンタンドウリ」と書いている）イエス・キリストの一の弟子使徒アンドレなのだ。（このことについては『ブルゴーニュ家』の「アラスで綱引き」をご覧ください。）

あとは、これは17項の注釈に書いたことだが、「金羊毛騎士団」は、その年の11月30日に第1回集会をもった。「サンタンドウルの祝日」である。

じつのところ、たしかな情報はこれだけなのである。

そこで、この記事だが、これは「金羊毛騎士団」が設立される半年前の記事である。どうして、また、1429年の夏のパリで、「サンタンドウリ十字架」がブルグーン家からみで噂になったのか。

ところが、これはじつは問題の立て方がおかしいので、よくよく記事を読んで見ると、権兵衛はどこにもその問題の「サンタンドウリ十字架」がブルグーン与党の標識だなんて書いていない。読む方がかってにそう読んでしまっているということなのかもしれない。それはブルグーン家の宣伝方が市中で活動していて、「サンタンドウル」をブルグーン家の徽章ということで、さかんに売り込んでいたというこだったかもしれない。けれど、もし、そうだとしたら、権兵衛はまずまちがいがなく、そのことを書いたろう。なにしろかれは穿鑿好きで、好奇心旺盛なのだから。

なぜ権兵衛がここで「サンタンドウリ十字架」をいったのか、結論は分からない。

(515)

(月の) 終わりごろ、ボーヴェ市とサンリス市がレザルミノーに帰順した。

(516)

8月25日、サンドニの町がやつらに占領された。その翌日には、パリの門のすぐそとにまで、かれらはやってきた。ブドウを収穫しようと、ぜがひとも門外に出ようとするものはひとりもいなかった。畑に野菜を摘みに出ようとするものはいなかった。だからまたたくま

にものがみんな高くなった。

(517)

サンローランの宵宮のことだったが、サンマルタン門が閉鎖された。そうして触れがまわって、なんぴともサンローラン詣でに出るべからず、市に出かけるべからず、禁を冒すものは絞刑、と。だからだれも出かけなかった。サンローランの祭はサンマルタンの広い境内で催された。大勢の人がそこに集まった。だがなにも売られていなかった。わずかにチーズと卵、それに出盛りの果物が何種か。

[注釈]

このあたり、item で区切られているものだから、テュテイは律儀にそれぞれ項を立てているが、中身はつながっている。北からパリに迫る王太子シャルル・ド・ヴァレの軍勢の動静を、段階を追って伝えている。

「ボーヴェ市とサンリス市」

「ラ・シテ」とわざわざことわっているので「市」をつけた。サンリスはコンピーン（コンピエーニュ）の南南西 30 キロ。エーズ（オワーズ）川の東。フランスという地方に入る。ボーヴェはボーヴェジの中心の町。ボーヴェジは「フランスとピカルディーのあいだ」の土地。コンピーンの西 50 数キロ。やがてジャン・ダールはコンピーンのエーズ川対岸で捕虜になり、ノルマンディーのルーアンで異端審問を受けることになるが、そのコンピーンのエーズ川対岸はボーヴェ司教の管区に入る。司教管区で発生した異端事件という扱いで、ボーヴェ司教ペール・コーションが、フランス王国宗教裁判官ジャン・グラヴランのルーアン司教管区における代理人、ドミニコ修道会修士ジャン・ルーメートウルに協力して、裁判を主宰することになる。なお、このふたつの町は、「シャルル・ド・ヴァレとジャン・ダールの道行き」の行程には入っていない。二人をふくむ本隊はコンピーンからサンドニへ直行した。

「サンドニの町がやつらに占領された」

8月26日、アランソン侯ジャンのひきいる先遣隊がサンドニに入った。ジャン・ダールも連れている。シャルル・ド・ヴァレ本人は9月7日にサンドニに着いている。

「サンローランの宵宮のことだったが、サンマルタン門が閉鎖された」

原文はあっさり、「ラ・ヴィジル・サンローラン」、サンローランの宵宮に、「フ・フェルメ・ラ・ポルト・サンマルタン」、サンマルタン門が閉鎖された。「サンローランの祝日」は8月10日。だから宵宮は9日です。それが、前項はもう8月25日の話題を出している。日記の記事のつながりぐわいについては、たいへんやっかいな話がいろいろあって、ここでも、さて、ここは前項とこの項と、記事が前後しているのではないかとうたぐってみることもも

ちろんできる。いずれ日記の筆者が書いたがまんまに写本が伝承されたと考えるほど、だれしも単純ではなからうよ。

だがしかし、うたがうラティオがあまりないときには、ヴァチカン写本の書写のままに、ともかく読んでみるのが大事で、日本語に写すことが大事で、日本語に写すとき、こんなふうに書くと、なにかこのままでつながるのではないか。「サンローランの祭」は9月末ごろまで続いたのです。これは定期市でして、(503)の注釈で紹介した「サンローラン・ドゥオー・パリ」、城外のサンローラン教会の境内で、市がひらかれる。八月末のころ、市と祭は真っ最中だった。

それがこの年の市と祭は、サンマルタン大通りの北のはずれのサンマルタン修道院の境内で開かれている。なにしろ市と祭の開かれるサンローランの宵宮に、パリからサンローラン教会に詣でるには、サンマルタン大通りの北のはずれのサンマルタン門をとおるのがふつうだ。その門が閉鎖され、みだりに城外に出ることが禁止されたのだから。ちなみに、ふつう門は、その門を出てどんだんいくとどこに着くかで名付けられる。ほかの門については、その門の名前が出てきたときにお話するが、ここでは、それではなぜサンマルタンか。なぜ「サンローラン門」というふうにならなかったのか。答えはかんたんで、門の名前が付けられたころは、まだサンマルタン修道院は「城外」だった。その後、城壁がふくらんで、サンマルタンを「城内」に取り込んでしまったのです。

なお、「サンマルタン」「サンローラン」の表記だが、時代のフォノグラフィーは、それは「サンマーティン」「サンルーリン」の方が近かったろう。それが、さすがに「サンマーティン」「サンルーリン」で押し通す勇氣はなく、「ヴィヨン遺言詩」注釈の方でも、どっちつかずのあいまいな態度に終始した。ここでも、また、どっちつかずの気分のまま、最初の下書き原稿の表記のまま、ここはさしあたり逃げの一手です。

(518)

1429年9月の最初の週、レクアルトゥネは、それぞれがそれぞれの場所で、パリに防備をほどこしはじめた。墨道の門や城壁の上の家々に大砲を据えつけ、石弾がいつばいつまった樽を用意した。町の外堀をさらい、町の外にも内にも柵を結った。そのころレ・ザルミノーはアランソン伯の印章の捺された手紙をあててきた。それにはあんたがた、パリのプレヴオー、商人たちと助役たちのプレヴオーへと書いてあって、プレヴオーたちを名前で呼んでいて、永遠の救いのあらんことをと言葉を飾って書いていて、それもこれもおたがい敵同士の人衆を感動させようという腹で、それがやつらの悪心は明らかで、そこでこんなことをやって紙をムダにするなど返書が書かれて、それで無視された。

[注釈]

「レクアルトウネ」

クアルテの長、区長みたようなものだと思うのだが、どこかに、たしかサンマルタン門を修復するという話に「ディジネ」、十人組長その他と一緒に出てきたと思う。

「塁道の門」

城壁の外側に堀割がめぐっていて、その外側の土手を「ブルヴァー」と呼ぶ。後代城壁と堀割と「塁道」を地均しして通したのが「グラン・ブルヴァール」、大通りです。

「城壁の上の家々」

「メゾン・クィ・エテ・ス・レ・ムー」と書いていますので。見張り小屋などを指すかとボーン女史は理屈っぽい。「メゾン」を建てて住んでいたのもいたかもしれないではないですか。「トゥルシュとオヨーの絵図」には、たしかに見張り小屋しか見てとれないけれど。

「商人たちと助役たちのプレヴォ」

「プレヴォ」はもともと「前に出された者」で「代表」で、だからこのいいまわしはまことに適切で、「商人たちの代表」がすなわち「商人頭」、自治の町パリのリーダーです。それが「エシュヴァン」、助役に補佐される。それを「助役たちのプレヴォ」と言い回して、商人たちのプレヴォは「助役たちのプレヴォ」なのです。

「永遠の救いのあらんことをと」

「ルー・マンデ・デ・サル」だが、このいいまわしはわかりにくい。テュテイもボーンも注記していないが、おわかりなのですかとからかいたくなる。ひらたくいってしまえば「かれらのためにサルをもとめる」と読めばよく、「サル」はキリスト教でいう「救済」です。トブラー-ロンマツチ御両所は、「サル」の項で、ヴィルアルドウエンから引いていて、「エ・リ・アポステル・ルー・マンダ・ア・バロン・エ・タ・ペルラン・サル」 et li apostoiles lors manda as barons et as perelins salut 「法王はそこで領主たちと巡礼のために救済を求めた。」法王が神にマンデするというのなら話がよくわかるというものだ。

「こんなことをやって紙をムダにするなど返書が書かれて」

「エ・ルー・フ・マンデ・ク・プル・ヌ・ガタッス・ルー・パペ・プース・フェール」だが、直訳すれば「かれらに返事が送られた、これをするために自分たちの紙をむだ遣いするなど。」ここの「マンデ」は前注の「マンデ」とはちがう使い方をしている。そんなところもおもしろいが、それよりおもしろいのは「ガタッス」gatassentで、テュテイはgastassentと「正しく」校訂している。たしかにトブラー-ロンマツチ御両所も gaster で項を立てていて、語源はラテン語の vastare、用例文中のヴァリアントに guaster が見え、「ジャテ」ではなく「ガテ」の読みでよいとわかる。それが「ガテ」で「ガステ」の読みではないことは、同じく用例文中 gater のカタチが見える。3例拾っていて、みんな1907年にパリで刊行された騎士道冒険物語『フロランス・ド・ルーム』からで、だから校訂者のA. ウアレンスケルト

(ドイツ人?)の誠実を信ずるのほかはない。ただ、ここに味方があらわれたわけで、日記の筆者の、というよりはヴァチカン写本の筆生の誠実を信じるとすれば、かれも *gatassent* と書いている。*gatassent* とは書いていない。天地神妙に誓って本当です。だから「ガタッス」だ。

(519)

9月、聖母お誕生の宵宮、レ・ザルミノーがパリの城壁に押し寄せてきて、パリに襲いかかって占領しようとはかったが、占領するなんてぜんぜんできず、たっぷり苦痛と恥にまみれる不幸な目にあっただけ。なにしろ大勢が深手を受けて命を落としたので、襲撃をかけてくる前までは健康そのものだったのが、それが愚か者はいざ起きてみなければ信じない。わたしがいうのは、なにしろかれらはたいへん不幸な目にあつた。なにしろかれらに随伴する、人がラブセルと呼んでいる、これが何物かは神のみぞ知るだが、くだんの女の形をした一被造物の言を軽々しく信じ込んだ。

聖母お誕生の日、かれらははかりごとをめぐらし、意見一致して、その日、パリを襲った。じつに1万2千あまりが集まったのであって、大ミサのころあい、11時か12時のあいだ、かれらのプセルをともなって、パリの堀割を埋めようと、3本のたがに縛りくくった木の枝の大束をたくさんの荷車、手押し車に積み上げ、馬の背に背負わせてやってきた。サントノレ門とサンド二門のあいだに襲いかかりはじめたが、じつになんともはげしい勢いだった。襲いかかりながら、なんとも汚い言葉をパリ方に口々になげかけた。そこにかれらのプセルは、旗を立てて堀割の土手の上に立ち、パリ方にむかっていうには、イエスにかけて、すみやかにわが方に降伏しろ、夜になるまでに降伏しないときには、わが方は力づくでも押し入るぞ、そっちの思惑など知ったことか、全員皆殺しの憂き目にあうぞ。なにおう、とだれかがいった、ペアルドめ、リボードめ。そうしてそのものは大弓をまっすぐかの女めがけて射る、矢はグサリと脚に刺さる、かの女は逃げる。もう1本の矢がかの女の旗を持つものの足に刺さった。そのものは傷ついたとじてて顔甲をあげ、足を見て、突き刺さった回転矢を引き抜こうとした。そのとき、もう1本の矢が飛んでくる、両眼のあいだに突き刺さって血が噴き出る、かれを傷つけ殺す。後になってラブセルとアランソン侯が誓っているには、かれを失うくらいだったら、むしろわが方の軍勢のうち、最良の戦士40人を失う方がよかつたのにと。

襲撃はあちらこちらでたいへんはげしかった。昼食後、4時ごろまで続いた。どっちが優勢か、だれにもわからなかった。4時をすこしすぎたころ、パリ方はここを先途と勇気をふるって大砲だ大弓だと浴びせかけたので、敵方は勢い退かざるをえず、攻撃をやめて退却した。なにしろ退却できたものはさいわいとしなければならなかった。なにしろパリ方は巨大な大砲を備えていて、砲丸はサンド二門からサンラードルを越えるあたりまでとどいたのだ。

これが逃げる敵勢を背後からおそった。これにはやつらはたまげただろう。そういうわけで敵方は敗走にうつったのだが、パリ方はそれを追尾しようと城壁の外に出ることはしなかった。敵方の待ち伏せを恐れたからである。逃走の途中、かれらはレポシュロンのそばのマトゥラン修道院の穀物倉に火を放った。そうして襲撃のときに死んだのを馬の背に乗せて運んでいたのをその火のなかに放り込んだ。むかし、ローマで異教徒たちがやったのと同じ手口だ。かれらはプセルを呪った。プセルはこの襲撃でパリの町を力づくでとることになるだろう、かの女はその夜パリの町中に泊まることになろうし、かれらもそういうことになるだろう、市の財産で全員金持ちになるだろうし、町を守ろうとするものがあれば、そのものは剣に倒され、家に火をかけられて焼け死ぬことになるだろうとかれらに約束したというのだ。それが、(むかし) オロフェルンのおそろしいくらみを、ユーディという名の女性を使って変えさせた神は、(いままた) 憐れみを垂れて、かれらが思ってもいなかったふうに事が運ぶよう塩梅なされたのである。なにしろ翌日、敵方は人をよこして味方の遺体を收容させたのだが、かれらといっしょにやってきたエローは、いったいどのくらい負傷したのか、誓言を立ててこたえろと迫られて、誓言を立てていうには、千5百あまり、そのうちじつに5百かそれ以上が死ぬか、瀕死の重傷を負ったと。そうして、また、これはうそではない、この戦いで40騎から50騎ほどのイギリス勢がその責務を十全にまっとうしたのであって、これほどの戦士たちはほかにいなかった。なにしろ敵勢が曳いてきた枝束を積み込んだ荷車のほとんどをパリ方は奪い取ったのであって、だからなにしろ聖母御誕生の祝日などにこのような殺戮を働こうなどとやつらは思いつくべきではなかったのだ。

[注釈]

「聖母お誕生の宵宮」「聖母お誕生の日」

ヴァチカン写本は句読点を打っていない。それがテュテイは校訂文に句読点を打っていて、そこでおもしろいのは *que cestoit dieu le scet* と *le jour de lasainte nativite nos dame* のあいだに読点を付している。そこまでの文章と「聖母お誕生の日」以下を続けて読むということで、それが「聖母お誕生の宵宮」は「聖母お誕生の日」の前日で、9月7日です。その日にレ・ザルミノーのパリ襲撃があつて、その翌日9月8日の「聖母お誕生の日」に再度襲撃があつた。そう読めばよく、なにも続けた文章と読むことはない。ボーン女史は「聖母お誕生の宵宮」に、「9月7日と8日」と注をつけていて、なにしろ女史はテュテイの校訂をそのままもってきているのだから、なんともいたしかたがないところだったか。

それがヴァチカン写本のこのところは、なんともおもしろい景色を見せていて、*dieu le scet* まででフォリオ119表は終わる。それも最後の行は、なぜだかちょうど半分ほどで終わっていて、そのあとは書いていない。書いていないというよりも、フォリオ119裏の第1行目から書きはじめている *le jour de lasainte nativite nos dame* 以下の文章と、ここはつながつ

ているのだよといたいのか、なにやら横線を1本引いて、それを4箇所、短い2本の縦線で切っている。だからフォリオ119表の最後の行が半分ほどで終わっているのは、なにもここで文章は切るのだよとっているわけでもなさそうで、むしろこの景色は写本の書写がどんなふうだったかを考えるのにおもしろい材料になる。

だいたい追込みで書写しているのだから、ここで文章がいったん切れるのだという思い入れではなかろう。目線の先に置いていたもとの写本がそうなっていたのか。まだ文章はその流れで続いていて、それがなくなっていたのか。ここでたまたま書写の手を休めて、またペンをとったときに、裏から書きはじめたか。そうして、あとで、ああ、いけねえと隙間を埋めたか。ちなみにパリの写本は、そんな隙間なんて知ったことかと、追込みで続けて書いている。まあ、パリの写本はあてにならないからどうでもいいけれど。

だから、なにもヴァチカン写本の景色がそんなだから、だから文章はここでいったん切れるのだといたいのではない。「聖母お誕生の宵宮」と「聖母お誕生の日」と、2度にわたる襲撃があったことはほかのテキストにあたっても知れる。わたしがいうのはノートルダムの参事会の会議録のことで、なんとテュテイが脚注にあげてくれているしろものです。参事会の録事ニコラ・セレの手で、9月7日水曜日と頭書きされている。それが、その頭書きがどうもくせもので、テュテイは「メルクーリ・セプテム・セプテンブリス」と置いて、改行して「ホディエ・フィット・プロケッシオ」と文章をはじめているのだが、見ていないでんだが、原本は、ここは改行せず、文章は続いているのではないか。

「9月7日水曜日、この日行列が」というぐあい、その行列のことを書いた短い文章に続けて、「エト・エスト・スキエンドウム・クオド・イブシ・イニミキ」と話題を移している。「そうしてこれは知っておくべきことだが、かの敵勢は」ということで、「聖母お誕生の宵宮」のレ・ザルミノーのパリ襲撃の話です。ここには、日記と同様、ラプセルは出てこない。そうして、ざっと読んでいくと、「イン・クラスティヌム・ウェロー・イン・ディエ・フェスティ・ナティウイターティス・ベアーテ・マリエ・ウिल्ギニス」「そうして翌日、じつに聖母お誕生の日」と、呼吸を日記に合わせている。まあ、これは冗言だが、そういうことで、だからわたしがふしぎに思うのは、これを参考史料として脚注に引きながら、なぜかテュテイは「聖母お誕生の宵宮」と「聖母お誕生の日」と、レ・ザルミノーの襲来が2度にわたったことの次第をあいまいにぼかしている。なぜだろう。

「大ミサのころあい、11時と12時のあいだ」

ノートルダムの録事は「キルカ・ウーナム・ホーラム・ポスト・メリディエム」、正午すぎの1時ごろと書き、すこしあとに「ウスクエ・アド・メディウム・ノクテム」真夜中までと補っている。

「かれらのプセルをともなつて」

「ルール・プセル・アヴェツ・クー」、かれらのプセルがかれらとともに。ノートルダムの

録事も「クム・エオールム・プエラ」、かれらのプエラとともに、と調子を合わせている。

「3本のたがに縛りくくった」

粗朶束は籬3本で括るものだったか。なにしろ観察眼が見てとれておもしろい。「ブール」bourreesは、リトレによれば、「ブール」bourreの転用だという。「ブール」は動物の毛のかたまりや束をいう。それはよいのだが、ノートルダムの録事もこれをあげていて、「ボレタ」boretaと書いている。別のところではborretaと書いている、あやふやだが、だいたい語源もあやふやで、リトレはbourreの項でラテン語のburraをあげているが、これは古典ラテン語にはない。だいぶ苦しい。

「木の枝の大束をたくさんの荷車、手押し車に積み上げ、馬の背に負わせて」

ノートルダムの録事は、逃走するくだりに、レ・ザルミノーの装備について書いていて、「ボレタ」のほかに「640脚の梯子」「4千のガリア語でド・クレ」を「3百台のクアドリガ」に積んでと書いている。「クアドリガ」は4頭の馬に曳かせる荷馬車です。「ガリア語でド・クレ」de clayesは、トブラー—ロンマツチ御両所はcloieで項を立てていて、Hürde, Flechtwerkの解を与えている。これは「法面(のりめん)を被覆する柵(しがらみ)」をいう。

ボーン女史は、ここではなく、この記事の書き出しのところに注をつけて、それがなんともけっさくで、「王とその大顧問会議の多数は、パリ攻撃を望んでいなかった。むしろ協議を望んでいたのである。この襲撃は、だから、少人数の部隊によって試みられたものであった。町は防備完璧で、攻略は困難だった」と書いている。「王とその大顧問会議」がおもしろいが、それはよいとして、わたしがいうのは「少人数の部隊によって」のところ、なにしろ「王軍」が敗退したのだから、なんとかつじつま合わせをしなければならないとあせっている気配は分かるが、ノートルダムの録事の記事は、そんな「少人数の部隊によって」、かるく仕掛けられた、これは襲撃ではなかったことを伝えている。

「サントノレ門とサンドニ門のあいだ」

いろいろな意味合いで、このいいまわしはおもしろい。このふたつの門はセーヌ右岸の西面の門だが、このふたつの門のあいだに「モンマルトル門」がある。どうして、どうして、無視していいような小門ではない。日記の筆者は、(497)の注釈に書いたように、べたに列挙するくせがあると同時に、こういうふうにとぼしてものをいうくせがある。あとで紹介します、1431年の暮れ、王宮での大宴会の記事に「なんと80人、百人が」「ひとりふたりをなんとかどかしても、別の方から6人、8人とわりこんで」と読めるのもその一例だ。サントノレ門跡はいまはオペラ通りの起点で、テアトル・フランセ広場と呼ばれている。ルーヴル寄りの建物の1階と2階のあいだの壁面にジャン・ダールの胸像、といっても頭部だけのがかけられている。その真下の店は、ひところは「大阪屋」というラーメン屋だったが、いまはどうなっているか。『日記のなかのパリ』の「一冊の本」をごらんください。写

真までのせておきました。

「そこにかれらのプセルは、旗を立てて堀割の土手の上に立ち」 leur pucelle atout son estandart

「アトウー」atout は avec 「とともに」と同義。「旗とともに」とあっさり書いている。後の方で「かの女の旗を持つもの」 celui qui portoit son estandart と書いている。「エスタンダール」estandart は、「バネール」baniere とならべて意味と形状が特定されて、これは平騎士の旗印である。「バネール」は「エスタンダール」よりも上位の身分の騎士の「旗幟」である。「旗幟」には、その所有者の家の紋章が完全に描かれていなければならない。その点「旗印」は略式で、通常、細長い三角形である。いや、むしろこういおうか、細長くて、先端がすぼんでいる。ノートルダムの録事も「デフレレンス・スアム・ウエクシルム」と書いていて、「ウエクシルム」vexillum は「スタンダード」だと古典ラテン語の辞典は解を与えている。中世ラテン語のニールマイヤーの辞典は、「侯位」あるいは「封」をあらわす用例があると指摘しながら、第一義に「指揮権を象徴するエタンダール」の解を与えている。「エスタンダール」は、まず戦場の指揮者の表徴である。

ラブセルはたいそうな位階を与えられていたわけだ。それでも「旗幟」ではない。ラブセルは紋章を所有してはいない。パルルマンの録事が、その日誌の余白にスケッチした想像のジャン像は「エスタンダール」をひるがえしている。ノートルダムの録事が「デフロレンス」deflerens と書いている。「デフルエーレ」defluere の現在分詞で、つづりがすこしおかしいが、「風になびく」の意味です。もとはシャルル・ドルレアンの詩集の写本飾り絵だったろうと思われるラブセルの肖像がある。こちらの方はなにやら横長の旗に描かれているが、よく見るとこれも先端が「すぼんでいる」。「旗印」です。ふたつとも、『ジャンヌ・ダルク』に挿画として載せた。ごらんください。

「ペアルドめ、リボードめ」

以前書いた本では、「なにおう、この助平女め、淫売め」とわたしは訳した。なにしろ女性に対して失礼な戯れ言で、それどころか、「ジャンヌ・ダルク」に対してなんという罵詈雑言かと、むかし、このくだりを引用した著述者たちのうち、この二語を伏せ字にしたのがある。気持ちはわかりますけどね。

「そのものは大弓をまっすぐかの女めがけて射る、矢はグサリと脚に刺さる、かの女は逃げる。」「そのとき、もう一本の矢が飛んでくる、両眼のあいだに突き刺さって血が噴き出る、かれを傷つけ殺す。」

ヴァチカン写本がそう動詞の現在形で書いているのです。わたしがかってに訳に工夫を凝らしたわけではない。写本の筆生のアイデアでもない。日記の筆者がそう書いたとわたしは見る。たぶんかれはサントノレ門近くの城壁の上にはいずりのぼって、情景を見ている。実景描写です、これは。見た光景がかれに動詞の現在形を強いた。あるいは、夜半、昼間見た

光景を想像裡にかれは実見している。物の値段、通りにころがっている死体、大風の残した被害、見たものをそのまま書く、これもまたかれの文章癖です。

「矢はグサリと脚に突き刺さる」 et lui per la jambe tout out

ノートルダムの録事は「かれらのプエラはフェムールに傷を負った」 eorum puella in femore vulnerata fuit と書いている。「フェムール」 femur は「大腿部」です。「ジャンプ」、脚とはちがう。さてさて、ラプセルはどこを怪我したか。もつとも、ノートルダムのは「ウト・ディキートゥル」と書いている。「といわれている」です。かれはじっさいには見なかったと白状している。

「アランソン侯」

「ヴィヨン遺言詩『遺言の歌』」の「むかしの男たちのバラッド」の反歌に「死んだボン・ドゥック・ダランソン、どこいった」と読める。『遺言の歌』は1420年代の青春時代を過ごしたサンブネの司祭が、1460年前後にまとめた詩文集です。アランソン侯家の当主ジャン2世はまだ存命です。フランス王家に対する反逆の罪を問われて、レール下流ロッシュの土牢に拘禁の身の上だ。だから「死んだ」のはその父親のジャン1世で、それがこれは1415年のアジnkールの戦いに死んでいる。アランソン侯謀反の評判は高く、サンブネの司祭が「ドゥック・ダランソン」をことあげするとき、その「アランソン侯」は息子の方だ。そうしてアランソン侯は、サンブネの老司祭の青春の記憶に若々しい武将の身をあらわす。サンブネの司祭はサントノレ門近くの城壁の上にいる。日記の筆者と隣り合わせていたかもしれないではないか。ジャン・ダランソン、1409年の生まれ。なんとねえ、王太子からラプセルの守護を命じられたのは二十歳の若者だったか。ついでのことにメモしておこう、1467年死去。なんとねえ、サンブネの司祭の死と前後している。

「昼食後、4時ごろまで」 jusques a quatre heures apres disner

「ディネのあと、4時まで」と書いている。「ディネ」は、いまは、「午餐」あるいは「晚餐」でしょう。それが、この時代の用語としては、「ディネ」は朝食あるいは昼食です。夕食は「スーペ」。トブラー—ロンマツチ御両所が、1887年にパリで出版されたルーマン・クルテ（騎士道物語）『エ—ムリ・ド・ナルボン』から、ふたつとも入っているすてきな用例を拾っていてくれる。「お願いだ、スーペをわたしといっしょにとっておくれ、それに朝はディネも。」このばあいは朝食ですね。

「砲丸はサンドニ門からサンラードルを越えるあたりまで」

サンドニ門の跡地のプールヴァール・サンドニに、「サンドニ門」と称する奇怪な構造物が建てられていて、門構えのなかに入ると犬の排泄物の臭いが鼻につく。そこからほぼまっすぐ北に1キロと200メートルの「ガール・デュ・ノール」、北駅が往時「サンラードル」です。どうぞ、すこしもどって、1427年5月、「雨のサンマルタン門外」の記事と注釈をごらんください。

「レプシュロンのそばのマトウラン修道院の穀物倉」

パリ9区、サンラザール駅前の通りサンラザール通りから南のプロヴァンス通りにかけて、14世紀の頭のころだが、プシュロン家というのが屋敷を構えた。プロヴァンス通りは往時「メニルモンタン川」と呼ばれた川で、後代暗渠に変わり、プロヴァンス通りが通ったのです。ギャラリー・ラファイエットの裏通りです。世紀末にル・コック家の所有に移り、問題のこの時期には、パリの商人頭ウーグ・ル・コックの屋敷地になっていて、「シャトー・ドゥ・コック」とも呼ばれていたようだ。ジャック・イレーレの本には「ポルシュロン」だけ「プルシュロン」屋敷 chateau desporcherons と呼ばれたと書いているが、ヴァチカン写本には les pocherons と見える。モンマルトル門を出て北西に行く見当で、「トゥルシェとオヨーの絵図」にもしつかり屋敷が描かれているが、ただ「レトゥルシュロン」lestorcherons とネーミングされているのが気になる。lesporcherons ではない。このあたりのめんどろないきさつは、どうぞ「ヴィヨン遺言詩注釈IV『遺言の歌』下巻」を、別巻の「総索引」を手掛かりに、ごらんください。

「マトウラン修道院の穀物倉」lagranche des mathurins だが、「マトウラン」だけ「マトウリン」だけか、いまのクリューニー博物館、往時クルーニー修道院のパリの宿舎と東のサンジャック通りのあいだに境内をかまえていた修道院で、どうぞそのあたりの事情については「ヴィヨン遺言詩注釈」を、「総索引」をご利用になられてごらんください。そこで「穀物倉」だが、さて、そう訳してよいものか。実態は「荘園」らしく、「トゥルシェとオヨーの絵図」に、「レプルシュロン」の東、「メニルモンタン川」の南岸、だからいまの見当でいえばプロヴァンス通りとブールヴァール・モンマルトルのあいだの見当に「ラグランシュバトゥレール」lagranchebateliere とネーミングされた建物がある。どうやら荘園の荘館らしく、この名前はなんとそのまま、通りの名前に残っている。「リュ・ド・ラ・グランジュ・バトゥリエール」、バトゥリエール穀物倉通りです。ジャック・イレーレによれば、なんとこの農場は歴史が古く、9世紀にはじまっている。レ・ザルミノーが火を放った前後、サンブリウー司教ジャン・ド・マレストウレの所有になっていた。いいえ、だからこの荘園だか荘館だか「マトウランのラグランシュ」、マトウラン修道院の穀物倉だったのかどうか、どうもよくわからない。サンブリウー司教とマトウラン修道院につながりがあったのか。同じような「ラグランシュ」がモンマルトルの麓にはいくつあつて、そのひとつが「マトウランのラグランシュ」だったのか。いまのところ、わからない。

「オロフェルンのおそろしいくらみを、ユーディという名の女性を使って変えさせた神は」

ユーディ judihe はオロフェルン olofernes の率いるアッシリアの軍勢に包囲されたベトゥリアというユダヤの町の女性で、なにしろ侍女ひとり連れて、単身敵将オロフェルンのところに出かけ、ねんごろになったふりをして、あいてをだまし、首をかきぎって、町に持ち

帰ったというすごい女性です。旧約聖書の外典「ユーディット書」に書いてある。中世人はこの話が好きで、なんでも謙譲の美德の権化だということで（どうもよく理解できないが）、一方オロフェルンの方は傲慢の典型だと型通りに並べて見せている。ユーディットはシャルトル聖堂の北扉口をはじめ、あちこちの教会堂の浮き彫りになっているし、写本の飾り絵もたくさんある。ルネサンスの絵師たちがまたこのテーマを好んでとりあげて、ポッティチェリのは侍女に首をもたせて、それも大原女のように頭に担がせて、意気揚々と引き揚げる途中だ。クラナッハ父のは上品な女性がかたわらのテーブルにオロフェルンの首を載せて眺めている。そんなこんなであげていけばきりが無い。

おもしろいのはボーン女史の素っ頓狂ぶり、この例をあげる日記の筆者とどうかしている。ユーディットは神の道具ではないか。「ジャンヌ・ダルク」は悪魔の手先、だからオロフェルンの役割を演じていると日記の筆者は見ている。話が逆転しているというのだが、なにがなんでも「ジャンヌ・ダルク」を中心に据えて見なければ気がすまないいまのフランス人の気分が伝わってきておもしろいのだが、わたしがいうのは、それは日記の筆者はラブセルから「ユーディ」を連想したのでしょう。それが、いったん連想がなると、あたらしい想念はそれはそれなりの動き方をする。中世人の発想にはそういうところがあって、このばあい、かれの想念はラブセル-ユーディの連想から、包囲された町-包囲からの解放という対概念で構成される想念へ移っているのです。

「かれらといっしょにやってきたエローは」 le herault qui vint avec eulx

「エロー」の語源はさだかではない。ローマン・ガリアのラテン語に「ヘラルドウス」 heraldus があるが、これはどうやらゲルマン語から入ったらしい。だから「ヘラルド」と英語流に発音した方がいいかもしれない。イングランドの紋章院制度では、「ヘラルド」は「紋章官」で、現在の紋章院では6人だが、そういうふうに「キング・オブ・アームズ」を上級役人とする、あるきまった数の役人集団である。「パースヴァンツ」と呼ばれる、より下位の役人集団を指揮する。「属官」ですね。「エロー」や「パースヴァンツ」、フランス語の発音で「プールスヴァン」の呼び名は「ヴィヨン遺言詩」にも出てくる。どうぞ「総索引」を使って、あたってみてください。「アジンコート・ヘラルド」は1415年のアジンクールの戦いがきっかけで置かれたヘラルド職名だが、じっさい、アジンクールの戦場跡で、累々とよこたわる戦士のしかばねを点検してまわる「エロー」の姿があった。軍衣の紋章から戦死者を確認してまわる作業です。これはだから「紋章調人」と訳したくなる。戦いがはじまる前、「エロー」はいそがしげに両陣のあいだを往復していて、挑戦の言葉を伝え、敵の寛恕を願う恭順の誓いを伝令する。これは「伝令者」ですねえ。シェイクスピアの『ヘンリー5世』は「モントジョイ」にヘラルド像を彫琢した。フランス王家のエロー、モンジュエです。

(520)

3、4日ほどのち、摂政がパリにやってきた。そうして手勢をサンドニに差し向けたのだったが、それがレ・ザルミノーは、支払うものも支払わずに、さっさと町を出ていってしまった。なにしろかれらは町の人たちに、パリから奪ってきて支払うと約束していたというのだ。パリに入れたらで、それが目論見はもろくもくずれて、それでサンドニだけではない、宿主たちをだましたというわけだった。それだけではない、町の人たちにとってもっと具合の悪いことに、摂政も、パリのプレヴォーも、パリの商人たちと助役たちのプレヴォーも、みんな町の人たちのことをたいそう憤っていて、それというものかれらはレ・ザルミノーに、一戦も交えずに降伏してしまい、莫大な罰金をとられたからだった。いずれあとで、そのことが嘘ではなかったとあなたがたは聞くことになるだろう。

[注釈]

「摂政も、パリのプレヴォーも、パリの商人たちと助役たちのプレヴォーも」

摂政も、パリ代官も、商人頭も、助役たちもと訳せばわかりやすいでしょうが、そんななまやさしい文章ではない。摂政も、はともかく、「レ・プレヴォー・ド・パリ・エ・デ・マルシャン・エ・エシュヴァン・ド・パリ」は「プレヴォー・ド・パリ」、パリ代官と「プレヴォー・デ・マルシャン・ド・パリ」、パリ商人頭のふたりを「レ・プレヴォー」とくくり、それに「エシュヴァン・ド・パリ」、パリ市助役たちを足しているのだ。

「いずれあとで、そのことが嘘でなかったとあなたがたは聞くことになるだろう」

狐につままれたような気分です。あなたがたというか、君たちというか、呼びかけの文体はほかにもいくつかみつきり、日記の文章の性質を考える材料になるのだが、だからそれはよいのだが、あなたがたと名指されたわたしたちは、「いずれあとで」といわれながら、ついにいまにいたるまで、そのことは聞いていない。

(521)

1429年9月末日、金曜日、パリにブルグーン侯がやってきた。お供がまたそうそうたるもので、なにしろブルグーン侯だ、人数が多かったものだから、民家に分宿させ、空き家を利用させる羽目になった。パリは空き家だらけだったのだ。馬は豚や牛といっしょに寝た。サンマルタン通りから入ってきたのだが、妹御を連れていた。同行していたフランス摂政のベドフォール侯の妻だ。伝令者10人が先導した。それぞれ主人の軍衣を着ていた。トランペット奏者も同じ人数。豪華というか、虚栄というか、モーブエ通りを通過して、マダーム・サンタヴェに奉獻に行った。そこからサンポールへ行った。

[注釈]

「民家に分宿させ」 on les logast es maisons des mesnaigiers

直訳すれば「メナジェのいる家に泊めさせて」ということで、「メナジェ」は「家長」で、だからそれはよいのだが、おもしろいのは logast で、テュテイ氏は on les logeast と起こしている。-ga では「ジャ」と発音できないと心配したということらしいが、-ga, -go を平然と「ジャ、ジョ」と発音していた当時のフォノグラフィーもご存じなかったのか。もしかしたらそうだったのかなと思ってみることもしていない。それはパリの写本には on logea と見える。パリの写本は 17 世紀のなかごろのものなのですよ。

「サンマルタン通りから入ってきた」 p larue saint martin

テュテイは par la porte Saint-Martin と起こしている。パリの写本にそう読めるからというのだが、ヴァチカン写本にはそうは読めない。さすがにテュテイも脚注にそのことはことわっている。パリの写本の頼りにならないことはいままでもいろいろな機会にご紹介してきました。ここは p larue でなんの問題もない。par la rue です。

「豪奢というか、虚栄というか」

どうも訳しにくい。「エ・アン・セル・ポンプ・ウ・ヴェーン・グレール」というのだが、直訳すれば「このようなポンプないしむなしい栄光において」だから、「むなしい栄光を追い求めて」と、もう一步ふみこんで訳したほうがいいかもしれない。なにしろ人のグレール、栄光はむなしいという思いに、中世の秋の人たちはとりつかれていたのです。

「モーブエ通りを通過して」

まことにめんどろなことでおそれいます、サンマルタン門を入れてサンマルタン大通りをいく。左手にサンマルタン・デ・シャンの長い塀がやがて途切れて、サンニコラ教会の玄関前を通り、十ばかりの横町を無視してどンドン行くと、左手に「モーブエの水場」がある。上水道のはけ口のひとつです。その角を左に入る横町を、日記の筆者は「モーブエ通り」la rue maubue と呼んでいる。ジャク・イレーレによれば、それはたしかに 14 世紀まではそう呼ばれなかったこともないけれど、世紀末に「ラ・ボードウレリ通り」la rue de la Baudroierie と呼ばれるようになった。1533 年まではそう呼ばれていたと、みょうに律義な紹介の仕方をしている。たぶん「トゥルシェとオヨーの絵図」には「ル・ドゥラ・ボードウレリ」rue dela bavdrerie と書いてあるのを気にしたのでしょう。ところが同じその絵図の 18 世紀に作図されたのにも、しっかり la baudroierie と書いてあって、どうもジャク・イレーレは 1534 年以後は、またもとの名前の「モーブエ通り」にもどったかのように思いこんでいるのだが、そのあたり事情は「狼と犬」です。

さてさて、ブルグーン侯の一行は「モーブエの水場」の角を「モーブエ横町」に入り、そのまま道なりに「シモン・ルフラン横町」を抜けて「タンブル大通り」に出る。つまりサンマルタン大通りとタンブル大通りをつなぐ横町は、その西半分がモーブエ横町、東半分がシ

モン・ルフラン横町と呼ばれていたということです。19世紀にはこのふたつの横町はひとつにまとめてシモン・ルフラン横町と呼ばれていた。そこに「オスマネスク」(オスマンのパリ改造)のブルドーザーが「ルナール通り」という近代的な大通りを押し通した。ふたつの横町は分断され、シモン・ルフラン横町の方はいまでも「昔の名前で出ている」が、モーブエ横町の方は「ポンピドー文化センター」の下敷きになってしまった。

「ポンピドー」の正面広場の西側の縁に、地下から突き出た巨大な鉄のパイプが頭をもたげている。どうやら排水管らしい。なんとなんと、そのあたりが往時「モーブエの水場」でした。そのそばには「エスカルゴ」も見える。なんとなんと、もと水場の扱いとしては上出来だ。閑話休題。そんなことで、モーブエ横町を抜け、シモン・ルフラン横町を抜けるとタンブル大通りに出る。タンブル門から上がってくる大通りです。そこに出たら、右手を見ると、どうやらそこに「サンタヴェ」があったらしい。タンブル大通りは、往時、このあたりで終わっていた。「サンタヴェ」をふくむ、さらにセーヌ河岸よりの一郭は、後代「ペー・アッシュ・ヴェー」に占領された。「バザール・オテル・ド・ラ・ヴィル」、市役所前の百貨店です。

「マダーム・サンタヴェ」

「ひとつ、おれはサンタヴェに定める」と、サンブネの司祭は『遺言の歌』176節を書き出している。そこに「おれ」こと「フランソワ・ヴィヨン」の墓所を設けようというのだ。それが、「サンタヴェ」は教会堂ではなく、女性たちの共住施設である。1283年に、サンメリ教会の「シュヴシエ」ジャン・セクェンスと、パリの町人コンスタンス・ド・サンジャックの寡婦が協力して設立した。「シュヴシエ」は教区教会の信徒の世話役ということで、どうぞ『遺言の歌』153節の注釈をごらんください。ほかに「マルレー」というのなんかといっしょに解説しています。サンメリ教会は、サンマルタン大通りを、モーブエの水場で横町に入らずに、さらに一街区、河岸寄りに先に行った左手に、大通りに玄関口をあけている教会堂です。1427年の例の「雨のサンマルタン門外」の記事の注釈をごらんください。

「サンタヴェ」は、そのサンメリ教会の信徒たちが、資金を出し合って設立した施設で、当初、五十路を越した女性40人が共住生活をおくったという。1308年のころ、法衣堂(ふつうにいう礼拝堂)が設けられて、どうやらその法衣堂が「サンタヴェ」に献堂されたということだったらしい。「マダーム・サンタヴェ」*sainte avoye*は「ヘドウィイジス」*hedwigis*がなまったのだという。13世紀前半のハンガリー王家の血筋の女性で、死去して20年後に聖女に認定されたという。法衣堂は2階にあった。そのあたりの詮索については、『遺言の歌』176節の注釈をごらんください。下巻に収めています。

「そこからサンポールへ行った」

サンタヴェから「サンポール」へ向かうには、サンジャン墓地の脇を抜けて、サンタンテール大通りに行く。右手に「ロテル・ドゥ・プレヴォー・ド・パリ」、代官屋敷を見ると、

もうそこが「サンポール通り」の曲がり角で、まっすぐ行けばサンタンテーン門、右へ曲がればセーヌ河岸である。このサンポール通りから東の街区、デ・セレストン通りまでが、ぜんぶまとめてシャルル5世以来の王家の館「サンポール館」で、そのあたりの立地や歴史については、どうぞ『形見分けの歌』24節の注釈の「追記」と、『遺言の歌』136節の注記をごらんください。こちらは下巻に収めています。サンタンテーン大通りからサンポール通りをちょっと入ったところ、左側に、だから「サンポール館」の街区に後陣をつつこむような形で、サンポール教会堂が位置している。

さてさて、ブルグーン侯の一行が向かった「サンポール」とは、「サンポール館」のことなのか、「サンポール教会」のことなのか。前者だとするとおもしろい。「サンポール館」には「前の王妃」イザボーが住んでいた。ブルグーン侯はイザボーを表敬訪問したことになる。どうぞ『遺言の歌』136節の注釈をごらんください。心をこめて「サンポール館の王妃イザボー」を追想しております。『日記のなかのパリ』の「まっとうの飲料」にも書いています。

まあ、「サンポール館」「サンポール教会」、どっちでもかまわない。どちらにしてもそこが旅の目的地ではなかった。「サンポール」の、サンタンテーン大通りをへだてて反対側に「レ・トゥルネル館」があつて、摂政夫妻はそこに住んでいた。なんのことはない、ブルグーン侯おひとよしのフィリップは、妹夫婦の家に泊まりに行ったのです。「レ・トゥルネル館」は、これは歴史がはっきりしている。1388年に完成した建物で、当時王家官房長だったペール・ドルジュモンのものであった。のちのヴォージュ広場のアパートマンの北翼の見当にあたる。法衣堂、浴室、その他、回廊をまわして施設を設け、庭園は6面という凝りようで、庭園の塀にはたくさんの塔型の飾りがとりつけてあつて、そこから「レ・トゥール」、たくさんの小塔と呼ばれたという。

官房長ペール・ドルジュモンとその息子の住んだあと、ベリー侯ジャン、ついでその甥のオルレアン侯ルイが所有したが、ルイ・ドルレアンの暗殺後、王家に買収された。なにしろサンポール館は、サンタンテーン大通りからセーヌ河岸に向かってだらだら下りになっている立地の関係で、セーヌ河岸やサンタンテーン門の堀割からあがってくる汚水の臭気を嫌って、シャルル6世はレ・トゥール館に住むことが多かったという。そうして、そのシャルルが死に、後を追うようにその娘婿のランカスター家イングランド王ヘンリー5世が死んだ1422年の秋以後、館の主人はヘンリー5世の跡継ぎの幼いヘンリーの後見人ベドフォード侯ジョンとその妻アーン・ド・ブルグーンになったというわけだった。

(522)

8日ほど後、ヴィセートル枢機卿が、これもすごいお供を引き連れてやってきた。その後何度も会議がもたれて、とどのつまり、大学やパルマン、それにパリのブルジュエの要請に応じて、イギリス人のベドフォード侯はノルマンディーのグーヴェルヌーになること、

ブルグーン侯がフランス摂政になることが決められた。こうしてことは決まったが、ベドフォード侯はその職に未練があった。かれの妻もだった。しかし決められたとおりになるしかなかった。イギリス勢が出発すると、土曜日の夕方に出発して、サンドニに行って、さんざん悪いことをしたのだが、ブルグーン侯も後を追って発ち、レ・ザルミノーと休戦の約定をとりつけた。きたる降誕祭までということ、それもパリの町とその郊外についてだけということで、パリ周辺の村々は、レ・ザルミノーに保証金を支払っていて、(だから安全は保証されたが)、それがパリの人たちは、郊外からさらに外に足を向けようとはしなかった。向ければ死が待っている。奪われる。とうてい払えないほどの身代金をかけられる。パリの人たちはさからわなかった。かくしてパリには、人の身体に必要なものがぜんぜんなくなった。どんなものにも、二度三度と、とうてい払えないほどの受金が要求されたのだ。小ぶりのコトレもの、百束が24 スーペリジした。モルでは7スーから8スー。卵2個が4ドゥネペリジ。作りたてのチーズの小さいのが4ブラン。エンドウマメがブッセルで14から15ブラン。こんなわけでとても強気なコインがこのところ出回っていて、万聖節やその前後の祭日になっても、生のニシン、そのほかなにか鮮魚の話は出なかった。

[注釈]

「その後何度も会議がもたれて」

パルルマンの録事クレマンの日記によると、10月10日に、シャルル・ド・ヴァレの官房長ルノー・ド・シャルトルほかシャルルの顧問官団がサンドニからやってきて協議したという。また同日、ジャン・ド・ルサンブールとウ・ド・ランネの両名が、王家顧問会議から、サンドニのシャルル・ド・ヴァレの官房長のところに出かけ、同日中に帰っているという。10月13日には、「セヌ川に向かって窓がひらく部屋で」、ブルグーン侯も出席して大評定が開かれ、その席上、シャルル・ド・ヴァレに帰順した町々と城塞がシャルル・ド・ヴァレとのあいだにとりかわした協議書が公表されたという。さらに「ブルグーン侯に対して与えられ、かれによって受け入れられた代理権と支配権に関する書状」も公表された。これはパリにおける王の代理権限をいっている。このことは「摂政ベドフォード侯、エクセトゥル枢機卿、大学、商人たちと助役たちのプレヴォーの慫慂による」ことだったとクレマンは断っていて、つづく17日付の記事にも「ベドフォード侯、摂政」と、「摂政」の肩書ははずしていない。

日記の筆者は大評定の出席者ではない。クレマンはなにしろパルルマンの録事だから、日記の筆者よりもいくらかは現場に近い。日記は噂伝聞というもののひろがりぐあいを教えてくれる。ヴィセートル枢機卿ヘンリー・ボーフォートについても、いろいろと誤解があるようで、ボーン女史はこれが「イングランド摂政」だったと注記しているが、その事実はない。摂政グロスターと確執があったことは、(513)の注記に紹介した。パルルマンの録事は、こ

ここに紹介したように、「エクセトゥル枢機卿」の名をあげているが、これも誤解で、チュテイはこのことについてなにも注記していない。ヘンリー・ボーフオートの弟のトマスが「エクゼター侯」（エクセトゥル侯）だったが、1426年に死去した。そのあとのエクゼター領の処置については、残念ながらわたしは知らない。あるいは兄のヘンリーが、侯号とともに継いだか？ とすればパルルマンの録事はそのことを証言していることになる。

「小ぶりのコトレもの」「モルでは」

これは薪のことをいっている。『エティエン・ブエローの職業の書』のある写本に収録された13世紀末の王令は、薪をモルとグロとコトレに三大別している。「コトレ」はパリの北、ヴァレに「レの森」というのがあり、あるいはそこで採取された薪をいうか。しかし、たとえもともとはそうであったとしても、13世紀末には標準的な薪束を指す言葉に転化していたわけで、「瀬戸物」を連想させるではないか。中世のラテン語に「コステレトゥム」というのがあり、これは一荷二荷の荷とか、一籠の籠とか、一束の束をいう。これは古典ラテン語の「コスタ」から出た。これかもしれない。

「モル」だが、これは近代語では「ムール」で、ラテン語の「モドゥルス」、すなわち「モジュール」が語源らしい。市庁舎に保管されている原器の複製の計量器が市場に設置されていて、鉄のタガで編んだ四角い籠のようなものだったらしい、そこに薪をつめて量る。後代の薪の計量単位「ステール」とほぼ同量だったという説がある。「ステール」は1立方メートルである。なお、「ブーレ」は、これは「粗朶」と訳そうか。小枝の束である。薪の現実については、『日記のなかのパリ』の「雪と氷、そうして薪」の章をごらんください。

「作りたてのチーズの小さいのが4ブラン」

これは、もう、直訳でいくしかない。「チーズの小さいの」がどのくらいのものか。「ブラン」はこの時期、どのくらいで流通していたか。この前後の記事を探索なさってください。

「生のニシン、そのほかなにか鮮魚」

印象鮮烈ですねえ。ニシンの現実、「なにか鮮魚」の実態については、どうぞほかの記事を参照なさってください。

(523)

ブルグーン侯は、2週間ほどパリにいたが、サンルックの宵宮に出ていった。ピカール勢を連れて出ていった。パリにやってきたときに引き連れてきた軍勢で、その数6千ほど、なにしろこの不幸な戦争が始まって以来、ブルグーン侯がパリに連れてきたうちで、これほどたくましいならずものどもはいなかった。連中が宿泊した家々で、そのことははっきりした。連中はパリの門の外に出るや、行き合う人だれかれかまわず強奪し、暴行をくわえたのだ。前衛が町を出るや、ブルグーン侯は触れを出させた。町の人たちを安心させようとするかふうだったが、それがもしレ・ザルミノーがパリを襲ったら、力をつくして身を守れという

もので、ブルグーン侯はパリに守備隊を残さなかったのだ。これがかれが町のためにしたことすべてで、それがイギリス人たちはわれわれの友ではない。なにしろイギリス人たちは町を治めることができなくなったのだから。

[注釈]

「サンルックの宵宮」

サンルックは福音史家ルカのこと。祝日は10月18日。宵宮は17日。それがパルルマンの録事クレマンは、10月17日付の記事に、摂政ベドフォード侯が、妻といっしょに、ノルマンディーへ出かけた。ブルグーン侯は、サンドニまで見送った。三人とも、その夜、サンドニに泊まった。「続く火曜日」、ブルグーン侯がフランドルへ向かったと書いている。「サンルックの宵宮」は月曜日でした。日記の筆者は、この別々の動きをつなげちゃったわけです。

「それがイギリス人たちはわれわれの友ではない。なにしろイギリス人たちは町を治めることができなくなったのだから」

印象的な記事です。直訳すれば「人がかれらをグーヴェルンマンの外に置いたのだから、レザングレは我々の友人ではない。」

「グーヴェルンマン」は、中世語としては、「指導する、指揮をとる」ことといたていど語感です。統治権とか、またそのための組織をストレートに意味することはない。町の住人の受け止めかたですね。ヴァレ王家もブルグーン家も、またランカスター家も、町の生活を「グーヴェルン」する存在で、それ以上のものではない。いま、ブルグーン家がふたたびその役目を買って出た。それがなんだと日記の筆者はいきどおっている。

(524)

降誕祭にはまだ間があり、休戦の期間も終わっていないというのに、パリ周辺のレ・ザルミノーはさかんに悪事をはたらき、ローマの暴君、森のならずもの、人殺しもこれほどまでの暴虐をキリスト教徒に対してはたらいたことがなかったほどだった。だれかれかまわずつかまえて、かれらの手中におちたものはみんなむごい仕打ちを受けた。売れさえすれば、女子どもを売り飛ばしもしたのである。あらがおうとするものはいなかった。なにしろフランス摂政のベドフォード侯は口を挟む立場になかった。ブルグーン侯を摂政にしたからで、そのブルグーン侯は、この時期、悩み事があった。というのも、(ブルグーン侯は妻を迎えるにあたって) なにからなにまできちんと取りそろえさせ、大君侯の結婚式にふさわしく、用意万端整え、妻を迎えるラ・ダームの到着を日数をかぞえて待ちかまえているというのに、アラゴン王の娘であるくだんの女性は船に乗り、お付きのものたちといっしょに、エクルーズ近くにまできた。もう見えるところまできていて、到着を祝う祭の準備をはじめたのであ

る。それが風が吹きはじめて、逆風で、またたくまにかの女は遠くの土地に流されてしまった。なにしろかの女が無事かどうか、どこに流されたのか、40日以上もわからなかったくらいで、風に流されて、かの女は父親の領土に、アラゴンに漂着せざるをえなかったのだ。その後、かの女は無事にブルグーン侯のもとに連れてこられた。これがかれがこの時期、パリを留守にした理由である。

[注釈]

「アラゴン王の娘であるくだんの女性」

「ローマ写本はまちがってアラゴン王女と書いている。パリ写本は正しい。きちんとポルトガル王女と書いている」とテュテイは注記に書いている。自分たちの常識で正しいと思うことを書くのが注ではない。どうして「アラゴン王女」だと思ったのか。日記は時代のドクサ（風聞）であるわけで、だからみんなが「アラゴン王女」だと思っていたとしたら、なんともおもしろい。それがバルルマンの録事は「ポルトガル王の娘」と、しっかり書いている。ブルグーン侯おひとよしのフィリップの結婚については、『ブルゴージュ家』をごらんください。

「エクルーズ」

ブルッへの北の港町で、フラマン語読みでスロイス。北海にひらけたブルッへの外港である。ポルトガル王女イザベルを乗せた船は、年が明けてスロイスに到着した。当時ブルッへに住んで、法律事務所で働いていたヴェネツィア人パンクラチオ・ジュスティニアーニが、ヴェネツィアの父親マルコにあてた手紙に書いている。「姫はスロイスに着きました。8日の土曜日に当市へ到着と触れがまわりました。ブルグーン侯は正装して姫を訪問し、姫の容姿にいたく満足したとか。なによりも姫は賢いと噂が流れています。」（手紙文は『アントニオ・モロシーニの年代記』に転載されている。）どうもかの女が「40日以上もわからなかった」というのはオーバーだ。

(494)

Item en ce temps / estoit le iiije delasvoise aparis a vjm vjct francs/ Et celui duvin nestoit mie a la iiije ptie car le vin nouvel deladicte annee estoit si petit et si feible q / on nen tenoit compte Car tout le meilleurs ou la plusgrant ptie se santioit plus deverius que de vin / Et si estoit si cher que on faisoit le caque qui estoit / ung pou plus fort que despence iiij lp Et ne neuss eu nul a moins de iiij f

[Tuetey] (deladicte annee)' De la dicte annee' manque dans le ms.de Rome (iiij lp) iiij tournois parisis (et ne neuss eu) et ne eussiez eu

(495)

(fol. 36v; ligne dernière) en icellui temps / (fol. 37r) convint faire p les bourg deparis finance de / farine pour mener en lost devant orleans et / en firent finance deplus de iijc chariotz charg / lesquels chariotz et chevaux et toutes choses / appartenans acharroy ceulx duplat pays dento / paris paierent ce non quilz furent quant ilz / vindrent aparis assign deleurs despens jusq / a neuf jours ens et ny devoient plus demour / mais ilz yfurent apres les neuf jours aut ix / aleurs despens et leurs chevaux qui moult / les greva et le xije jour defevrier ce ptir (difficile à transcrire; on lit partirent)/ agrant compaignie de gens darmes Et alleret / jusques aestampes sans dang Quant ilz furent / ung pou pdela ent canville en beausse et ung / villaige nome toumray st denis il leur vint bn / vijm arminalx qui les amenerent come une dance / fait ung tas depetis enfans quant noz gens / virent ce ilz ce ordonnerent au mieulx quilz / porent et ne se hoberent ilz avoient foison gns / pieulx agus aung bout et ferrez alaut quilz / fichèrent en terre en panchant devers leurs ennemis / et furent mis les archiers et arbalestiers deps / aung coste ausquelz fut ordonne une elle / de noz gens. Et laut elle fut des archiers / angloys. Et ou millieu fut ce quilz povoient / avoir de grosse bataille Car ilz nestoient / en tout pas plus de xv cens cont vijm qui / estoit xij arminalx cont deux de nos gens / quant les arminalx orent bien tournoie de / loing autour de noz gens si sen revindrent / et ce mirent en ordonnance en lamani come noz / gens avoient fait adonq noz gens les manderent / quilz vouldissent que silz prenoient aucuns des / nost qui fust mis a fin cestassavoir arancon / (folio 37v) ausquelz ilz respondirent espalment lesire debourbon / que jamais dieu ne lui aidast si ja pie en eschappoit / que tout ne fust mis alespee et que ce les heraulx / y revenoient plus quilz fussent mors Quant les / heraulx orent ce dit a noz gens ilz ce hourderent / par darriere de leurcharroy Et ce recommanderent / a noss et prierent lung laut de bien faire Et puis / ordonnerent bonne garde pour lecharroy apres les (deux mots biffés)/ avec les charretiers pour legrant peril eschever / qui povait avenir Et comme il advint car / aucuns et grant quantite des arminalx vindrent / par derriere cuidant pillier les biens de noz gens / Et aucuns des voituriers les virent venir ilz de (biffé)/ destellerent leurs chevaux et sen voldrent fuir / mais les arminalx leur furent audevant qui / moult les dommaigerent ducorps et aucuns de / lavie Et apres cuiderent venir aupillaige mais / ilz furent si bien receuz que moult fut joieux qui / ce pot sauver En tant que les larrons furent / ainsi gardez depilliez les arminalx apucher / noz gens et furent les gasconsqui estoient / bien montez et lagreigneur partie de leur gens / ordonnez encont les arbalestiers et archiers Et / compaignons deparis Et les escossois cont les / anglois. La grosse bataille cont lagrosse bataille / Quant ceulx deparis virent q ceulx acheval / venoient vers eulx Ils comencerent atraire de / ars et dabalestes moult aspment. Quant / gascons virent ce ilz baisserent lachere. Et / tournoierent leurs lancesdevant eulx pour / garder leurs chevaux dutrait et les poignet / delesperon moult fort comme cilz qui avoiet / espace de les mettre a mort mais quilz / fussent pres. Mais les maleureus les meschans / les maudiz ne veoient pas le

mal qui estoit / devant leurs yeulx car coe ilz appuchoient / (fol. 38r) de noz gens apointe desperon
leurs chevaux entrerent / dedens les pieux fichiez. Et les pieux dedens leurs potnes / et en ventres et
en jambes si ne porent en avant mais / churent les aucuns tous mors et les maistres apres / ceulx qui
furent aterrez crioient aux aut viras / viras cestadire retournez retournez Ci sen cuiderent/ tantost fuir
mais leurs chevaux qui navrez est / despieux davant diz cheoient tous mors soubz eulx / qui en
abatoient deux ou trois Et faisoient trebucher / leurs gens qui apres venoient. Quant lesescoss / et les
aut virent ce moult furent esbahiz et eulx / prindrent afuir come bestes que ung loup espart / ca et la.
Et noz gens ales suyvir depres Et a occire / et abatre ce quilz porent actaindre Et en demoura / en
laplace de mors iijc et plus Et depns gnt qtite / Et comme les meschans eulx cuiderent sauver a /
entrer a orleans ils furent aperceuz de ceulx du / siege qui leur allerent audevant Et en tuerent /
autant ou plus quon avoit fait en labataille / devant dicte ainsi leur advint p leur peche quilz / avoient
en pancee que tout fust mis alespee. / mais tout bel leur fut quant ilz separent gard / que lespee de
leurs ennemis ne les tuast. Qnt / noz gens orent menez leurs vivres en lost ilz / sen revindrent aparis le
xix jour de fevrier / lan mil iiijc xxviiij Et fut trouve que deceulx / departis nestoit mort en labataille
que iijc hoes / Et des voituriers qui sen cuiderent fouir plus / et moult de navrez dont cest grant pitie et
/ dune part et daut qui que fault q xpiente tue ainsi / lun laut sans savoir cause pourquoy car / lun sa de
cent lieu loing lun delaut qui se / vendront ent tuer pour gagner ung pou darg / ou legibet aucorps.
Ou enfer alapouvre ame (fin de fol. 38r)

[Tuetey] (come une dance) comme un danel (plus de xv cens cont) plus de xvc contre (en lamani
come noz / gens avoient fait adonq noz gens les manderent) en la maniere comme noz gens le
mandèrent (qui povait avenir) qui pavoit advenir (lagreigneur partie de leur gens) la greigneur
partrie de leur gent (comme cilz qui avoiet / espace de les mectre) comme cilz qui avoient esperance
de les mettre (si ne porent en avant) si ne porent aller en avant (car / lun sa de cent lieu loing lun
delaut) car l'un sera de cent lieues loing de l'autre (alapouvre ame) à la pauvre âme

(496)

(folio 38v) Item en ce temps furent commenees asainct jacques / delaboucherie adire les heures
canoniaux come / anstdame le xvi jour de janvier lan mil iiijc xxviiij (biffé) xxix / jour de dimanche
qui estoit par v

(Tuetey) (xxviiij (biffé) xxix) xxix

(497)

Item leduc / debourgongne revint aparis le iijc jour davril / jour st ambroise amoult belle
compagnie de / chevaliers et descuiers. Et apres environ viij / jours vint aparis ung cordelier nome

frere / richart homme detsgrant prudence scevant / a oraison semeur debonne doctrine pour ediff /
son pisme Et tant y labouroit fort q enviz le / creroit qui ne lauroit veu car tant comme il / fut aparis il
ne fut que une journee sans f / predicacion Et commença lesabmedi xvie jour / davril iiijet xxix
asainte genevieve Et ledimenche / ens et lasepne ens cestassavoir le lundi le mardi / le mercredi le jeudi
le vendredi lesabmedi ledimenche / aux innocens et commençoit son sermon envir / cinq heures
aumatin Et duroit jusques ent dix / et onze Et yavoit touziours quelque cinq ou / six mil psonnes
asonsermon Et estoit monte qnt / il prechoit sur ung hault eschauffaut qui estoit / pres detoise et demi
dehault le dos tourne vs / les charniers encont lacharonerie alandroit / dela dance macab

[Tuetey] (qnt il prechoit) quant il preschoit (encont lacharonerie) rencontre la Charonnerie

(498)

Item le jour de invencion st / denis sen retourna leduc debourg en son pays / deflandres Et
touziours estoit lesiege devant / orleans dont les vivres encherirent fort aparis / car p containcte il y
convenoit souvent mener gnt / foison defarines et daut vivres et chos qui sont / neccessaires pour
guerre ausiege brief on en / mena tant que leble enchery aparis desabmedi / a aut de xxsp a xlsp et
toutes chos dont hoe / pavoit vivre par cas pareil ainsi qe (que) devat estd / (folio 39r) sedeparty
leduc debougongne sans ce que il feist / aucun bien au regart delapaix ou dupovre peuple / et disoit on
quil alloit combattre les liegoys

[Tuetey] (ainsi qe devat estd) Ainsi, comme devat est dit

(499)

Item / le cordelier devant dit prescha le jour saint marc / ens aboulongne lapetite. Et la ot tant
depeuple / comme devant est dit. Et pour vray celle jour / aurevenir dud smon furent les gens deps /
tellement tournez en devocion et esmeuz q en moins / de trois heures ou dequat eussiez veu plus de /
cent feux en quoy les hommes ardoient tables / et tabliers des quartes billes billars nurelis / et toutes
chos a quoy on ce pavoit courcer a / maugreer a jeu convoiteux

(500)

Item les femmes / cellui jour et lelendemain ardoient devant tous / les attours de leurs testes come
bourreaux truff / pieces decuir ou debalaine quilz mectoient / en leurs chapperons pour estre plus
roides ou / rebras davant les damoiselles laisserent les / cornes et leurs queues et grant foison de / leurs
pompes et vraiment dix smons quilz / fist aparis et ung aboulongne tournerent pl / lepeuple
adevocion que tous lessmoneurs q / puis cent ans avoient presche aparis

(501)

Item / il disoit pour vrai que depuis ung pou il / estoit venu de cyrie come de jhelm et la encontra / plusieurs tourbes de juifs quilz interroga et/ ilz lui dirent pour vrai que messias estoit leql (biffé)/ ne lequel messias leur devoit rendre leur / heritaige cestassavoir laterre depmission et / sen alloient vers babiloine atourbes et selon / lasaincte scripture celui messias est antecrist / lequel doit naistre en lacite debabiloine qui jad / (folio 39v) fut chef des royaulmes des psans et doit estre / nourry en bethsaida. Et converser en coronaym / en sa jouvent lesquelles nous dit vhe vhe t / bethsaida vhe vhe coronaym

(502)

Item ledit frere / richart presche le darrain smon apis le mardi / lendemain saint marc xxvie jour d'avril iiijc / xxix. Et dist audeptir que lan qui soit aps / cestassavoir lan xxx que on verroit les plus / grandes merveilles que on eust oncques veues / et que son maistre frere vincent letesmoingne / selon lapocalice et les scripture mons saint / paul et ainsi le tesmoingne frere bernard ung / des bons prescheurs du monde sicome on dis / cestuy frere richart Et en celuy temps estoit / celui frere bernard en predicacion p dela les / alpes en ytalie ou il avoit plus converti de / peuple adevocion que tous les prescheurs qui / depuis ijct ans devant yavoient presche Et / pour vray le mardi que cestuy frere richart se / party de son smon lexe que plus navoit cogie / den faire aparis quant il commanda sabonne / recommandacion Et quil commanda adieu / aupeuple deparis Et quilz passent pour luy / Et il proit pour eulx les gens grans / et petiz plouroient si piteusement et si fondement / come silz veissent porter en terre leurs meille / amis Et lui aussi Et atant celui jour ou lendem / ce voidoit departir le poudomme et sen alla / vs les pties debourgongne mais ses freres / firent tant p priere que encore demoura il / aparis pour confermer par predicacion le bon / ediffiement quil avoit commance Et en ces / fist ardre plusieurs madagoires q maintes sotes / (folio 40r) gens gardoient en lieux repo et avoient si grant foy en celle / ordure que pour vray ilz creioient fermement que tant / comme ilz lavoient mais quil fust bien nettement / en beaux drapeaulx desoie ou delin enveloppe que / jamais iour de leur vie ne seroient pouvres Et pour / certain telx y avoit quilz les baillerent de leur g / quant ilz orent ouy coment le pudome blasmoit / tous ceulx qui ainsi follement creioient ilz jurerent / que oncques puis quilz les garderent ilz ne ce vuet / ung jour quilz ne deussent touzours plus que / vaillant ilz navoient mais tresgrant espace avoet / quilz les eussent moult riches ou temps avenir par / le mauvais conseil daucunes vieilles femmes qui tp / cuident savoir quant ilz se boutent en telles meschancete / qui sont droictes sorceries et heresies

[Tuetey] (aupeuple deparis) le peuple de Paris (en lieux repo) en lieux repos (ilz ne ce vuet) ilz ne se virent (quant ilz se) quant elles se

(503)

Item en celui / temps avoit une pucelle come on disoit sur la rivie / deloie qui ce sisoit pphet et disoit telle chose / adviendra pour vrais Et estoit dutout contraire / auregent defrance et ases aidans Et disoit on q / maugre tous ceulx qui tenoient lesiege devant / orleans elle entra en lacite aout grant foison / darminax Et grant quantite devivres que / oncques ceulx delost ne sen meurent Et si les / veoient pass aung traict ou deux darc pres de / eulx Et si avoient si grant necessite devivres / que ung homme eust bien menge pour trois blans / depain ason disner Et plusieurs auts chos de / elle racontoient ceulx qui mieulx amoient les armi / que les bourguignons ne q le regent defrance / ilz affmoient que quant elle estoit bn petite quelle / gardoit les brebis que les oiseaulx des bois etdes champs / (folio 40v) quant elle les appelloit ilz venoient menger son pain enson / giron come privez in veritate appocrisium est

(504)

Item en / celui temps leverent lesiege les arminax et firent partir les / angloys parforce de devant orleans. Mais ils allerent / devant vendosme et laprindrent come on disoit Et p / tout alloit celle pucelle armee avec les arminax et / portoit son estandart ou estoit tant seulement en escpt / ihus. Et disoit on quelle avoit dit aung cappitne / angloys quil se deptist dusiege avec sacompaignie / ou mal leur vendroit et honte a tretous et le quel la diffama / moult de langaige comme clamer ribaulde et putain Et / elle lui dist que maugre eulx tous ilz ptiroient en bref / mais il ne v le verroit ja Et si soient grant ptie / desagent tuez Et ainsi en advint il car il se noia / lejour devant que loccision fut faicte et depuis fut / pescher et fut despece par quartiers et boullu et e (biffé) enbosme et apporte asainct merry et fut viij ou x / jours en lachappelle devant le cellier Et nuyt et jour / ardoient devant son corps iij sierges ou torches et / apres fut emporte en son pais pour enterrer

[Tuetey] (mais il ne v le verroit) mais il ne le verroit (Et si soient) et si seroient

(505)

Item / en ce temps sen alla frere richart et le dimenche devant / quil sen devoit aller fut dit parmi paris quil devoit presche / aulieu ou bien pres ou leglorieux martir mons saint / denis avoit este descolle et maint aut martir Si y / alla plus de vjm psonnes deparis Et pti laplusgnt / partie lesabmedi ausoir agrant tourbes pour av / meilleur place le dimenche au matin Et coucheret / aux champs en vieilles masures Et ou ilz porent / mieulx Mais son fait fut empesche coment ce fu / atant men tais. mais il ne prescha point dont / les bonnes gens furent moult troublez ne plus ne / prescha pour celle saison aparis Et lui convint ptir

[Tuetey] (ou leglorieux martir mons saint denis) ou monseigneur saint Denis (ausoir agrant) au

soir a grans

(506)

Item en celui temps tenoient les arminax leschap / qui tout destruisoient si y furent comis anglois / (folio 41r) environ huit mille mais quant ce vint au jour que les / anglois trouverent les arminax ils nestoient pas plu / de six mil Et lesarminax estoient x mi si / coururent sus aux anglois moult aspmnt Et / les anglois ne les refuserent mie la ot grant / desconfiture dun lez en laut mais en lafin ne leporent les anglois souffrir car les arminax / de toutes pars (ces trois mots biffés) plus estoient delamoitie que / nestoient les anglois les enloyent de toutes p / lafurent anglois desconfis Et furent bien come / on disoit (un caractère illisible, c ?) trouvez mors des anglois iij m ouplu / des auts ne sot on le nombre a paris

(507)

Item le / dimenche xixe jour de juing lan mil iiijc xxix / fut dedie leglise desaint laurens dehors paris / par reverand pere en dieu levesque deparis et / aut prelaz

(508)

Item le vje jour / du moys dejuing oudan iiijcxxxix / furent nees ahobarvilliers deux enf / qui esoient ppment ainsi come ceste / figure est car pour vray je les / vy et les tins ent mes mains et avoient / come vous voyez deux testes quat / bras deux coulz iijj jambes quatre / piez et navoient que ung ventre ne / que ung nombril deux testes deux / dos Et frurent xpiennes Et furent / trois jours sur terre pour veoir lagnt / merveille auxpeuple deparis Et po / vray dupeuple deparis y fut les veor / plus de dix mil psonnes que homes / que femmes Et par lagrace de noes / lamere en delivra saine et sauve ilz / furent nees environ sept heures au / matin et furent xpiennes en laproisse / saint xpoufle et ladextre fut nomee / agnes la senestre jehane leur pere jeh / (folio 41v) discret lamere gillecte Et vesquirent apres lebaptisme / une heure

(509)

Item en celle pp sepmaine le dimenche / ens fut ne en la chavarie derriere saint jehan ung / veel qui avoit deux testes viij piez et deux queues / Et lasepmaine ens fut ne vers saint huistace ung / pourcellet qui avoit deux testes mais il navoit / q quatre piez

(510)

Item le mardi devant lasaint / jeh fut gnt esmeute que les arminax devoient / entrer celle (un

caractere biffé) nuit aparis mais il nen fut rien

(511)

Item depuis sans cesser jour ne nuyt ceulx de / paris enforcerent leguet et firent fortifier les / murs et y mirent foison canons et aut artillerie / Et changerent lepvost des marchans et les eschevins / Et firent ung nome guillaume sanguin pvost des / marchans Et les eschevins furent cestassavoir / ymbert des champs mercier et tapissier colin / de neufville poissonnier jehan de dampiere / mercier remon marc drappier. Et furent faiz / et instituez lapremiere sepmaine dejuillet

(512)

Et / le dixiesme jour dud moys vint leduc debourg / aparis aung jour de dimenche env six heures / apres disner Et ny demoura que cinq jours / esquelx cinq jours nyot (biffé) yot moult grand / conseil et fut faicte pcession generale Et fut / fait ung moult bel smon a nosdame deparis / Et aupalays fut publiee lachartre ou lets (le dernier caractère s biffé) coment / les arminalx traicterent jad lapaix en lamain / dulegat dupappe Et enoult que tout estoit / pardonne dun coste et daut Et coment ilz firent / les grans smons cestassavoir ledalhin et le / duc debourgongne Et comment ilz receurent le / precieulx corps noss ensemble Et le nombrede / chevaliers de nom dun lez et daut en ladicte / let ou chartre mirent tous leurs signes et seaulx / Et apres come leduc debourg voulant et desirat lapaix / (folio 42r) dud royaume et voullant acomplir lapromesse quil / avoit faicte se submist a aller en quelque lieu q / ledalhin et son conseil vouldroient ordonner Si / fut ordonne par ledit dalphin ou ses complices laplace / Enlaquelle place le duc debourgongne se compu / lui dixiesme des plus pves chevalliers quil eust / lequel duc debourgongne lui estant agenoulx / devant ledalhin fut ainsi traiteusement murdry / comme chun scet apres laconclusion delad let / grant murmure commença et tel avoit grant / aliance aux arminalx quilz les prind en tsgnt / haine apres la murmure le regent defrance et / duc debdfort fist faire silence. Et leduc de / bourgongne seplaint delapaix ainsi enfrainte / Et en apres delamort de son pere Et adoncqs / on fist lever les mains aueuple que tous soient / bons et loyaux au regent et auduc debourg / Et lesd signeurs leur pmistrent p leurs foys / gard labonne ville deparis [Tuetey] (et tel avoit grant aliance aux arminalx quilz les prind en tsgnt haine) et telz avoient grant aliance aux Arminalx qui les prindrent et tres grant haine (soient) seroient

(513)

Et le sabmedi / ens leduc debourgongne se parti deparis et / emena sa seur lafemme du regent avec luy. / Et le regent sen alla daut part apontoise lui et / ses gens Et fut ordonne cappitaine deparis / lesigneur de lisleadam Et les arminalx entreret / celle sepmaine en lacite dausserre Et puis vind /

atroyes et entrerent dedans sans ce q on leur / deffendist Et quant ceulx des villaiges deparis / alentour
sceurent coment ilz conquestoient ainsi / pais ilz laissent leurs maisons Et apporterent lers / biens es
bonnes villes Et soierent leurs blez avant / quilz fussent meurs et q (biffé) apporterent alabonne / ville
Après tantost apres entrerent en compigne / Et gaignerent les chastellenies dentour sans nulle /
deffense Et entour paris pndrent ilz lusarches / (folio 42v) et dampmartin et plusieurs autres fortes
villes Et / ceulx deparis qui moult avoient grant paour car / nul signeur ny avoit mais lejour saint
jacques / en juillet furent ung pou resconfot car ce jour / vint a paris le cardinal devicestre Et leregent de
/france Et avoient en leur compaignie foison degens / darmes et archiers bien environ iiij m. Et lesire /
de lisle adam qui en avoit depicars bien envir / vij cens sans lacommune deparis

(514)

Item p / vray lecordelier qui prescha aux innocens qui / tant assembloit depeuple ason smon come
devant /est dit pour vray chevalchoit avec eulx Et / aussi tost que ceulx deparis furent certains quil /
chevalchoit ainsi et qui p son langaige il / faisoit ainsi tourner les cites qui avoient faiz les / smens au
regent defrance ou aces comis ilz le / mauldisoient de dieu et de ses sains Et qui / pis est les jeux
comme des tables des boules/ des bref tous auts jeux quil avoit deffenduz / recommencerent en despit
delui Et mesmes / ung meriau destain ou estoit empraint lenom / de jhus quilz leur avoit fait prendre
laissent / ilz et prindrent tretous lacroix saint andry

[Tuetey] (de jhus quilz leur avoit fait prendre) de Jhesus quil leur avoit fait prandre

(515)

Item / environ lafin se rendit aux arminax lacite de / beauvays et lacite de senlis

(516)

Item le xxvejour / daoust fut prinse p eulx laville desaint denis / Et lendemain couroient jusques aux
portes de / paris et nosoit homme yssir pour vendenger / vigne ou verius ne aller aux marais riens /
cuillir dont tout encherit bientoust

[Tuetey] (tout encherit bientoust) tout encheryt bientost

(517)

Item la / vigille saint laurens fut prinse (biffé) fermee laporte / saint martin Et fut crie que nul
ne fust si / ose daller asaint laurens par devocion ne po / nulle marchandise sur lahart Aussi ne fist on
/(folio 43r) Et lafeste saint laurens fut en lagrant court saint mtin / Et lafut grant foison depeuple
mais nulle mchance / ne si vendoit se non des fromaige et oeufs et de / fruit de toutes manieres selon

lasaison.

[Tuetey] (fut prinse [biffé] fermee) fut fermee

(518)

Item / lapremiere sepmaine de septembre lan mil iiij xxix / les quarterniers chun en son endroit comencerent / afortifier paris aux portes deboulevars es mais / qui estoient sur les murs affusters (le deuxième s biffé) canons / queues plaines depierres sur les murs redrecer les / fosses dehors laville et faire barrieres dehors / laville et dedens Et en icellui temps les armin / firent escrire les lettres scellees duseel du conte dalenco / Et les lets disoient a vous prevost deparis et / prevost des marchans et eschevins et les no (biffés) / nomoient p leurs noms et leur mandoient des / salus par bel langaige largement pour cuider / pour cuider (deux mots répétés) esmouvoir lepeuple lun cont lautre / et cont eulx Mais on appcut (sans signe en abrégé) bien le (avec signe en abrégé) malice / Et leur fut mande q plus ne gatassent leur / papiers pource faire et nen tint oncqs compte

[Tuetey] (ne gatassent leur) ne gastassent leur

(519)

Item lavigille delanativite not dame en septe / vindrent assaillir aux murs armina (biffé) deparis / les arminax Et le cuidoient prendre dassault / mais pou y conquererent se ne fu douleur / honte et meschef car plusieurs deulx furent / navrez pour toute leur vie qui p avant lassaut / estoient tous sains mais fol ne croit ja tant / quil prent pour eulx ledy qui estoient plains / desi grant mal eur et de si malle cance q / pour ledict dune creature qui estoit enforme / defemme avec eulx que on nomoit lapucelle / que cestoit dieu le scet (demi la ligne vacante) (fin de folio 119r)

(folio 119v) Le jour de lasaincte nativite nos dame firent coieurat / tous dun accord de cellui jour assaillir paris Et / sassemblerent bien xij mil ou plus et vindrent env / heure degrant messe ent xj et xij leurpucelle avec eulx Et tresgrant foison chariotz charectes / echevaux tous chargez degrans bourrees atois / hars pour emplir les fossez deparis Et comencerent / aassaillir ent laporte saint honoree laporte saint denis Et fut lassault trescruel et en / assaillant disoient moult de villenes polles (sans signe de abrégé) a / ceulx deparis Et la estoit leur pucelle atout son / estandart sur lecondos des fosses qui disoit aceulx / deparis rendez vous deparjhus a nous tost / car se vous ne vous rendez avant quil soit la / nuyt nous y entrerons par force vueillez ou no / Et tous serez mis a mort sans mercy voyre / dist ung paillarde ribaude et traict deson / arbaleste droit aelle et lui per la jambe tout/ out et elle de sen fourir ung aut persa / lepie tout out acellui qui portoit son estandart / quant il se senti navre il leva sa visiere / pour veoir aoster levireton deson pie Et ung / aut lui traict et lasaigne ent les ij yeulx / et lenavre a mort Dont lapucelle et leduc dallencon jurerent depuis que mieulx ilz / aymassent av pdu xl des

meilleurs homes darmes deleur compaignie lassault fut / moult cruel dune part et daut et dura / bien jusques a quatre heures apres disner / sans ce que on sceust qui eut le meilleur /ung peu apres iiij heures ceulx deparis pnd / cuer en eulx et tellement les verserent de canons / (folio 120r) et daut traict tellement qui leur convint p force reculler / et laisser leur assault et eulx en aller qui mieulx sen pouvoit / aller estoit leplus eureux car ceulx deparis avoient de / grans canons qui gectoient delaporte saint denis jusques / par dela saint ladre largement qui leur gectoient audos / dont moult furent espovantez ainsi furent mis a la / fuite mais homme nyssi deparis pour les suivre / pour paour de leurs embuches En eulx en allant / ilz bouterent lefeu en lagranche des mathurins emps / les pocherons et mirent deleurs gens qui mors est / alassault quilz avoient troussez sur leurs chevaulx / dedens celui feu agrant foison comme faisoient les / paiens aromme jad Et maudioient no (biffé) moult / leur pucelle qui leur avoit pmis que sans nulle / faulte silz gaigneroient acelui assault laville de / paris par force et quelle y gerroit celle nuyt et / eulx tous et quilz soient tous enrichiz des biens / delacite Et que tous soient mis qui y mectroiet (avec la signe d'abrégé, mectroient ?) / aucune deffence alespee ou ars en sa maison / mais dieu qui mua lagrant entprinse dolofernes par / une femme nomee judihe ordonna p sapitie autmt / quilz nepansoient Car lendemain yvindrent qrir / par sauf leurs mors Et le herault qui vint avec / eulx fut sarmente ducappitaine deparis combien / il y avoit eu de navrez deleurs gens lequel jura / quilz estoient bien quinze cens dont bn vc ou plus / estoient mors ou navres a mort Et vray est q / en celui assault navoit anglois (biffé) aussi come / nulz hommes darmes que environ xl ou l ang (avec la signe d'abrégé) / qui moult y firent bien leur devoir car laplus / grant ptie de leur charroy en quoy ilz avoient / admene leurs bourrees ceulx deparis le (avec la signe d'abrégé, leur) osteret (avec la signe d'abrégé) / car bien ne leur devoit pas venir de voulloir fe (avec la signe d'abrégé, faire) / telle occision lejour de lasainte nativite nre dame (fin de folio 120r)

[Tuetey] (ribaude) ribaulde (daut traict tellement qui leur convint) d'autre traict qui leur convint (sans nulle faulte silz gaigneroient) sans nulle faulte ilz gaigneroient (qrir par sauf leurs mors) querir par sauf conduit leurs mors (estoient mors ou navres a mort) estoient mors ou navrez a mort (cf: il y avoit eu de navrez, audessus de deux lignes)

(520)

Item environ iij ou iiij jours apres vint le / regent aparis et envoya de ses gens a saint denis / mais les arminalx sen estoient partie sans / riens paier deleurs despens car ilz pmectoiert / aceulx desaint denis deles paier des biens de / paris quant ilz soient entrez dedens mais / ilz faillirent a leur intencion pour quoy ilz / tromperent leurs hostes de saint denis et / dailleurs Et qui pis fut pour eulx le reget / et les pvosts de paris et des marchans et / eschevins deparis les orent en grant indigna (audessus on) / pour ce que si tost se randirent aux arminalx / sans cop ferir et en furent condampnez en / tsgrandes

amendes comme vous orez cy aps / declairer pour vray

[Tuetey] (quant ilz soient) quant ilz seroient de ses gens a Saint-Denis (et les pvoists de paris) et les prevost de Paris (pour ce que si tost) pour ce que sitost) (en tsgrandes amendes) en tres grans amendes

(521)

Item le vendredi derr / jour deseptembre lan mil iiijc xxix vint a / paris leduc debourgongne a moult belle / compaignie et tant grant quil convint que on les logast es maisons des mesnaigiers et en maisons vuydes dont moult avoit aparis / et avec porcs et vaches che (biffé) couchoient lers / chevaux Et vint p larue saint martin Et / amena aveclui saseur femme duduc debedfort / regent defrance qui avec lui estoit Et avoit devant lui dix heraux tous vestus de costes / darmes duseigneur aqui chun estoit et autant de trompettes Et en celle pompe ou / vaine gloire allerent par la rue maubue a / madame sainte avoye faire leurs oblacions / Et dela allerent asaint paul

[Tuetey] (que on les logast) que on les logeast (p larue saint martin) par la porte Saint-Martin [on lit en note 2: Ms.de Rome rue]

(522)

envir huit / jours apres vint lecardinal de vinsestre a / belle compaignie Et puis furent plusieurs / conseilz tant q en fin ala reqeste deluniversite / deplement et delabogoisie depar (sine signe d'abrégé, mais on lit deparis) fut ordonne / (folio 121r) que leduc anglois debedfort soit gouverneur de / normandie et le duc debourgongne soit regent / defrance ainsi fut fait mais moult laissoit / envis leduc debedfort ledit gouvernement si / faisoit safemme mais afaire leur convint et / quant les anglois furent ptiz qui ptirent a ung sabmedi ausoir et allerent asaint denis / faisant du mal assez leduc debourgongne / septi apres Et print treves aux arminalx / jusques a nouel ens cestassavoir pour la / ville deparis et pour les faulx bourgs dauto / tant seullement Et tous les villaiges dento / paris estoient apatiz aux arminalx ne hoe / deparis nosoit mectre lepie hors des faulx / bourgs qui ne fust mort ou pdu ou rancoe / deplus quil navoit vaillant ne si nosoit / revancher et si ne venoit rien aparis p /vie decorps dehomme qui ne fust ranconee (avec signe, mais on peut lire ranconne) / ij ou iij fois plus quelle ne valloit Lecent / depetis costeretz valloit xxiiijsp le molle / vijs ou viijs ij oeufs iiij d p ung petit fro (audessus: ge) / tout nouvel fait iiij bl leboess de pois xiiij / ou xv blans Et si couroit tres forte monnoye / ne il nestoit nouvelle ne pour toussains / ne pour aut feste en cellui temps deharen froys ne de quelque maree aparis

[Tuetey] (lecardinal de vinsestre) le cardinal de Vincestre (debedfort soit) debedfort seroit (debourgongne soit) debourgungne seroit (allerent asaint denis) allerent a Saint-Denis (print

treves) print trefves (pour les faulx bourgs) pour les faulxbourgs (le molle vijs) en note 2: Ms. de Rome xii, mais on lit vij

(523)

Item / leduc debourgongne quant il eut este env / quinze jours aparis il se departy lavigille / saint luc et emena avec lui ses picquars / quil avoit amenez envir vjm aussi fors / larrons quil avoit entre aparis puis que / lamaleueuse querre estoit gmce (comce?) et coe il pu bn / (folio 121v) en toutes les maisons ou ilz furent logez Et aussi / tost quilz furent partiz hors les portes depis / silz nencontroient homme quilz ne desrobassent ou / batissent Quant lavangard fut ptie leduc / debourgongne fist crier come une manniere / dapaiser gens simples que ce on veoit que les / arminalx venoient assaillir paris que on soy / deffendist lemieux quon pouroit Et laissa sas / garnison ainsi laville deparis veez la tout le / bien quil y fist pour laville Or nestoient point / les anglois nos amis pource que on les mist hors / dugouvernement

[Tuetey] (quant il eut este) quant il ot este (guerre estoit gmcee) querre estoit commencee (silz nencontrvient) ilz nencontrvient (que ce on veoit) que se on veoit

(524)

Item avant que nouel fust / et que les treves faillissent firent tant de maulx / les arminalx entour paris que onques les tiras / de rome ne larrons debois ne meurdriers ne / firent oncques plus grans tyrannies souffrir / axptiens quilz faisoient Et avec latyrannie / prenoient quanque avoient ceulx qui cheoiet / en leurs mains jusques a vendre femme et enf / qui les eust peu vendre Car le regent defrance duc de / bedfort navoit cause de sen mesler pour ce q / on avoit fait leduc de bourgongne regent / lequol ot en icellui termine grant tbulacion / Car come il ot fait tout bien et bel ordonner / et appeiller tout quanque puet et doit appteir (appartenir?) / a nopces de si grant prince Et comme tout / fut apreste quil natendoit de jour en jour q / ladame quil devoit prendre a femme qui est (avec signe d'abrégé) / fille du roy daragon laquelle sestoit mise / en mer Et quant elle lui et sa mesniee pres / delescluse aussi come a une veue Et que on / commancoit ja la feste desavenue il vint / ung vent qui lui fut si contraire que elle fu / eslongnee en pou deheure en ung loingtain / pais quil fut plus de xl jours avat q on sceust / (folio 122r) lacertenete en quel pais elle estoit arivee Et / lui convint par force en laterre son pere ariver en arragon Et apres fut elle ramenee au / duc debourgongne saine et sauve Et ce est / lacause pour quoi il entlaissa ainsi paris cellui temps

[Tuetey] (que les treves) que les trefves (fille du roy daragon) fille du roy de Portugal [en note: C' est la tort que le ms. de Rome qualifie cette princesse de "fille du roy d'Aragon", le ms. de Paris designe comme fille du roi de Portugal] (quant elle lui et sa mesniee) quant elle fuyt et sa mesniee [en note:

Ms.de Rome “lui” (en laterre son pere) [ms.de paris: la terre de son pere] (ariver en arragon) [on
lit dans Tuetey meme: ariver en Arragon]

「パリの住人の日記」校注(3)

堀越孝一

1929年(新暦)の記事群が(494)の記事からはじまると判断したわけは、「前記の年、新酒の出来は」と妙ないまわしが見られるからで、これは新暦で「昨年、新酒の出来は」と読む。ふたつめの記事(495)に「2月12日」と日付が見える。

「セルヴェーズ」はビールで、新暦で前年の10月の記事に、パリにビール醸造業者が30軒も店を出して、それでも足りなくて、サンドニやそこらからビール売りが大勢出張ってきたと書いている(487)。ブドウ酒が出来なかったからで、ましてや年明けで、ブドウ酒が不足し、ビールの消費量が増えて、消費税がかさんだと権兵衛は嘆いている。

暮らしが権兵衛の関心事で、「オルレアンの戦い」や「リエージュ戦争」のうわさを伝える権兵衛の文章に暮らしが影を落とす。(498)の記事がおもしろい。だからか、「このころ、人がいうには、レール川縁にひとりのプセルがいた」とジャン・ダール登場のニュースを伝えながら、「大量の食糧を運んで」とか、「なにしろ食糧がたいそう不足していて、じつに3プランもするパンを食べていた」などと、なにしろそちらの方向に関心が流れる。(503)の記事である。

1929年の9月、「レザルミノー」が「かれらのプセルをともなつて」パリを襲撃した。うわさの聞き手の権兵衛は実見者となる。(519)の長々しい記事である。

ここにいたるまで、「プセル」は権兵衛の関心の外で行動している。

当時ブルツへ在住で、おそらく商人の法律代理人の仕事をしていたヴェネツィア人が、父親に9通の手紙を宛てていて、5月10日付でオルレアンの陣の成り行きを報じておいて、第2信に、6月4日付ブルターンからの幾本かの手紙の紹介ということで、「ジェネタ・ポンツェラ」に触れている。ブルターンからの回船が積んできた手紙の束に入っていたのだろう。

ブルターン方面では、すでに「ジェネタ」、ジャンネット(ジャンの指小辞)の名が知られていたらしく、7月16日付の第3信と7月27日付の第4信は、王太子が「ポンツェラと2万5千を越す軍勢をひきつれて」、ランスに入り、大聖堂で王聖別の秘蹟を授かったことを報じている。

1429年の権兵衛の日記には「ジャン」の名前と「ランス」が抜けている。人の名と土地の名が落ちている。「むすめ」はオルレアンから来た。「むすめ」は「なにしろレザルミノーに随伴する、ひとがラプセルと呼んでいる、これが何物かは神のみぞ知るだが、くだんの女の形をした一被造物」であった。

キーワード【オルレアンの陣、レ・ザルミノー、ラ・プセル、プレヴォー、摂政】

Pari no Junin no nikki: collation and annoation (3)

Koichi HORIKOSHI

This paper offers a collation and annotation of the items through the year of the new calendar 1429. The first item 494 contains no date. But the strange phrase “de la dicte annee” means “of the last year of the new calendar”. In the item 495 the writer of the journal offers the date “le xiie jour de fevrier”. Consequently he wrote the item 494 in January or in early February.

The writer of the journal has a variety of interests in daily life. This kind of interests overshadowed the description of the rumour of the siege of Orleans or the Liege war. In the description reporting the debut of “la pucelle” in the siege of Orleans he inserts the phrase as “que ung homme eust bien menge pour trois blans depain ason disner”

Through the items of 1429 he doesn't call “la pucelle” *jeanne* or *jeanette*. He doesn't point out the ceremony of sanctifying the dolphin (in french: *dalphin*) as the king at Reims. Another reporter as an Venetian who stayed in Brugge at that time mentioned the name “*zeneta*” in the letter to his father in Venice dated 10 May and reported that ceremony in the letter dated 27 July. For the writer of the journal “la pucelle” is but one element in the description. He took note of her rumour, because he heard it. Early September he saw her very closely in the army raiding Paris. He described her closely, because he saw her closely. He offers her presence in the record as he hears and sees her.

key words: *lost devant orleans, les arminax, la pucelle, prevost, regent*